

特 231

720

# 郷土讀本

鶴岡市教育會編纂



# 始



特 231  
720



土

讀

本



反報

始末

從之位伯壽酒井忠良書



はしがき

一本書は鶴岡市小學校上級兒童、同青年學校生徒の課外讀物、及び一般市民の讀物として編纂したもので、郷土の理解認識を深め、郷土愛の精神に培ひ、郷土文化の創造擴充の資たらしめんとするものである。

一材料は主として鶴岡を中心とし、全莊内に及ぶ郷土の歴史・文學・偉人の言行傳記並に自然文化の中より情操教育に資し、莊内魂を涵養するに價値あるものを採擇した。

一排列は大方年代順を本體としたが、相關聯するものは前後を斟酌して其の連繫を保たしめ、全體としての統一性と一貫性を持たせた。

昭和十五年十一月

鶴岡市教育會

目次

一出羽の三山……………	一	十一 鈴木今右衛門……………	六三
二 鶴ヶ岡城……………	三	十二 小關三英……………	六
三 明治天皇御巡幸……………	一九	十三 田邊龜次郎の大矢數……………	七三
四 莊内神社……………	三三	十四 清川八郎……………	七九
五 加藤忠廣……………	三七	十五 齋藤外市……………	八九
六 酒井忠徳……………	三三	十六 高山樗牛……………	九五
七 本間光丘……………	四三	十七 莊内の温泉……………	一〇四
八 芭蕉……………	四五	十八 郷土巡り……………	一〇八
九 致道館……………	五一	十九 鶴岡市……………	一九
十 天保義舉……………	五	二十 莊内……………	一三三

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters '目次' and '一' visible at the top.)

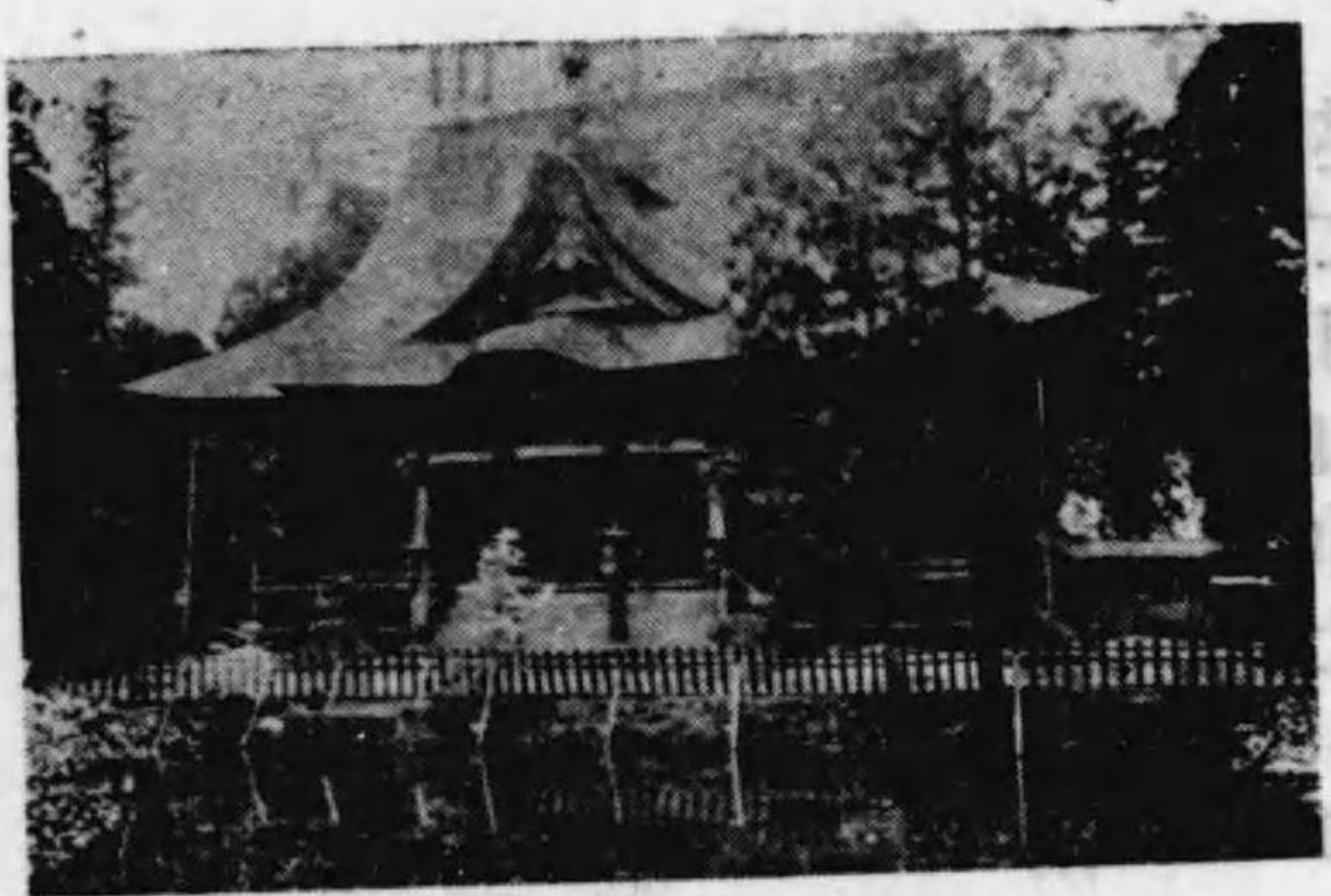
## 郷土讀本

### 一出羽の三山

古來東北の總鎮守として、又淨めの山ヤマ行の山として名高い月山・羽黒山・湯殿山を出羽の三山と稱します。官幣大社月山神社は月山の頂上に、國幣小社出羽神社は羽黒山の森に、國幣小社湯殿山神社は湯殿山の溪谷に御鎮座になつて居ります。しかし月山・湯殿山は高山大澤で氣象の變化が多く、且つ積雪が深いので、何時でも登拜が出来るとは云へない爲に、羽黒山の出羽神社に月山・湯殿山の二神を合祭して之を三神合祭殿と申します。

さて月山神社の御祭神月讀命は、畏くも天祖天照大神の御弟神で、其の御神徳もまた皇大神に次いで偉大であらせられます。皇大神の御

統治を輔佐し奉り、又滄海原の潮の八百重を治め、夜食國を司りなさい



三山神社合祭殿

ます。出羽神社には伊氏波神を祀りますが、社傳には倉稻魂命と申し奉り、五穀をはじめ養蠶牛馬等は皆此の神の御神徳によつて顯れまし  
たので、衣食住の根源の神として萬民の尊ぶところでありませう。湯殿山神社の御祭神は大山祇命で、山を司る神であります。山に生育する木材・礦物はもとより、氣候の調節、水源の涵養など、國民の生活に大切な御功德があります。又社傳に大己貴命・少彦名命を祀るともありますが、此の神たちは共に力を合せて國土を開拓し、又病を醫し、災を攘ふ方法を教へて人民の幸福をおはかり下さいました。かやうに御神徳が宏大無邊でありますから、三山は古來、朝廷の御

崇敬が極めて篤く、屢、神階勳等の陞叙がありました。

然らば斯様に尊い三山の大神が何時此處に御鎮座になつたかと申しますと、今から一千三百年の昔、第三十二代崇峻天皇の御子に蜂子皇子と申し奉る御方がありましたが、故あつて宮城を御遁れになり、海上から當國八乙女の浦に御着きになりました。傳説に據れば、時に三足の鳥があらはれて皇子を導き申したので、鬱蒼とした千古の森林と生ひ繁つた荆棘を踏み分けて、羽黒山の阿久谷に御着きになつたと申します。皇子は其處に尊嚴な大神の出現を感得遊ばされて出羽神社を御創建になり、次で月山・湯殿山をも御開きなさいました。かくして皇子は森林を拓いて耕作の法を教へ、疾病を醫して人々の苦難を救はれました。其後皇子は羽黒山の北方皇野に草の庵を結び、日夜艱苦の御修行遊ばされましたが、舒明天皇の十三年八月二十日薨去なされました。後、文政六年朝廷から照見大菩薩の勅號宣下があり、御墓は羽黒山

上にあつて宮内省が管理して居ります。皇子を祀る神社は山上に御鎮座の攝社蜂子神社であります。

蜂子皇子の御修行の道は、後世の所謂羽黒派の修験道となりました。修験道は今日では佛教の一派の如く思はれて居りますが、元來は日本民族の原始的信仰を中心としたもので、深山幽谷に入つて心身を鍊磨し、神人合一の境地に至る修行であります。高尚な理論はさておき、實修を重んじ、験得に力を注いだ道であります。後には支那の神仙の術や老莊の思想などが加はり、更に佛教の頭陀の思想によつて誘導され、漸次發達變化して來たのであります。平安朝になつて眞言密教が隆盛を極めたので、修験道も多く其の行事を實修することとなつて、三山は永く密教の色彩に掩はれ、神佛は全く習合して社僧山伏が神社に奉仕する事となりました。昔は社領が廣大で、山上山下は勿論、地方に散在の寺院、宿坊七千餘を算し、衆徒は八方に散在して其の勢力は中々旺盛でありました。吾妻鏡や北條九代記などに羽黒山伏の威勢の盛んであつた事が記されて居ります。

第七十代後冷泉天皇の頃から奥羽が亂れて屢、賊徒討伐の事があり、源義家・頼朝等が戰捷を祈願した報賽として幾多の堂社を建立しまし

た。羽黒山麓の黄金堂は頼朝の建立で現在國寶になつて居ります。承久の變に、後鳥羽上皇の謀臣尊長法印が羽黒山總長吏職に補せられたのは、東北の大所たる羽黒山の衆徒を頼みとしたものであります。



又北畠顯信が羽黒山伏を頼みとして南朝恢復の壯舉をはかり、立谷澤城に籠つて賊軍を苦しめたのは、隠れもない事實であり、羽黒山伏雲景うんけいが顯信に従つて京都に上り、貞和年中その夢中に見た未來記を上つて、天下の未來を豫言したことが太平

記に見えて居ります。室町時代には莊内の領主武藤氏が武威を以て一山の權を握り、左京大夫政氏は自ら羽黒山の別當職となりました。室町時代の末、所謂戰國時代には群雄各地に起つて一山其の權力爭奪



の巷と化し、社殿堂塔も荒廢して、衆徒は戎衣を着けて戰場に彷徨する有様となりましたので、三山の統一が全く亂れ、各登拜口も獨立の姿となつて、紛亂が止む時なかつたのであります。武藤氏が滅び、上杉氏が代つて羽黒山に勢力を得、その歸衣僧清順が全山を支配しましたが、間もなく最上義光が莊内に勢力を得て、黒印千五百石を寄進して崇敬の誠を盡しました。元和八年酒井忠勝が領主として莊内に入るや、自ら來つて羽黒山に參拜しました。第五十世別當執行天宥法印は性剛毅で果斷、三山分離の難局を打開して往時の隆盛に回さうと、從來眞言の法流であつた三山を天台に改宗し、東叡山の威光をかりて事を一舉に解決しようとししました。天宥は又慶安元年に羽黒山に石坂十餘町を敷き、祓川に不動瀧を落しました。其の宗教上の改革は遺憾ながら成就しませんでした。今に中興の開山と仰がれ、神に祀られて居ます。三山は山伏修験の奉仕以來、もとより本寺としてはなかつたが、天宥別

當が事によつて伊豆の新島に流されてから、上野輪王寺の支配に屬する様になつて來ました。かくて王政維新の改革となるや、數百年の間神佛が習合して僧侶山伏の奉仕に任せた三山は漸く古の姿に立返りました。

松尾芭蕉が三山を順拜したのは元祿二年六月の事で、南谷の精舎にやどつて心ゆくばかり神山の靈氣に打たれました。三山順禮の句に

雲の峯いくつ崩れて月の山

涼しさやほの三日月の羽黒山

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

三山の例祭は七月十五日で、俗に華祭とも云はれ、氏子から奉獻になつた大造花を先頭に、三神社の御輿が鏡ヶ池を一周します。數萬の參拜者が造花を争はうと押し寄せ、物凄い活劇が演ぜられます。特殊神事の田植祭は五月八日で、五穀の豊熟を祈願し、伶人達が優雅な田舞を

奉仕します。松例祭は一月三十一日に行はれますが、前以て二人の松聖が任命され、羽黒山上の齋館で百日の間嚴肅な行をして國家安穩・五穀豐饒・悪魔退散を祈願します。此兩松聖に屬する若者が各百五十名位あつて事毎に勝負を争ひます。枯草千三百三十三束を以つて恙といふ悪魔の形を二體作つて大松明と名づけ、之に大綱をつけて所定の所に曳いて行つて焼き捨てます。此の不淨の火を打ちかへる爲に火打替の神事が行はれます。積雪一丈餘の嚴寒に裸體のまま、松明を打ちふり勝負を争ふ有様は壯觀の極みであります。

三山の登拜口は澤山ありますが、羽黒口は現在三神社々務所のある處で、普通表口と云はれます。鶴岡驛で下車し、手向村に向つて進むと朱の大鳥居が神路丘の緑の松に映じて屹然と立つて居ります。高さ七丈、山形市の吉岡鐵太郎氏の寄進であります。手向村に入り、石の鳥居をくぐると、左手に見える國寶黃金堂は源頼朝の建造にかかり、三十

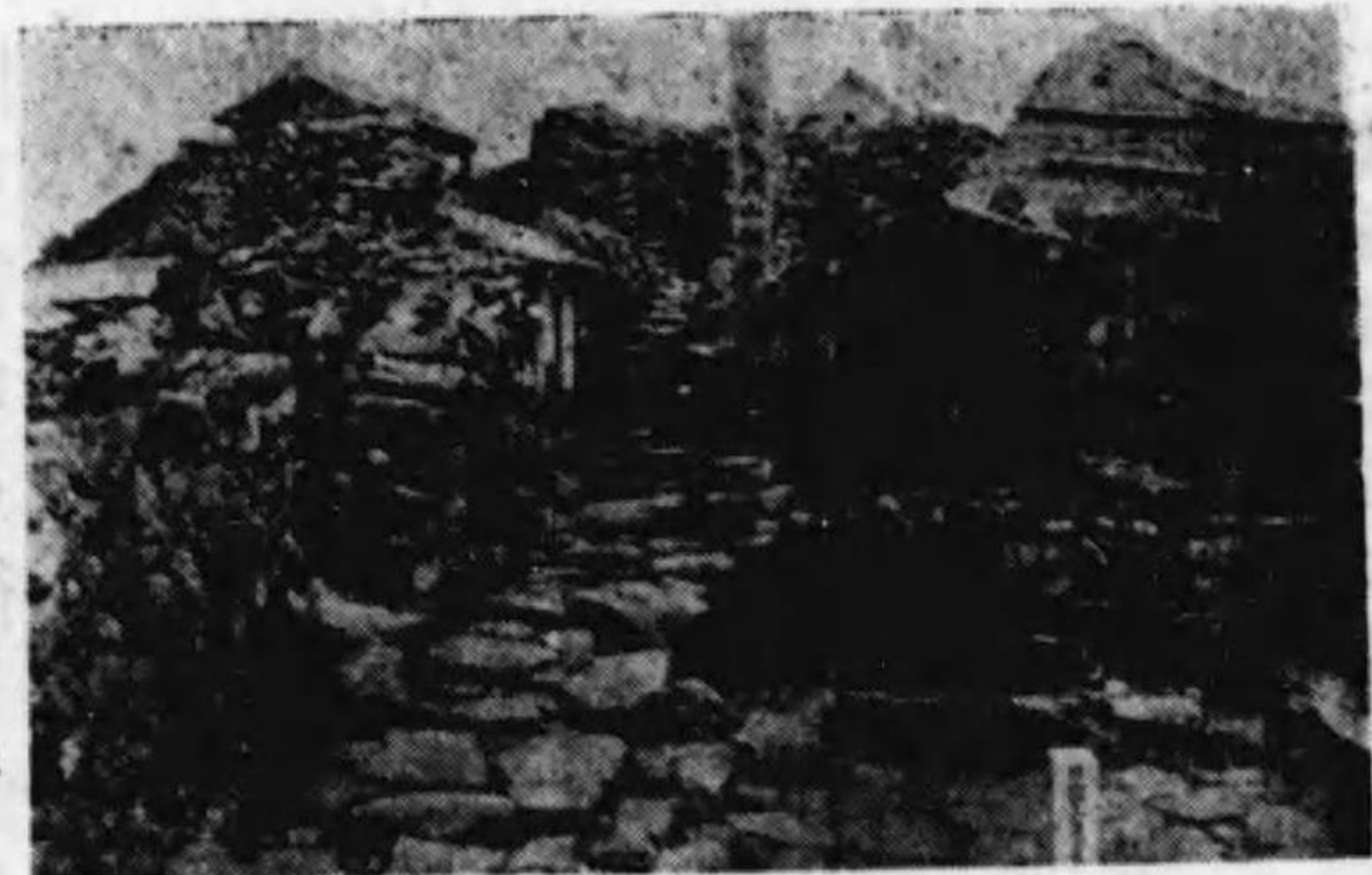
三觀音を安置して居ます。社務所の前から隨身門を入り、石階を下ると祓川の清流があります。參拜人が禊をする處であります。國寶五重塔は白木造の古雅な建築で、今を距る事五百六十餘年の再建であります。一の坂二の坂と、坂道は登る



ます。一の坂二の坂と、坂道は登るに從つて益、急になります。一坂を上る毎にそれ〴〵休憩所があつて、莊内平野が一望の下に見渡されま

す。三の坂に近く舊別當屋敷があり、又天宥水から三町奥には俳聖芭蕉で名高い遺蹟があります。山頂に近い齋館の茶室は香嵐亭と稱へ、眼下、立谷澤川の清流に臨み、雲際遙かに鳥海山の靈姿を拜し、萬頃の沃野の彼方、綿々と連なる砂丘を越して一碧の日本海を望むなど、實に山内一の佳境であります。羽黒山上、

瑞垣内に仰ぐ大社殿は出羽神社で、高さが九丈三尺あります。社前の鏡ヶ池からは多くの古鏡が出ます。朱の鳥居をくぐつて蜂子皇子の御墓を拜し、更に老杉の間を真直に進むと、吹越の参籠所に出ます。此處は古來羽黒山伏が峯入して難行苦行をした所であります。荒澤寺を経て野口に出ると、眼界がばつと開けて來ます。芭蕉の三山句碑を見傘骨海道坂大満と草原の間を進み、更に神子石・強清水・狩籠と山毛櫸の樹林が繁つて居る山道を通り、平清水・合清水と登つて行きます。至る處に休憩所があり、冷たい清水が登拜者の喘ぎを癒やしてくれます。合清水は馬返で、此處から上は全くの高山で、岩石を踏んで登ります。御田原は稍、広い平坦な處で、御花畠の美觀が目醒むるばかりです。高山の雲の去來に興じつゝ、佛水池の小屋を過ぎ、奇岩怪石の堆い間を通り、行者戻から大峯を経て頂上の月山神社に達します。月山は地理學上の所謂アスピーテ式火山で、割合に厚味のある山に噴出した、裾野を



月山神社

ながら下りますと、装束場と云つて、湯殿山詣りの参拜者が清淨な草鞋にはき替へるので、ぬぎ捨てた草鞋が山と積まれた處があります。金月光水



湯殿山

月光の急坂を鐵鎖や鐵梯に縋つて下りると、湯殿山神社の御寶前に達します。此の邊り一帯は古來神聖な靈境として、人々が尊び且つ畏れた處であります。梵字川の溪流が岩を噛み、淵となり瀨となつて下る間を暫らく行き、仙人澤・八光澤・笹小屋を経て山麓の田麥俣に出ます。さて三山の神威の及ぶ限は何處も三山の氏子であり、三山は其の氏神であり、産土神であります。現在生きつつある氏神と氏子との關係であります。此の意味からしても、三山の大神に參拜する事は、國民にその魂の本源に對して靈的體驗をなさしめる第一義的な行事である事が明になつて來るのであります。

夏季七八月の頃、莊内三郡は勿論、遠い國々から信心を籠めて群集する所謂道者の連中が三山に參拜するには、先づ心身の清淨から始められます。各部落にはそれぞれ行屋があつて神壇が設けてあり、參拜に先だつてまづ行屋に參籠し、精進潔齋します。一切の肉食を斷ち、朝夕三山の大神を拜して心身共に清淨ならん事を念願とし、やがて白衣に注連寶冠をつけて、參拜に出立ちます。三山の麓には宿坊があつて參

拜の前夜には此處に參籠して、一層心身の淨化を期します。三山には參拜者の唱へる拜辭があります。

祓詞 毛呂毛呂能都美計賀禮波羅比美增疑天須賀須賀志

神詞 登保都賀美惠美多滿閉伊豆能美多滿袁佐岐波邊多滿閉

賀詞 安滿都比都疑能佐智衣滿佐武古登安米都知能牟多登古志閉那留邊志

綾瓊綾瓊奇久尊登月山大神乃御前袁拜美奉留

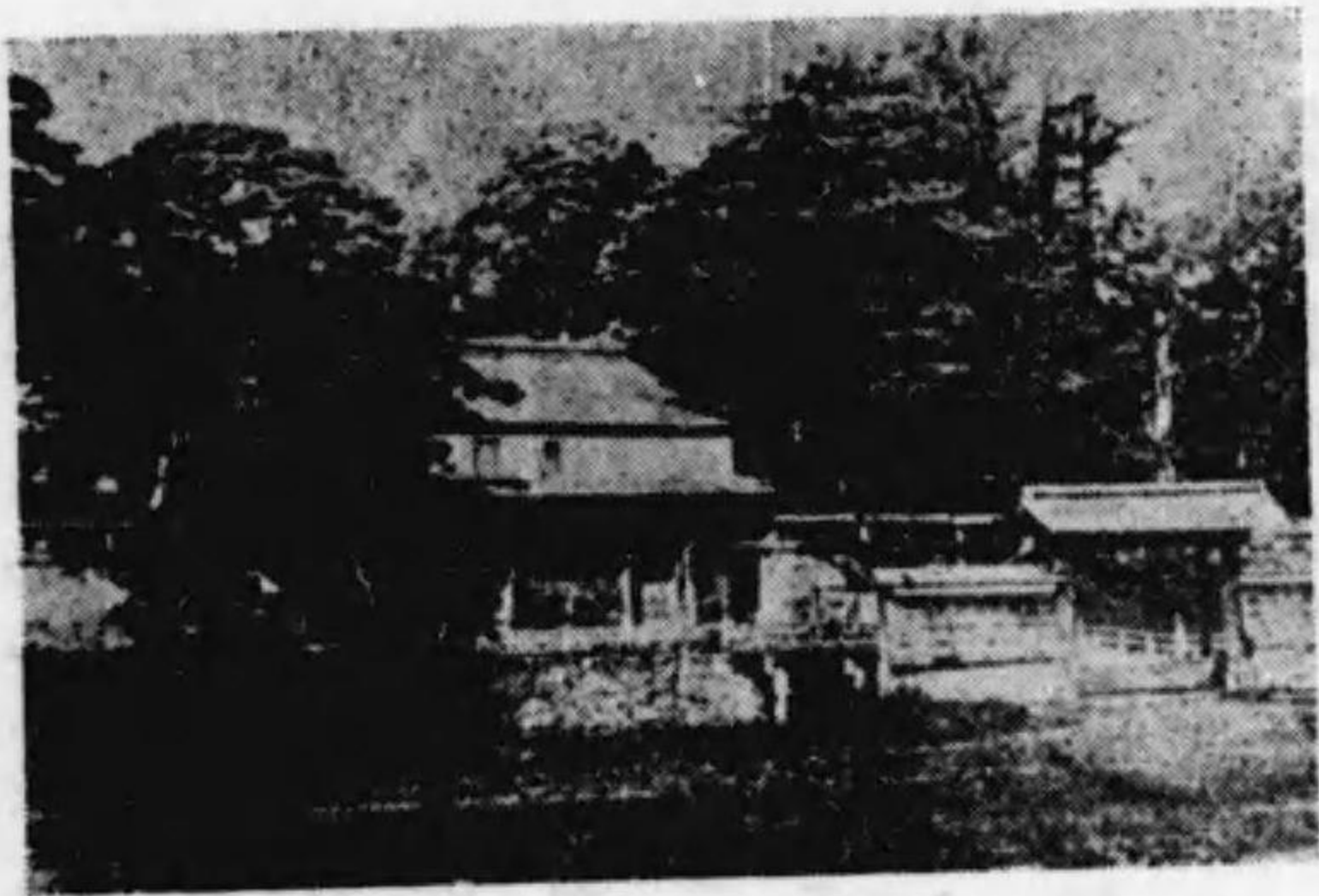
綾瓊綾瓊奇久尊登出羽大神乃御前袁拜美奉留

綾瓊綾瓊奇久尊登湯殿山大神乃御前袁拜美奉留

之を唱へる状態は全く肺肝から迸つて所謂無念無想唯々神人合一の氣分に酔うて居るばかりであります。

## 二 鶴ヶ岡城

豊太閤が金城鐵壁と築いた大阪城が落ちて間もない元和八年十月、酒井家第三代の祖忠勝公は、徳川四天王の家柄をもつて、奥羽諸大名の



城門

抑へとして信州松代から此地に封ぜられた。此處はもと東に大梵字の激流を控へ、西には其の古川の跡を存した要害の地であり、北に烏海の秀嶺をのぞみ、東はるかに月山の雄大な姿を仰ぐ絶好の勝地であつた。初めて城の築かれたのは、いつの時代か明かでないが、鎌倉時代に武藤氏が大泉の地頭として此處に居を占め、莊内の政柄を握つてゐたが、その後西の河跡は次第にあせて田に變り、大梵字の流れは遠く東に去つて又昔日の地の利なく、武藤氏はその中世に至つて、遂に高館山の麓、尾浦の地に居城を移

してしまつた。

城の名も、大梵字が大寶寺に變り、慶長八年、酒田の東禪寺城が龜ヶ崎

城と改められた時、此處は鶴ヶ岡城と呼ばれる事になつた。城主も武藤氏から最上氏へと移り、元和八年酒井氏の居城となつたのである。城池もその始めはまことに狭く、後の本丸の地のみであつたのを、山形城主最上義光が慶長六年莊内全土を平定し、こゝを隠居の城とする爲めに二の丸を修め、城下町の體裁を作り、三日町・十日町・五日町などといふ山形の町名を此處にもつけたのである。しかしまだく、小規模であり、且つ粗末なもので、本丸の土手には所々に生垣が結ばれ、二の丸（今の公園の西、北廣場）の家中屋敷には、六七軒の藁屋が雜然と散らばつてゐたに過ぎなかつた。

忠勝公は尾浦の城を通り、鶴ヶ岡に入つては見たが、引連れた數百の家來は住むに家のない有様、公は暫く外濠の側の御花畠御殿（今高畑町平田櫻桃園）に御滞在、二百人の足輕は大急ぎに長屋を建て、雨露を凌いだ。これが今の二百人町の地で、町名もそれから起つたものだ。家

老も平侍も足輕も皆懸命にお城の普請に働いた。士族町を擴げて新に三の丸を修め、其の入口の木戸は、大督寺のお靈屋・御花鳥御殿・代官町・石橋・五日町橋・三日町橋等、吉の字になぞらへて、都合十一口とすることにした。濠は切り開かれてきれいな水が湛へられ、石垣はつかれ、堤の上にはお城の萬歳を祝ふ常磐の松が植ゑられた。御代々崇敬の厚かつた稻荷社が、酒井家武運長久の護りとして信州松代から移され、二の丸の隅土手の上に建てられた。

いつの日も朝早くから、お城の内外には石を刻む槌の音、賑かな掛聲、斧の音などが響いてゐた。豊穰の秋が幾度か廻つて、お城は立派に出來上つた。今の大寶館前に架けられてあつた太鼓型の中のお橋の上を、槍を立てさせ、傘を持たせ、大刀をたばさんだ袴姿の凛々しい武士が繪の様に渡つてゐた。

二十餘萬の領民はみな太平の春を謳ひ、いやが上にも各の仕事を勵

み續けた。御城下町も廣く美しく整つた。馬場町や鷹匠町は三の丸の家、中屋敷となり、新に上肴町、新町などが南西にのびた。

黄金の波はお城を中心に年々擴がつて行き、何處の村にも豊穰の祝が賑かに行はれた。領民たちが常磐の松の間から、朝日に映えるお城の蔓を眺めた時、どんなにか嬉しく心強く感じた事であらう。

時は過ぎて明治の世となり、北の國にも春が訪れる頃、戊辰の戦が起きて人々は皆不安に襲はれた。士族町は勿論の事、方々の家では悲壯な別れが告げられた。出陣の人々は、祖先の墓前に覺悟を誓つた。宵闇の下に黒くそばだつお城に向つては、祖先以來の恩義を思ひ、斷じて御期待に背くまじと雄々しく堅い決心を誓つた事であらう。

いよいよ出發の朝は來た。大手前の廣場に集つた彼等は、見をさめになるかも知れないお城を今一度見直した。嚴めしく建てられた大手の御門、お濠の上に伸びた松の緑にも限りない愛着を感じた事であ

らう。併し彼等は雄々しい意氣に燃えてゐた。半歳の間、目にあまる大軍にたいし、一步も我が莊内の領域に入れしめなかつた。そののち、明治天皇の大御心を拜するに及んで、城地を明け降を願つた。その後明治四年には、全國の藩を廢して縣を置かれることになり、明治八年にはお城を取こぼつことになつた。藩主の邸宅、役所をはじめ總ての建物は取除かれ、土堤は壞され、濠は埋められて、後には百間濠に稻が植ゑられ、外濠の埋跡に人家が建ち、花菖蒲畠が作られた。八米もあつた三の丸の外濠さへ、今では市營グラウンド側、大督寺裏、上肴町裏、高等女學校裏などに、僅かにその面影をととめて居るに過ぎない。

領民は祖先の抱いた魂と昔の恩義とを永遠に忘れまいとして、酒井忠次・家次・忠勝三公の靈を本丸跡に祀つて、莊内神社と稱へた。大正十三年には中興の英主忠徳公を之に合祀して崇敬の誠を捧げてゐる。星移り、人變り、人心も亦變つたが、御濠を巡る老杉・古松の大樹のみは今

猶儼然と聳えて、三百年のうるはしい歴史を物語つてゐる。

### 三 明治天皇御巡幸

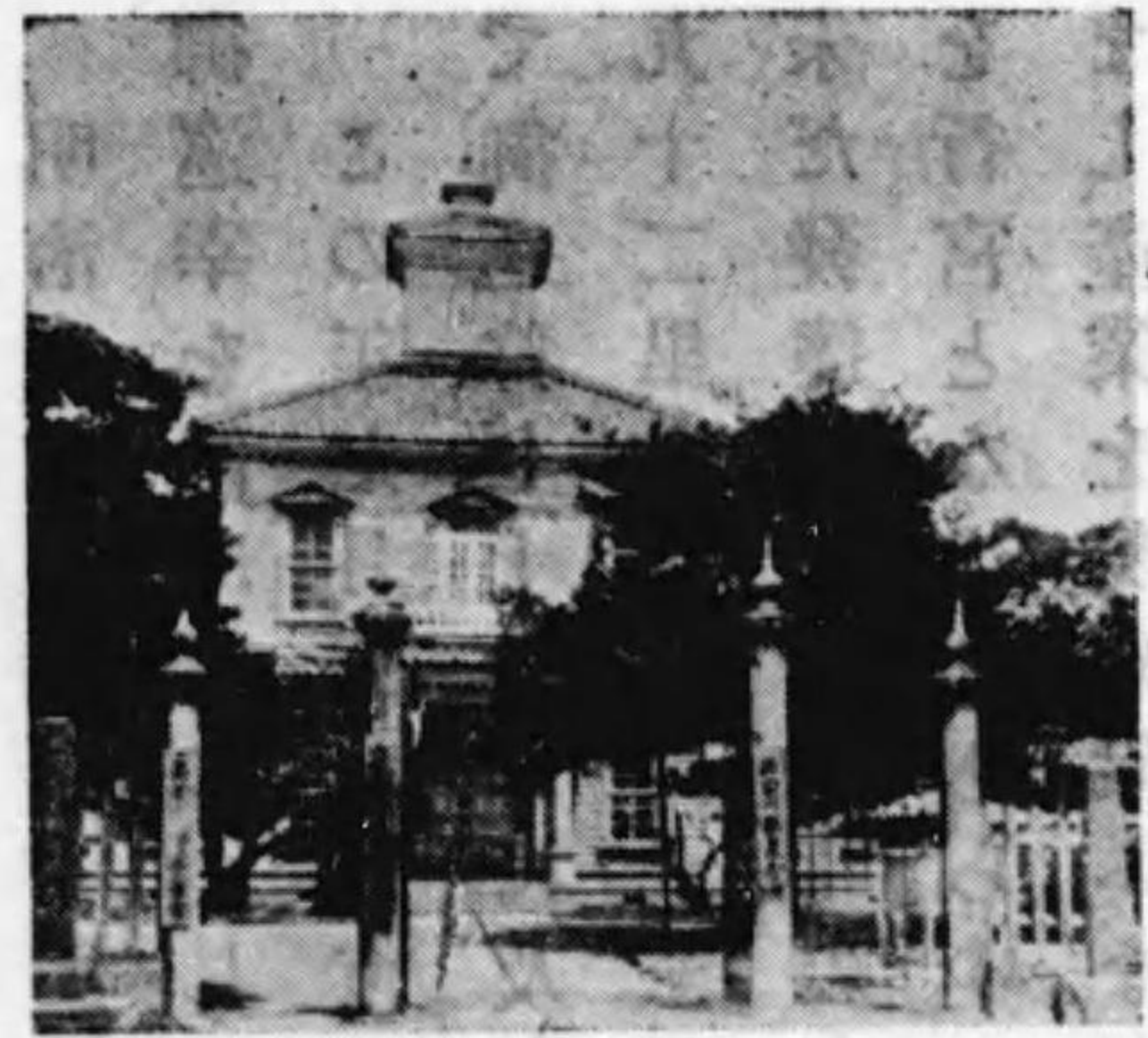
明治十四年、親しく民情を知ろしめす思召しから、奥羽及び北海道へ御巡幸を仰出されました。

この年七月三十日宮城御發輦より、十月十一日還御あらせられるまで、御巡狩七十餘日に及び、季節は炎夏より涼秋に亙り、里程は陸路四百九十二里、海路三百十二哩に及びました。王政復古以來、日尙淺く、交通未だ發達しない當時の事として、峻坂を御板輿で踰えさせ給ひ、山村僻邑を行宮となされ、あらゆる御不便を忍び給ふ中にも、忠貞を賞し、學を勵まし、産業を奨め給ふなど、聖恩の鴻大に感泣しないものはありませんでした。

秋田縣より本縣に御入りになつたのは秋風のそよぐ九月二十二日

で、新庄・清川等の行在所を御過ぎになり、鶴岡に御着遊ばしたのは二十四日午前十一時でした。此の日夜來の雨も漸く霽れ、羽黒湯殿の諸峯

が欣然と鳳輦を迎へ、さながら聖壽の萬歳をことほぐ姿でありました。



舊西田川郡役所

強、東北の雄藩として聞えてみました。

抑、歴史あつて以來、この邊陲の地に聖駕をお迎へするのはこれがはじめてで、市民の歡喜は勿論、この盛儀を拜まうとして遠近の村々から

行在所は西田川郡役所をもつて之にあてられました。當時鶴岡は西田川郡に屬し、戸數三千七百餘戸、人口二萬、二千百餘人、中學校の生徒が七十四人、小學校の生徒が千三百餘人に過ぎませんでした。酒井氏累代の治下に屬し、風俗敦朴、士馬精

集つて來た老若男女の群で沿道は滿ちあふれ、皆有難涙にくれるばかりでありました。夜は戸毎に紅燈を掲げ、晝を欺くばかりの賑ひで、これ迄になかつた盛觀を呈しました。

大君のけふの御幸を出羽なる

神もうれしとおもはざらめや

大君のかしこき御代にながらへて

たぐひだになき御幸にぞあふ

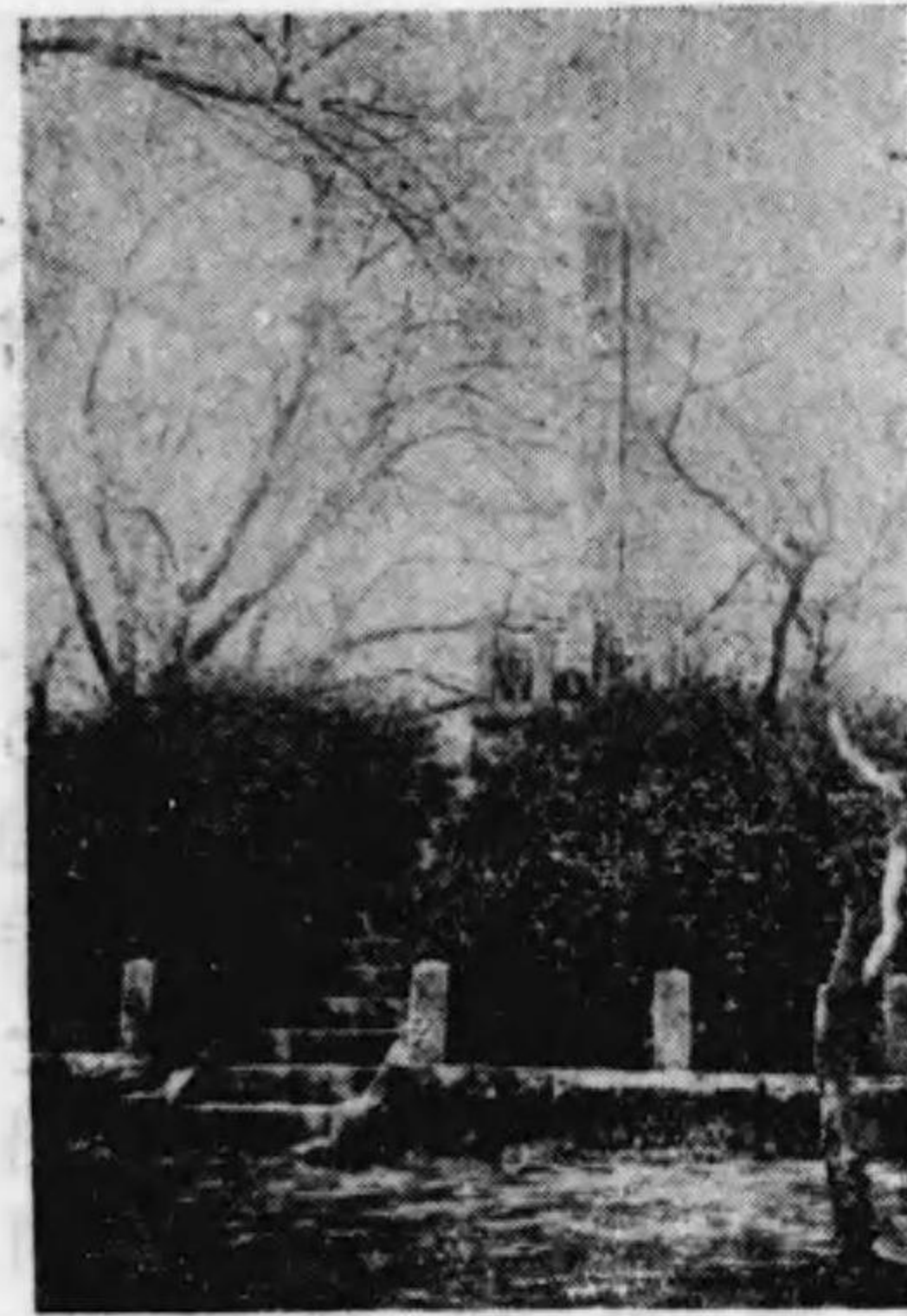
花にくらし月にあかして老いゆくも  
のどけき御代の恵なりけり

これらの歌によつて、當時民草の溢れる感激の情をうかがふ事が出來ます。

行在所に御着きなされた陛下には御晝食の後、午後二時三十分、朝陽學校に御臨幸あらせられ、各教場を御巡覽の上、中庭にて生徒の體操を



見そなはせられ、又廣間で生徒の講讀を聞き召されました。此光榮に浴した生徒は中學生松平久徳、小學生小林直生の二人でありました。次いで、地方の物産・書畫・寶器を陳列した博物館や鶴岡盛産社製絲就



明治天皇御駐籠の地

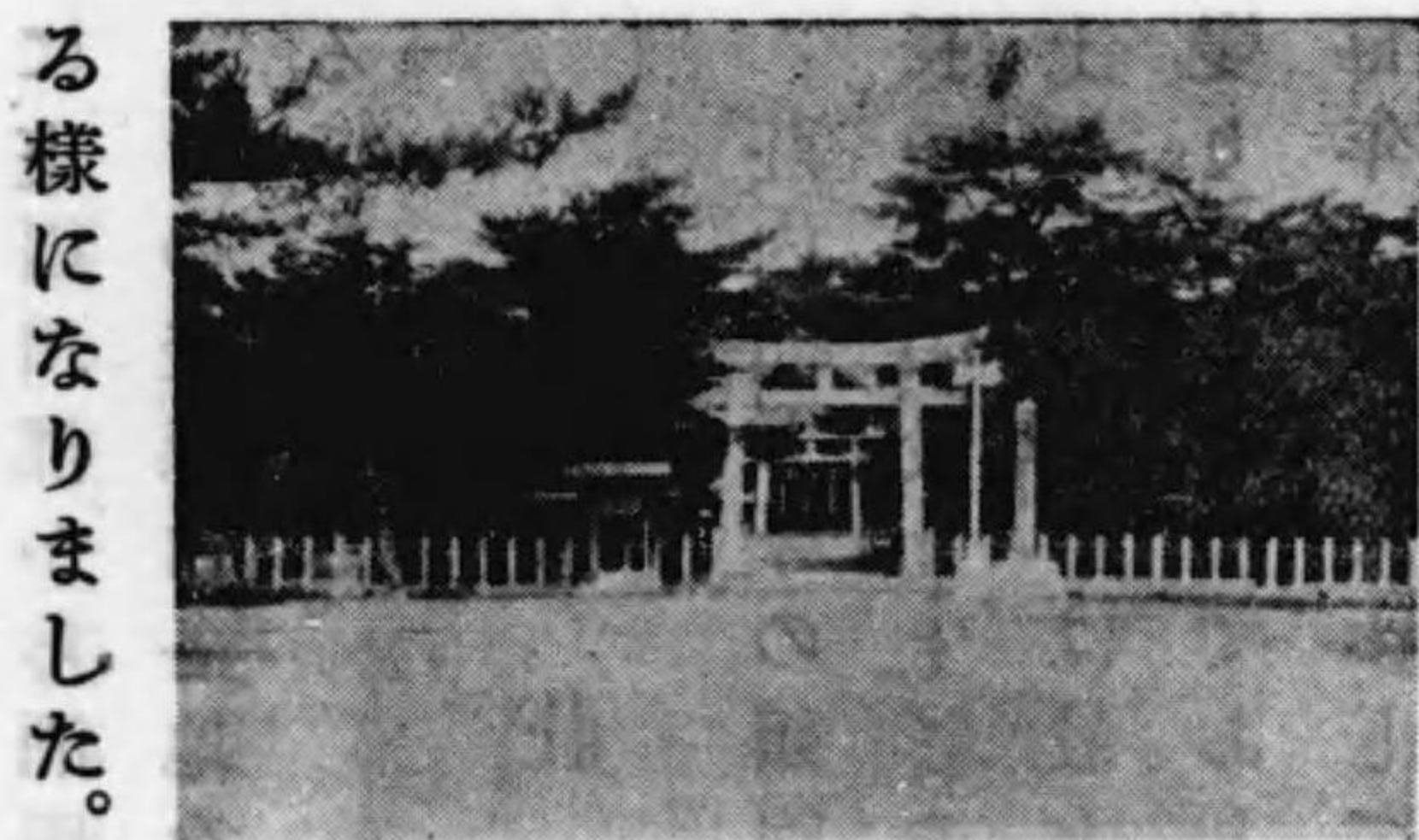
業の状を見そなはせられました。やがて午後三時五十分、公園に行幸あらせられ、士族百二十四人が調馬・擊劍を演ずるのを御覽遊ばされ、殊の外御感あらせられました。

九月二十五日は秋空に雲もなく、一入晴れやかに明けました。この日、舊藩士族が經營する松岡開墾場に北白川宮能久親王をお遣しになり、廢藩の後、士族が商利を營むを屑しとせず、三千餘名協力して木を伐り、荆を刈り、開墾したといふ高潔の美績を御賞めになりました。

かうしてこの日午後一時といふに、何萬といふ赤子が感泣奉送の中に、東田川郡から酒田への御巡路で御發輦あらせられました。その後、縣内各地を御巡幸遊ばされ、縣民齊しく榮光に輝き、御惠にうるほひました。

#### 四 莊内神社

莊内即ち今の鶴岡・酒田の二市、及び東西田川・飽海三郡の地は文祿・慶長の初頃、最上・上杉の兩氏が互にその勢力を争つて居ました。或時は上杉氏に、或時は最上氏に屬して定まつた主もなく、全くその日々に變り行く有様でありました。随つて土地は荒れ、人心はすさび、人口も毎年の様に減少して次第に淋しさを増していくばかりでした。この廣い莊内の沃野と澤山の人民は、一日も早く良主を迎へて安心して暮されることを願つてゐました。



莊内神社

丁度其の頃、元和八年八月、この莊内に大きな使命を持つて信州松代から轉封されたのが酒井忠勝公でありました。莊内の天地は此の良主を迎へ、やがて大きな發展を遂げようとする力を内に抱いて蘇生したのであります。藩主は見るからに肥沃な大平野と東北特有の純朴な領民とを深く愛しました。そして次々と開拓の手を伸ばされ、年一年と實のりの秋は賑はひ、士人はその恩に感じ、領民はその恵に懐き、争つて其の業に精進しました。廣い荒野は、お城を中心として年々沃野と變り、人心は安定して十四萬三千石の莊内領は富裕を以つて知られる様になりました。

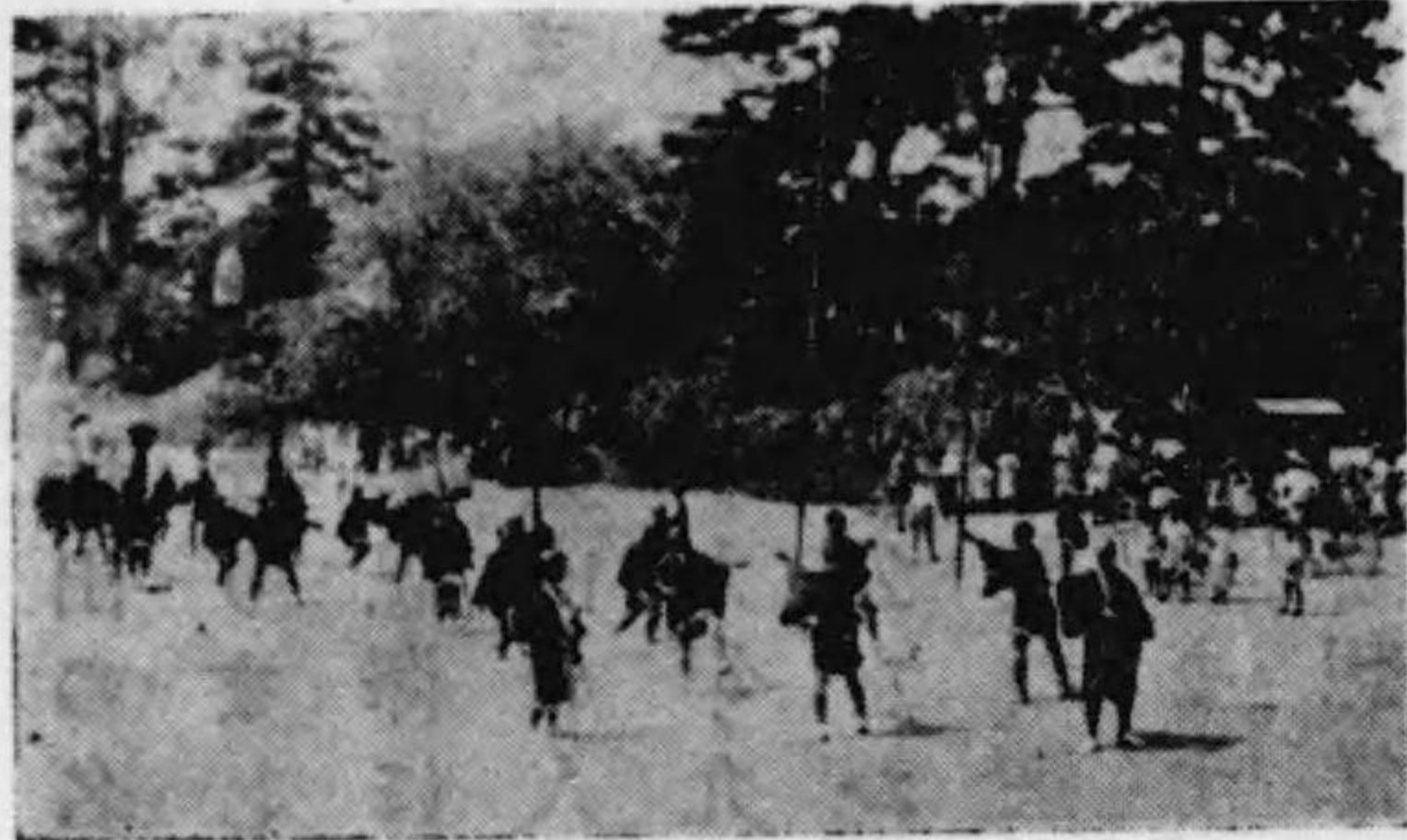
其の後、代々の藩主は大いに治績を擧げられましたが、殊に第九代忠徳公は不世出の名君で數々の大事業を完成され、莊内の基はゆるぎないものとなりました。

爾來其の恩澤に浴する事二百餘年、皇政が古に復り明治維新となりましたが、領内の人民は藩主を慕ふこと實に深く、遂に士民有志が相謀つて、明治十九年九月に鶴ヶ岡城舊本丸の地に社を建て、藩祖忠次・家次・忠勝の三公をお祀りし、莊内神社と稱して社格も縣社になりました。其の後、社殿の修繕祭祀等總ての費用は一切士民有志の寄附でする事になつてみますが、此の一事でも領民が藩主を思慕する情の如何に厚かつたかを想像することが出来ます。又大正十三年二月十一日紀元の佳節には、中興の英主忠徳公が贈從三位の恩典に浴されたので、その八月十五日に莊内神社に合祀されました。

毎年八月十七日の例祭は、莊内を擧げてのお祭であります。十四日から引續いて武道奉納試合やら、黒川能の奉納・前夜祭・本祭と藩主の徳

を偲ぶ数々の行事が行はれ、市内は勿論、莊内一圓の人出で、たいへん賑かでありませす。殊にお晝からのお神輿の渡御は昔ながらの大名行列で、三百餘人の人数で悠々と市中をねり歩きます。私達はあれを見るたびに我等の殿様の有難さをしみじみと感じさせられます。

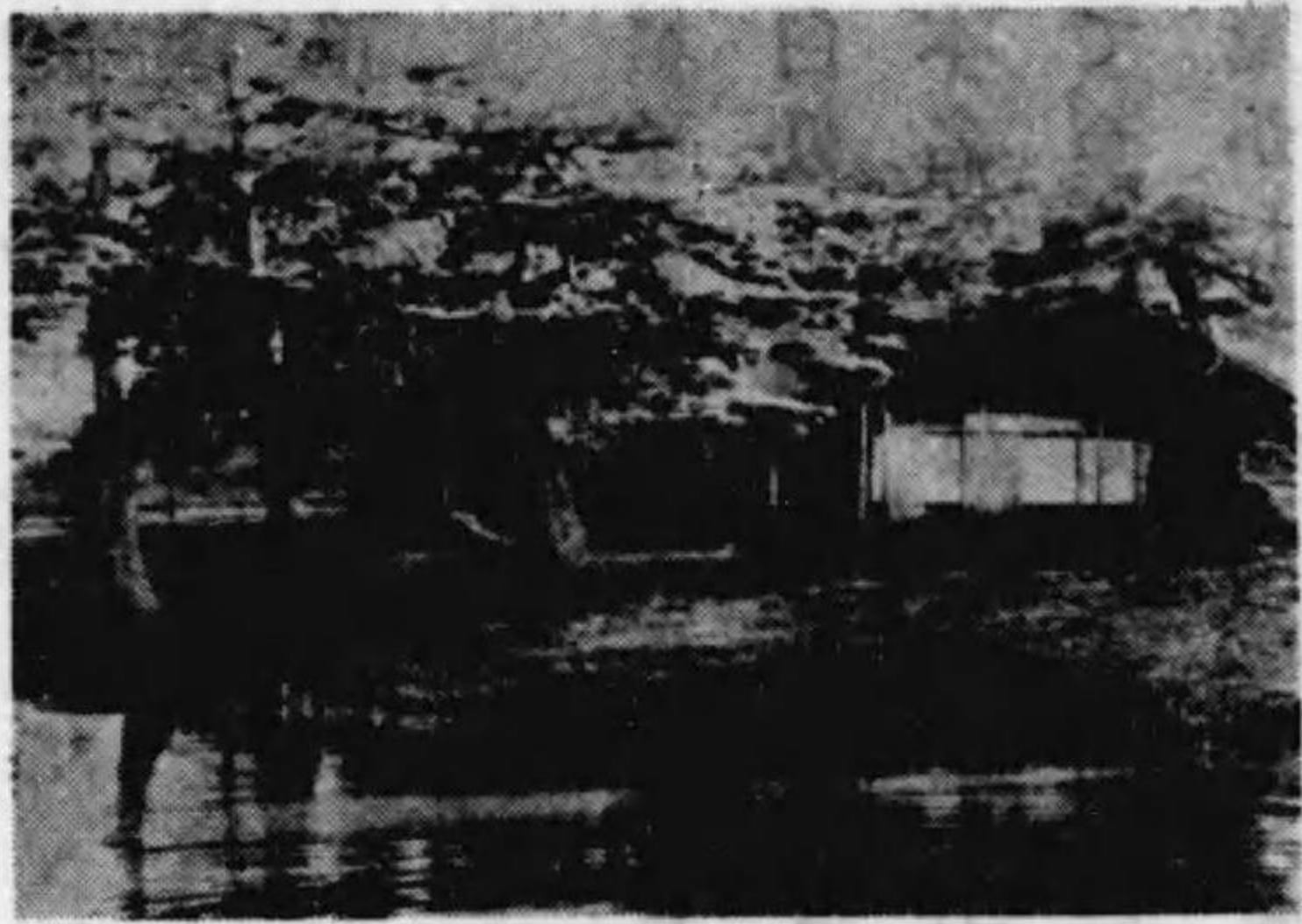
莊内神社神輿渡御次第



- |                    |  |   |
|--------------------|--|---|
| 列卒五十人<br>丸笠羽織紐白    | 世話役二人<br>菅平笠<br>落見三人<br>菅笠菱赤印扇三                          | 餌刺十人<br>鷹匠十人<br>犬牽二人                        |
| 列卒五十人<br>角笠羽織紐赤    | 世話役二人<br>菅平笠<br>落見三人<br>菅笠赤筋印扇三                          | 餌刺十人<br>鷹二据<br>犬牽二人                         |
| 鐵砲十挺<br>弓十張        | 小瓢箪<br>口付一疋<br>每二口付左右各一人<br>長柄鎗二十筋<br>鞍置馬三疋<br>内後二疋<br>總 | 柄杓持<br>金瓢<br>挾箱<br>簀箱                       |
| 鐵砲十挺<br>弓十張        | 口付<br>長柄鎗二十筋<br>厚  | 杏駕籠<br>金瓢<br>挾箱                             |
| 白熊<br>小夜嵐          | 臺傘<br>中黒筋鎗<br>先徒十五人<br>弓臺<br>長刀<br>弩俵                    | 弩俵<br>金馬<br>野太刀                             |
| 白熊<br>小夜嵐          | 臺傘<br>中黒筋鎗<br>先徒十五人                                      | 弩俵<br>金馬<br>野太刀                             |
| 具足櫃<br>茶瓶<br>太鼓    | 神御<br>御杖<br>前衛<br>社掌<br>馬上二人<br>口付一人<br>樂人<br>神官         | 樂人<br>神官<br>莊内號<br>土族守護<br>神輿三<br>土族守護<br>臺 |
| 辛櫃<br>神馬三疋<br>口付二人 | 絹着せ<br>祝詞箱持<br>祝詞箱持<br>社司<br>駕籠<br>跡乘<br>駕籠              | 草履取<br>挾箱<br>釣臺<br>以上                       |

五 加藤 忠 廣

加藤忠廣は清正の長子である。



忠廣公満居遺宅

清正は關ヶ原の戦功として、家康から肥後五十二萬石の領主に封ぜられた。戦場では鬼將軍と呼ばれた清正は一國の領主としても、治民に心を盡し、智仁勇兼備の名君として、心から領民に敬慕されて居た。慶長十六年、二條城の會見の大役を果し、今や功成り名遂げ、五十歳を一期として世を去つたのであるが、常に公の胸中奥深く包んで居た一片沖々の念は、豊臣家末路の處置であ

つたであらう。

忠廣は十歳の幼弱の身で父の遺領を繼いだ。かねてから天下の不純分子一掃を企て、居た三代將軍家光は、直ちに外様大名たるこの加藤家へ藤堂高虎を遣はして國政を訊治せしめ、次いで阿部正之朝比奈正重を肥後監察とし、常に毛を吹いて瑕を搜しつゝあつたのである。

寛永九年五月、忠廣三十一歳の時の事である。その頃江戸屋敷には嫡子豊後守光正が居た。その家來に廣瀬庄兵衛と言ふ侍があつたが、白刃を見ては震へ、竹刀さへ持ち得ぬ程の臆病者であつたから、誰一人本名を呼ばず、皆臆病庄兵衛と呼んで居た。光正は當時十四歳の少年で、至つて徒ら好きであつた。或日近習の者と謀り、「ひとつ庄兵衛を驚かしてやらう。」と俄に武器や馬具を取り出し、戦備を整へ、急使を派して庄兵衛を呼び出した。庄兵衛は急の御召し何事であらうと、急ぎ登城するところは如何に、城中には何百臺とも知れぬ燭臺が立てられ、恰も白晝の如く、主君は正面の床几に腰打掛け、甲冑に身を堅め、采配を持

ち、近習扈從をづらりと從がへて居る。庄兵衛は仰天の餘り逡巡して居ると、主君は彼を側近く呼び寄せ、大音聲で

「我今日火急の事思ひ立ちたり。汝に一方の大將を頼む。」

と言へば、庄兵衛たちまち色青さめ、恟々として頻りに辭退する。豊後守は江戸城の繪圖を取出して、

「汝は何れの口より攻め入るべきか。」

と問へば、庄兵衛益身を震はせて恐怖する。豊後守はいらだつて、  
「敵城近ければ不意を打ちてこそ勝利を得べけれ。いざ用意。」

とせき立てれば、庄兵衛は手足の措く所も知らず、

「さらば一走り私宅にて用意して直ちに罷り出づべし。」

と言ひ捨て、あわて、馳せ歸つた。庄兵衛が歸つた後、主從一同はどつとばかりに、今の有様を手眞似足眞似して笑ひ興じ、繰り返し、語り合へば、早初更ともなつた。併し庄兵衛は來ない。急に門前が騒がし

くなり、人々の罵り合ふ聲が聞えて來た。何事であらうと案ずる所に、突然將軍家の上使、案内もなく書院につか／＼と現れた。豊後守を初め一同大いに驚き、甲冑のまゝ平伏すれば、上使嚴かに口を開き、只一言「將軍家お尋ねの旨あり。急ぎ登城あるべし。」

とて歸つて行つた。一同只茫然として居る中に、登城の催促が次々と來るので、止むを得ず登城すれば、光正は直ちに帶刀を取上げられ、その身は某侯にお預けとなり、熊本なる父忠廣には急使を遣はされたのであつた。

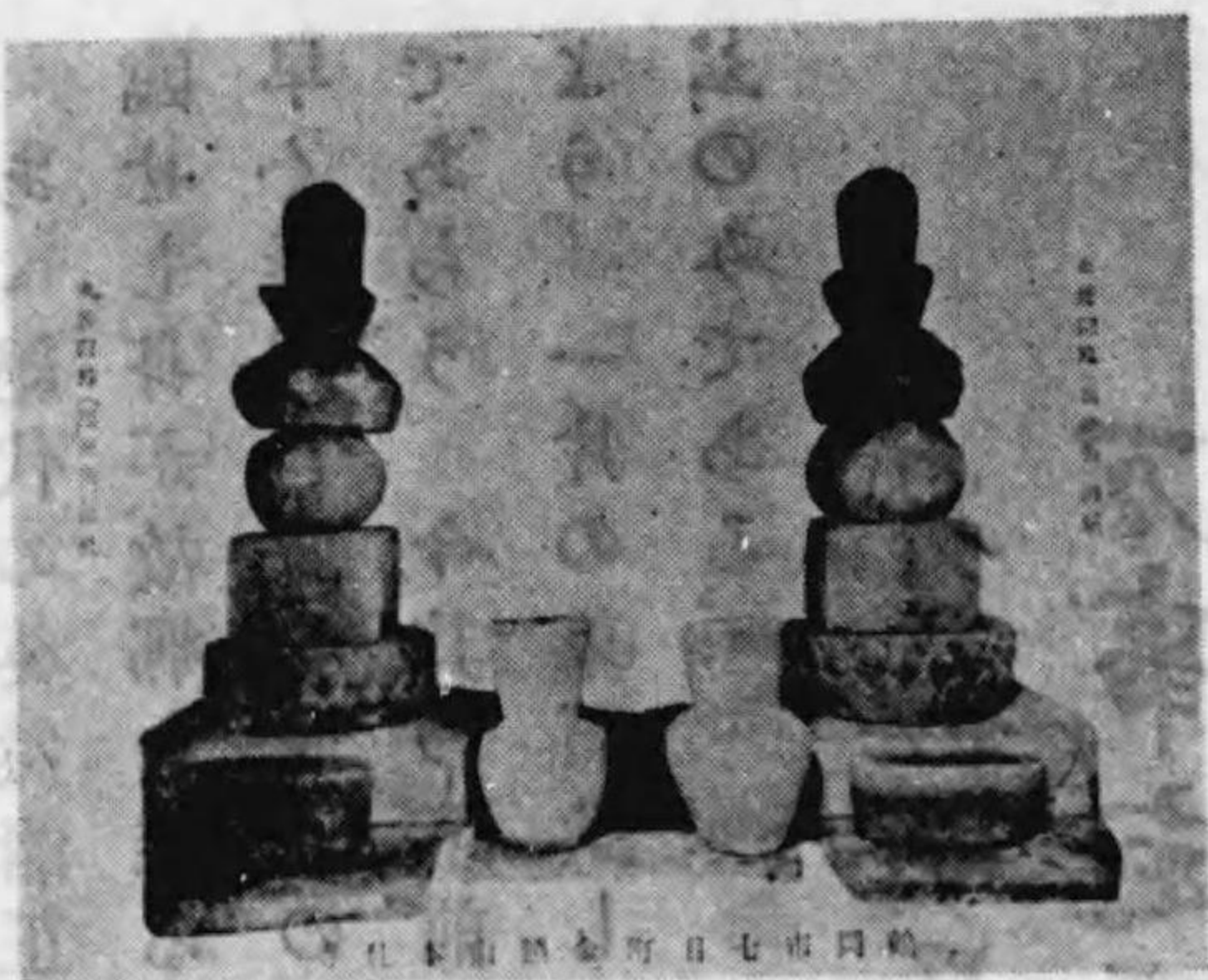
忠廣は何事であらうと、夜を日について江戸に上つて登城した。然し既に投げられた骸の目は如何ともする事が出來ない。形式的な計畫的な強制的な裁きにより、忠廣は再び下國する事も許されず、直ちに領國は沒收せられ、母君と共に出羽國丸岡に流刑に處せられ、光正は飛驒の僻地高山に流されたのである。

寛永九年六月七日、昨日までは一國の大名、今日は従ふ扈從の家臣二十人に守られて配所落ち、只辿り行く足音のみにて聲もなく、黙々として六月十八日、鶴ヶ岡南町常念寺に着いた。

さうして八月二十五日、丸岡の謫居に移られたのである。

月日は流れて二十年、憂悶の情を或は詩歌に託し、風月に紛らして居たが、慶安四年六月十七日、母堂は此の草堂の中で盡きせぬ嘆きを抱きつゝ、永き眠りに入られたのである。

今や慈母の柩を送つて、最早殘餘の生の意義を失つた忠廣の憂鬱は長へに去るべくもなかつた。さうして未だ母堂の塚の土も乾かぬ翌々年、即ち承應二年閏六月八日、終に母の後



忠廣公母子の墓

を逐うて去つたのである。時に享年五十二歳。遺骸は母子共に鶴ヶ岡の本住寺に葬られた。

あゝ、絶代の英傑清正公の子と生れ、熊本五十二萬石の城主として君臨せし身が、故郷を離るゝこと千里、満ちては缺くる配所の月を眺め、冬早く春遅き此の北地の風物に對しては如何ばかり愁情を深くした事であらう。今其の墓前に立つて往時を憶ふ時、誰か感慨なしに居られよう。一片の墓石黙して語らず、只其の遺詠に憂多き當時の心情を偲ぶのみである。

身似明星西亦東人間  
万事定不定三十六年  
如一夢覺來庄内破簾中

忠廣公遺詩

父君清正朝臣の忌日に

なきあとを問ふにつけても星移り物かはり行く世をばうらみん

### 六 酒井忠徳

藩の窮状

今から約二百年前、田沼意次が老中となつた安永元年の六月、酒井忠徳公は初御入國といふので江戸をたつた。公は江戸の藩邸で育つたので、庄内には始めての御下りである。其の頃は勿論汽車などはない。あの長い行列が江戸から庄内までゆる／＼歩くのだから、實に長い日數と澤山の費用とを要した。途中とまりを重ねて福島驛までついたが、こゝで大變なことが出来た。貧乏だつた酒井家には、江戸の邸に國まで歸る金がなかつた。そこで旅費の半分をこの福島驛にとゞけて置く様にと國元に命じたのに、どうしたのか未だ着いて居ない。重役

達は額を集めて相談したが、すぐに金の出来る工夫がないので、仕方なく御前に出て、旅費のとのふ迄此處に御滞在下さる様お願いした。じつと聞いて居られた公は、眼に一ばい涙をうかべ、十四萬石の分限でありながら、僅か百餘里の旅行をする金が無いとは實に情ない事である。この様な有様では、一旦國家に大事があつた時、どうしてお上の御役にたつ事が出来ようかといつて嘆かれた。

賢明な公は下々の民百姓の苦しみを考へるにつけ、一生の事業として民を富まし、兵を強くして大名の務を果さなければならぬと決心された。

此の時公は僅か十八の弱年であつた。國に歸ると先づ藩の實情を調査されたが、その時の借金に二十萬以上もあり、其の金高を米に直すと、約七十萬俵に當つてゐたといふから、十四萬石の大名として實に容易ならぬ大金であつた。これといふのも、元祿以來世の中が一般に華

美になり、従つて諸大名の交際には年々澤山の金がかゝり、其の上公の祖父君に當る忠寄公が、長い間老中の職について居られたので、公私共に費用を要した爲であつた。

公は又入國後屢領内を巡視されたが、百姓達は重税に苦しめられ、中には住みなれた土地を棄て、遁れ去るものさへある位だつた。公はかうした有様を見るにつけても、益、その決心を固くしたのである。翌年江戸に歸られ、田安宗武卿の女修姫を迎へて夫人にされた。彼の松平定信の姉君である。

#### 財政の整理

江戸に着かれてからの公は日夜財政の回復に苦心され、前々からの例を破つて江戸のお邸の一年の費用を半減され、藩士にも儉約を勧められた。其の頃は今と違ひ、身分の低いものは才能があつても中々上の役につくことは出来なかつたが、公は酒田の町人本間四郎三郎光丘

の偉いことを聞かれ、江戸にお召になり、内外の事情と自分の決心とを告げて、莊内江戸御勝手御用係といふ重い役に上げ用ひ、財政整理の基礎を立てさせられた。

然し長い間の習慣を改めるといふ事は中々困難なもので、四郎三郎が職を退くと共に、節約の令も段々弛みかけて来た。公は此の難局に處し益、決心を固くし、大英断を以て天明元年二月、三ヶ年の非常節約の號令を發した。其の節約振は實に微に入り細に互つたものである。

公も亦自ら率先して節約の範を示され、平常の衣服を粗末な木綿物に改めると共に、常に用ひて居られた蠟燭なども、夜食の時ちよつとつけるだけで、一挺の蠟燭が數日間に合つた程であつた。或時晝食に鹽引を差上げたところ、残りには夜食まで取つて置く様に」と申された。夜食の時、あの鹽引は」と仰せられたので、「お手がついた爲、女中共が戴きました。召上がるなら別に差上げませう」と申上げたところ、公は御顔色

を變へられ、申しつけた事はなぜ其の通りにしないか、今後よく／＼注意せよ」と叱られた。

かく公自身が大節約をすると共に、再び四郎三郎を召出して御勝手御用掛とし、財政の全權を委ね上下共に大節約を勵行した。かくて一年後には江戸の費用の中から千五百兩、莊内でも半年の間に千四百兩といふ多額の剩餘金が出来た。かやうにして三十年後には、先の借金を全部返済した外に、二十萬兩以上の貯金も出来、神田の大黒と呼ばれた程金持の大名になつた。

#### 農村の救済

公は藩の財政整理をすると同時に、農村の救済に力を盡された。その頃、農村は非常に困窮してゐたので、低利の金を貸與へて是迄の借金を返させ、又一方、五勺糶、郷倉糶等の備荒貯蓄をさせた。有名な天明の飢饉の時、公は米一千俵を下されたが、その上にかうした蓄があつたの



で、他國の窮民をも救ふことが出來た。

寛政四年、公は領内に令を發し、郷村を救ふ方法あらば封書を以て申し述べよ」と仰せられ、一方鷹狩等と稱して郷村を巡り、殊更に貧農の家に休息したり、辨當を食べたりして農村の實情を視察された。

同五年、大目付白井矢太夫重行は上書して農村疲弊の原因及救濟法を陳べた。公は矢太夫を郡代に擧げて農村の内容を調査させ、その救濟につとめた。同八年に矢太夫の意見を本として、郷方改革係と相談の上、大英斷を以て農村の改革を斷行された。即ち公は、永年の間積り積つた貸附や滞納の米約六十萬俵、金二萬數千兩を所謂下され切りとして全部上納を免除された。その上、借金等も實情を調査し、返濟の期日を延べさせたり、不正なもの、返濟は許されたので、領内十數萬の民百姓始めて蘇生の思をなし、公の徳に感泣した。

又百姓が肥料に不足して居るのを見ては、油糟の他國賣出しを禁じ

たり、農事に精勤な者には賞を與へるなど、色々勸農の事に心を盡されたので、農民は大いに業に勵精し、豊年が續いて次第に裕福になり、田畑は年毎に開け、東北有數の米産地として他に羨まれる様になつた。

今日莊内の稲作は全國の模範とされ、莊内米の聲價も随つて天下に覇を稱するに至つたのは、公のかうした努力が遠い原因となつて居るのである。

又副業として養蠶を奨勵し、更に山地の村落には漆樹の栽培を命じ、特に役所を設けて蠟や漆を買ひ上げ、塗物細工や花紋燭を造らせた。この花紋燭・塗物が現在鶴岡の名産となつたのである。

公は皇祖天照大神に崇敬の誠をつくすと共に、深く皇室を敬つた。

安永元年、光格天皇御即位の盛典に際し、その御用として獻金し、又天明八年、禁裏炎上の際には領内に令を發して鳴物を停止させ、其の翌年、御

造營費として重ねて献金された。公は又歌道を嗜み、冷泉爲泰・日野資枝の兩卿に教を受けてゐた爲、公家の間に信任されてゐた。寛政八年、將軍家齊の子家慶元服し、敍位任官されたので御禮の爲、幕府は人選の結果、公を將軍家名代として京都に遣はすことになつた。

此の重任についたのは、公が朝廷及び公家の信任が篤く、又幕府譜代大名中重きをなして居た爲めで、實に公一代の名譽であつた。之を聞いた領内の士民の喜びは一方ならず、米・金又は物品を献つて、上洛の費用にして頂きたいと願ひ出るものが多かつた。

翌九年四月十二日江戸を發し、二十六日京都に着き、五月朔日參内の上、將軍よりの献上物を献つて、御禮を申し上げ、龍顔を拜して退出せし、其の時の詠に

雲の上やおろかなる身のかしこさは  
大宮人に袖をつらねて

と大宮人と一緒に雲の上に居る身の光榮を述べ

今日といへば御座間近く立ち交る

身のかしこさを何にたとへん

といつて天皇に咫尺し奉る身の畏さを詠み、又

わすらるゝ時こそなけれ恵のみ

仰ぐ心にほふ橋

紫宸殿の庭に咲き誇つてゐる橋に喩へて、君の恵の有難さを詠んだ。

公は無事此の大任を果し、歸途禰津郷右衛門を伊勢の皇大神宮に遣して代拜させ、二十四日江戸に歸つた。

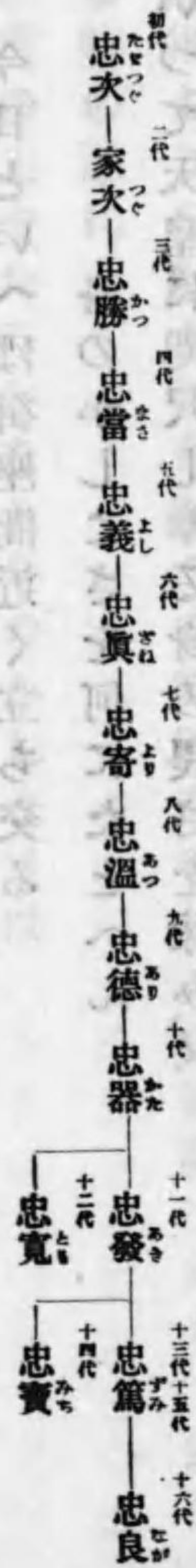
公の晩年

公初め歸國の旅費にさへ窮するを見、大いに發奮して民を富まし國に報ぜんとの志を立て、財政の整理に勤むる事二十餘年後、農村の宿弊を除き、農民を救済し、産業を興した。

更に寛政十二年白井矢太夫の建言を入れ、學校を創立し致道館と名づけ、孝悌を本とし國家有用の人物養成に努めた。文化二年九月、公隱居して國を子忠器に譲り、柳原藩邸に住し政務を監視された。

其の後専ら和歌・俳諧を楽しみ、同九年九月十八日、五十八歳を以て逝去された。士民の悲歎恰も幼兒の母を失へるが如くであつた。大正十三年、東宮殿下御成婚の御慶事に際し、公の功績を追賞され、從三位を贈られ、同年八月十五日、莊内神社に合祀された。

酒井家系圖



七本間光丘

本間光丘は享保十七年、出羽國酒田の豪家に生る。長ずるに及び、播州姫路馬場某に就き經紀の術を學び、寶曆四年、父光壽の後を承け、久四郎と稱し、酒田町長人を命ぜられ、ついで名を四郎三郎と改む。

翁幼少より學を好み、特に經濟の道に長じ、又和歌・俳諧を善くし、俳名を蓬萊舍其山と號し、其の名高く、平素神佛を尊崇し、上を敬ひ下を憐み、一門常に和氣霽々として分を楽しみたり。

この事藩主酒井忠徳に聞え、異數の拔擢を受けて士班に列し、累進して祿五百石を食むに至れり。當時藩の財政逼迫を極めたりしかば、翁は藩主の重命を奉じて之が整理の任に當り、一身奉公よく其の功を擧げしのみならず、父の遺志をつぎて公益の爲に盡くし、功績擧げて數ふべからず。中にも酒田防

砂林を經營して町民百年の苦患を除きたるが如き其の著しきものなり。

當時、酒田瀕海の地數十里の間廣き砂原にて草木生育せず、冬期朔風一度到れば、細砂忽ち天を蔽ひ行人全く絶え、屋舎を埋め田園を没し、常に一郷の憂患なりき。

翁痛く之を憂へて百年の長計を企て、寶曆八年、藩主に請うて西濱植樹の事を畫し、私費を投じ、貧民を使役して砂囊數百萬を作らしめ、これを累積して一大丘を築き、頂上に山王祠を遷し、數百萬の松苗を遠く能登より求めて此處に栽培せしむ。されど、冬季多大の損害を受けて無事に存するもの極めて稀に、年々其の補植經營に苦心を重



光丘神社



松林

ねたり。翁が公益を思ふ熱誠は風伯を屈せしめ、數年の後は遂に蒼然たる松林となりて、是より風砂の患頓に止み、市人其の堵に安んじて業を勵むことを得たり。

翁の歿後十六年、酒田の住民相謀りて碑を松林の中に建て、其の偉績を永遠に傳ふ。時に文化十三年なり。大正七年、翁は功績によりて正五位を贈られ、翌年此の地の人々協議して光丘の名を後世に記念せんとし、防砂林の一部を光ヶ丘と改稱し、光丘神社を建立して其の徳を讃へたり。

### 八芭

### 蕉

五月雨をあつめて早し最上川

最上川の川舟を清川で乗り棄てた芭蕉は、五里と聞く山裾の道を手

向村へと急いだ。それは元禄二年六月三日のことである。芭蕉はその夜、羽黒山本坊の別院に泊つた。すゞしさやほの三日月の羽黒山



最上川を下る芭蕉

六月五日、権現の本社に詣でた。厚く萱を葺いた社殿は老杉のなかに聳えて、神々しい山のたゞずまひの中にしづかに鎮つてゐた。芭蕉は拍手をうつてねんごろに拜した。

六月八日、強力に案内をこうて月山に登つた。先づ白衣をみにまとひ、白布を頭に巻き、木綿注連を首に掛けてこの山に登るものゝ装束に身をかためた。羽黒から八里の山道は登るに従つて、或は細々と草原のなかに消え、或は石原のなかに出た。山の六月は、まだ道にも谷にも残雪

が白々と凍つてゐた。芭蕉は一步步氷雪を踏みしめて、谿をわたり尾根を渡つた。或る時は雲とも霧ともつかぬ冷いものがわらくと流れて来て、何時迄も芭蕉と強力を濃く包んだ。右も左も、上も下も、たゞ白く何處迄も續き、寒さは一入骨に徹り、その儘息たえて天上界に入るのではないかと芭蕉には思はれた。數歩前なる影繪のやうな姿。芭蕉の網膜に映ずるものは唯その姿のみであつた。芭蕉は黒く動くその強力の影を便りに、一步步杖の音をすまして登つた。やがて冷い霧も霽れ、漸くのほりつめて月山の頂上に達した。その時、芭蕉の頭上に懸つてゐたのは銀の月であつた。その日一日の太陽はいま西に没して、あちこちには黄昏の雲の峯が幾つもくづれてゐた。そして月光は刻々に冴えてゆく。雲の峯いくつくづれて月の山。山上に一夜を明した芭蕉は日の昇るを待つて湯殿山に下つた。

語られぬ湯殿にぬらす袂かな  
湯殿山から再び羽黒の坊に戻つた芭蕉は、それから間もなく羽黒を  
辭して鶴ヶ岡に出た。

鶴ヶ岡では、藩士長山重行、通稱五郎左衛門の家に迎へられた。そして連句の會などが催された。重行は竹童と號し、その道の一人であつた。今の鶴岡市與力町の通稱長山小路は竹童の姓に由來すると傳へられてゐる。

鶴ヶ岡の幾日かは過ぎた。芭蕉は愈、象潟の旅へのぼることになつた。同好の人々は前の晩から竹童の宅に集つて名残を惜んだ。その日の曉も近づいて來た。芭蕉は、先づ例の法衣のやうなぢきとつを着た。そして、雨にもよくお天氣にもよい例の檜木笠の緒を確りと締めた。痩せて枯木にも似たその姿が、如何にも旅なれた頼もしいものに見えてきた。同好の人達はたゞ黙つて微笑みを交した。

内川はそこからほど遠からず流れてゐる。内川の川舟の泊りまでの歩みも和やかではあつたが、兎角だまり勝ちであつた。旅の荷物を二つに分けてそれを肩に掛けたまゝ、芭蕉は川舟の人となつた。

「さやうなら」

「さやうなら」

川舟は黎明の城下町を棹さして下つた。やがて廣々と莊内平が展けた。天はよく晴れてゐる。東に遙か明けゆく空に幽かに描かれてゐるのは月山の姿であつた。

「月山だ」

合掌にもちかい氣持で芭蕉は舟に座し、何時までもその姿をうちながめた。川舟が赤川に入る頃は朝日が華やかに登つて、南の空に遠ざかつてゆく鶴ヶ岡城の夢を照らした。それをちつと眺めた芭蕉は「また何時の日にも會へることやら……」

長山重行等との機縁を思ひ、燦々と朝の光をあびながら、しみじみ旅の淋しさを覺えた。その日の夕暮近くになつて、赤川が最上川に合し、川口の酒田港が見え始めた。その夜は酒田の本町二丁目下ノ山、醫師淵庵不玉の許に宿ることになつてゐる。  
暑き日を海に入れたり最上川

風流の初めや奥の田植うた

五月雨の降り残してや光堂

温海山や吹浦かけて夕涼み

蚶潟の雨や西施か合歡の花

荒海や佐渡に横たふ天の川

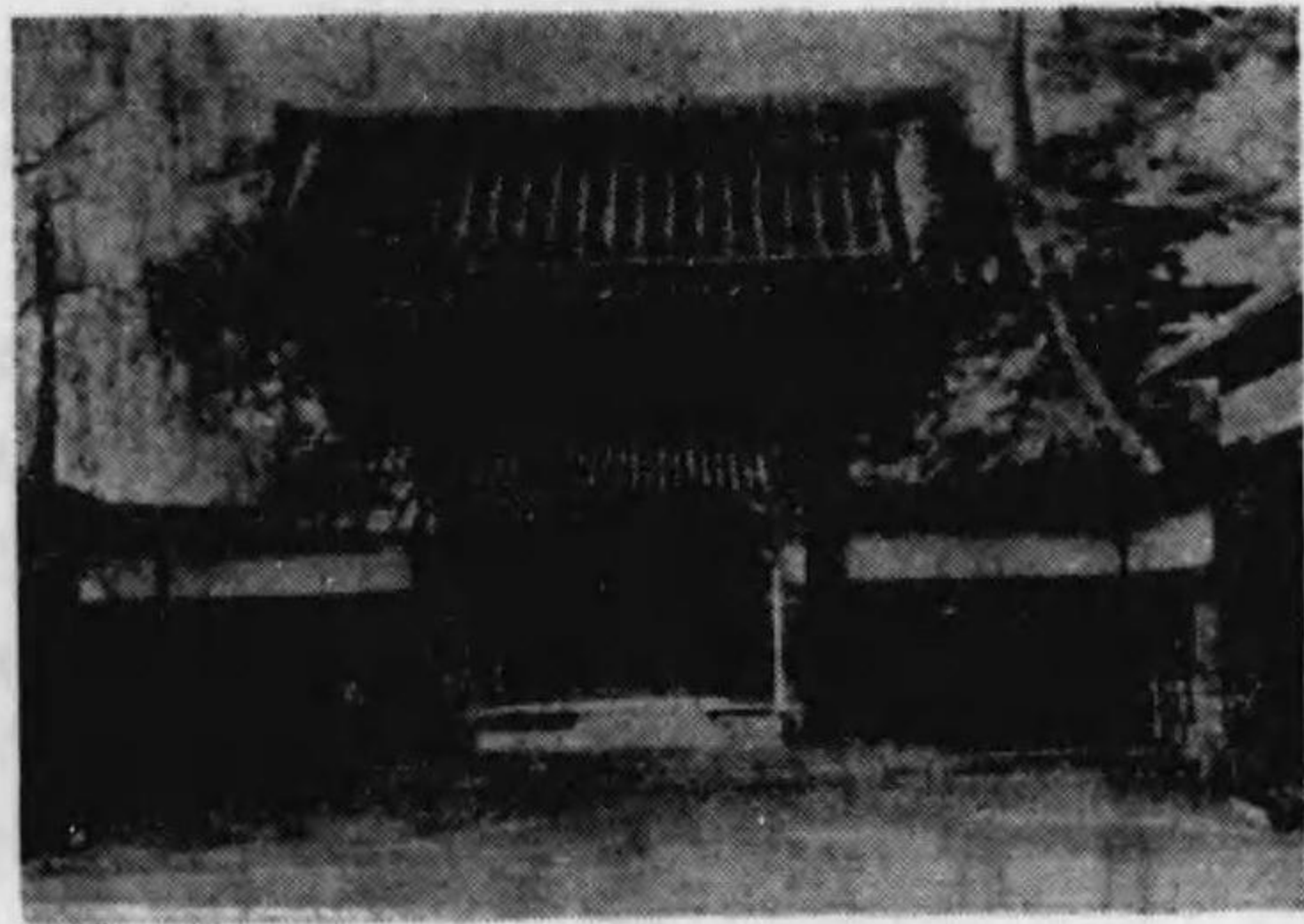
### 九 致 道 館

太平久しく打ち續いた徳川幕府の晩年、九代家重十代家治の時代は、上も下も唯々奢りに耽り、昔の質實剛健の氣風は全く其の跡を絶つてしまつた。十一代家齊職を繼ぎ、松平定信を登用して大いに風俗の刷新、士氣の振興に力を盡したが、定信職を退いて後は舊にも増して士氣が衰へた。

將軍幕下の江戸が斯くの如くであるから、この餘風は各藩に流れ入つた。北國の我が莊内藩も、いつしかこの流れに染んで士氣漸く衰へ、武藝學問を怠り毎日遊樂を事とし、莊内武士の面影は次第に薄らいでいつた。

斯うした時代に、我が莊内の藩主になられたのが中興の英主と仰がれる忠徳公であつた。忠徳公は當時第一の急務であつた財政の整理

を完成され、又農村救済事業にも非常な努力をなされつゝあつた。一藩全く其の面目を一新する様になつた。名君忠徳公は更に文教を興



堂講門正

し、士風を振作して國家百年の基礎を確立しようとして、當時一世の師表であつた白井矢太夫に相談された。矢太夫は大いに喜んで、藩主がこの事を考へられたのは國家の幸である、永い間太平に慣れた武士達は柔弱な不規律な行を平氣で爲してゐる。之を矯正するには學校教育による外はないと考へた。矢太夫は眞心を以て、自分の信ずる所を申し上げた。忠徳公は非常に喜ばれた。天下稀に見る名主を上を頂き、學徳一世に高い矢太夫がその任にあつたのであるから、學校の基礎は自ら他に類例のない強固なものとなつた。

いよ／＼學問所創設の命が下つたのは寛政二年八月であつた。翌享和元年に至つて、幕府の許可を得て學問所を學校と改め、今の日和町



廟聖

東側、寶町大藏小路の西側に工を起した。其の後五ヶ年の日月を費して、文化二年二月に落成した。之が致道館である。正門は今の縣社日枝神社隅の堀の方に向いて、東西に通用門があつた。校舎は聖廟・神庫を始め御入の間・講堂・書庫・武術稽古所・矢場・馬場等に至るまで、實に堂々たるものであつた。忠徳公は時々御出でになつて會讀を聞かれ、武術を御覽になつた。

校長は白井矢太夫、教授・助教は何れも莊内藩一流の學者達であつた。生徒は十歳で入學し、大抵二十歳で卒業



する事になつてゐた。誰も彼も一心に勉學にいそしんだ。學校では、禮儀を最も重いものとして聖廟に先聖孔子を祀り、禮讓を正して春秋二回の祭典を行ひ、至誠勤學を誓つた。爾來幾十年、明治元年秋の祭典を缺かれた外は、如何に多事の際と雖も、いとも嚴肅に取行はれた。莊内の氣風が至誠莊重といはれるのは斯うした所に遠い源を發してゐるのである。

その學風は荻生徂徠の古學を採つた。當時、幕府は朱子學以外は禁じて居たのに、致道館ではこの學を採り、徂徠の門人大宰春臺を儀表とし、第一に實踐躬行を重んじた。随つて學校では卒業生が皆大學者、大政治家に成つてくれとは望まなかつた。それよりも、實際に役立つ人間、忠孝を大本として、それぞれの分に



應じて充分に才能を發揮し得る人間、國家の御用に立つ人間に成らせたいと願つて居た。随つて其の導き方も違つてゐた。何處までも自分で勵み、自分で學び、自分で行つてほんたうに知つていく様に指導した。生徒も一生懸命で、朝の七時から夕方五時頃まで死物狂で勉強した。斯うして學んだ人々が次々に藩の役人となり、立派な仕事をしたのであるから、質實剛健廉恥を尊ぶ莊内の士風は次第に振作され、此の美風が廣く農工商にも及んで、所謂莊内魂が養成された。致道館創立後三十餘年、天保の御國替に領民が奮起したのも、又幕末多難の際、東北の一小藩を以て江戸取締の重責を全うしたのも、明治戊辰の戦に勇名を天下に轟かしたのも、皆この教育があづかつて力があつた。

致道館は忠器公の時に至り、十日町口に移轉仰出あり、文化十三年九月に新校舎全く成り、此處に移轉された。新校舎は殆んど以前と同様であつたが、政教一致の精神を實現しようとする所から、新に會所、諸役

人詰所が加り、その他句讀所を建てられた。特に新校舎の屋根は、お城以外には當地方最初の瓦葺で、この時代としては全く一偉觀であつたらうと想像される。

爾來幾星霜、世は明治維新となつて、六年六月二十六日、由緒深い我が致道館は全く廢校された。そして現在僅かに第一小學校に正門講堂、御入の間が残つてゐるのみである。

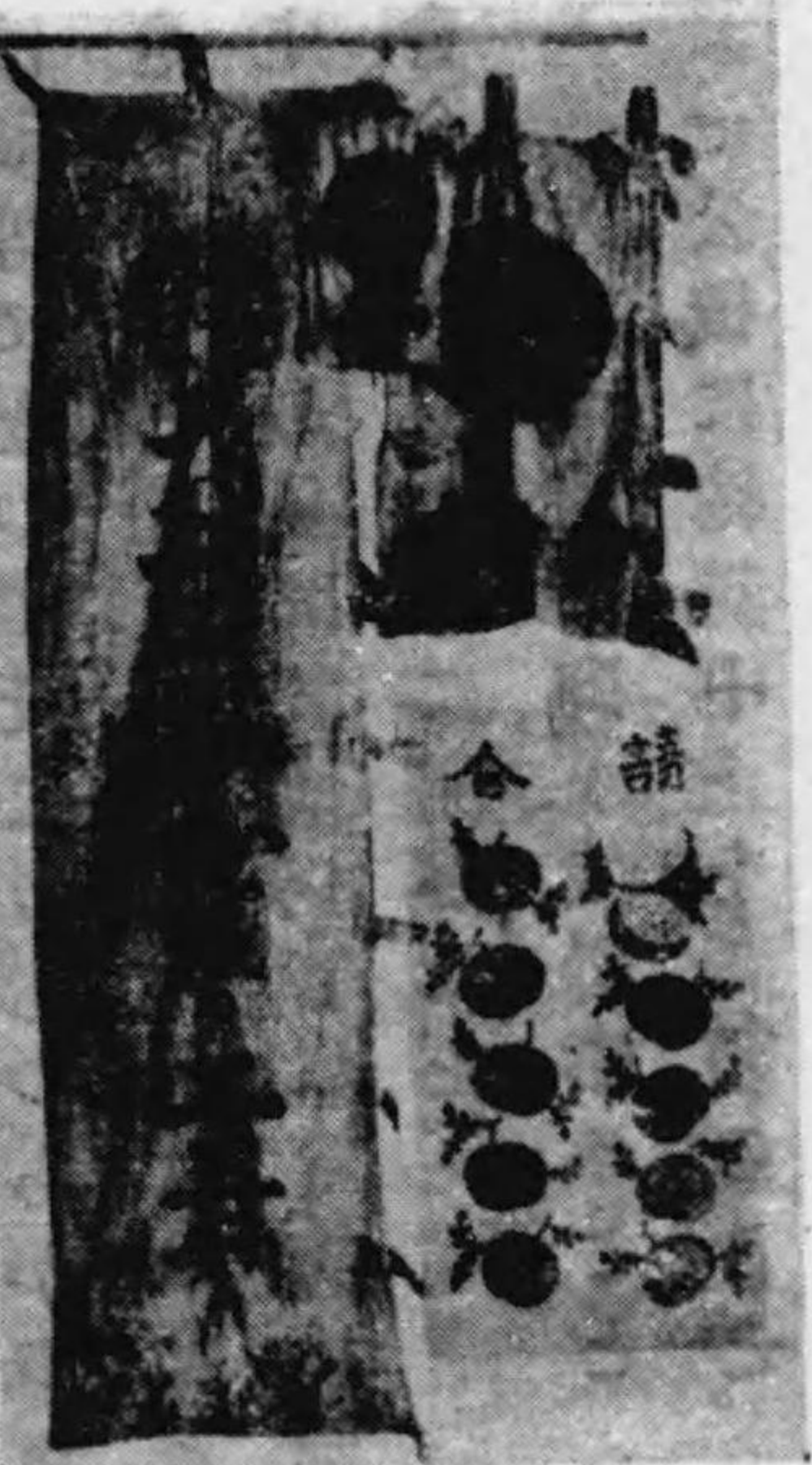
然し、明治維新以來七十年、幾多の變遷はあつたにしても、この尊い學風と、治亂共に國家の御用に立つ人物の養成に勵精する致道館の教育精神とは、永遠に發展をつゞけてゐる。

### 十天保義舉

廣い莊内の平野には豊穰の秋が續いた。野良に働くお百姓達の顔は何時も明るい喜びの色に輝いてゐた。

酒井忠勝公入部以來の莊内は、藩主代々の善政に、常に和やかな氣風が流れてゐた。殊に、絶代の英主忠徳公が農村救済の美政を施されて以來、農民の藩主を慕ふ情は赤子の慈母に於けるが如くであつた。かやうにして、莊内の自然と藩主と領民とは眞に一體となつて平和を樂

しんだのであつた。



旗

た。藩士の驚きは勿論のこと、すべての領民は深い悲嘆の底に沈んだ。心ない山河さへも悲しみの色に掩はれるかの様に見えた。然しながら一旦下された幕命は如何ともする事が出來ない。堪へ切れない恨

然るに突然、眞に突然、天保

十一年十一月朔日、江戸から  
の早馬は時の藩主酒井忠器  
公に、この莊内から越後の長  
岡に國替の幕命を傳へて來

を呑んで、幕命に従ふより外、藩としてとるべき道はなかつた。

然し、如何に幕命とは言へ、このまゝに服することの出来ぬのは、莊内二十萬の領民達であつた。幾百年の間慈しみ育まれた藩主との生別は、彼等にとつて死よりもつらかつたのである。今は片時も猶豫すべきでない、五百ヶ村の領民は殆んど同時に敢然と奮ひ起つた。組頭、庄屋、肝煎から、醫者、僧侶、百姓等、莊内兩郡の各所に相集つて相談した。會合は毎日の様に開かれた。

- 一、天地神明に御永城祈願のこと。
- 一、公儀に轉封中止を訴願のこと。
- 一、要路大官に同様訴願のこと。
- 一、隣國領主に援助懇願のこと。
- 一、止むなくば藩主の上京を阻止すること。
- 一、時々大寄合をなし策をねること。

一、各組の打合せをすること。

一、最後の場合を決心すること。

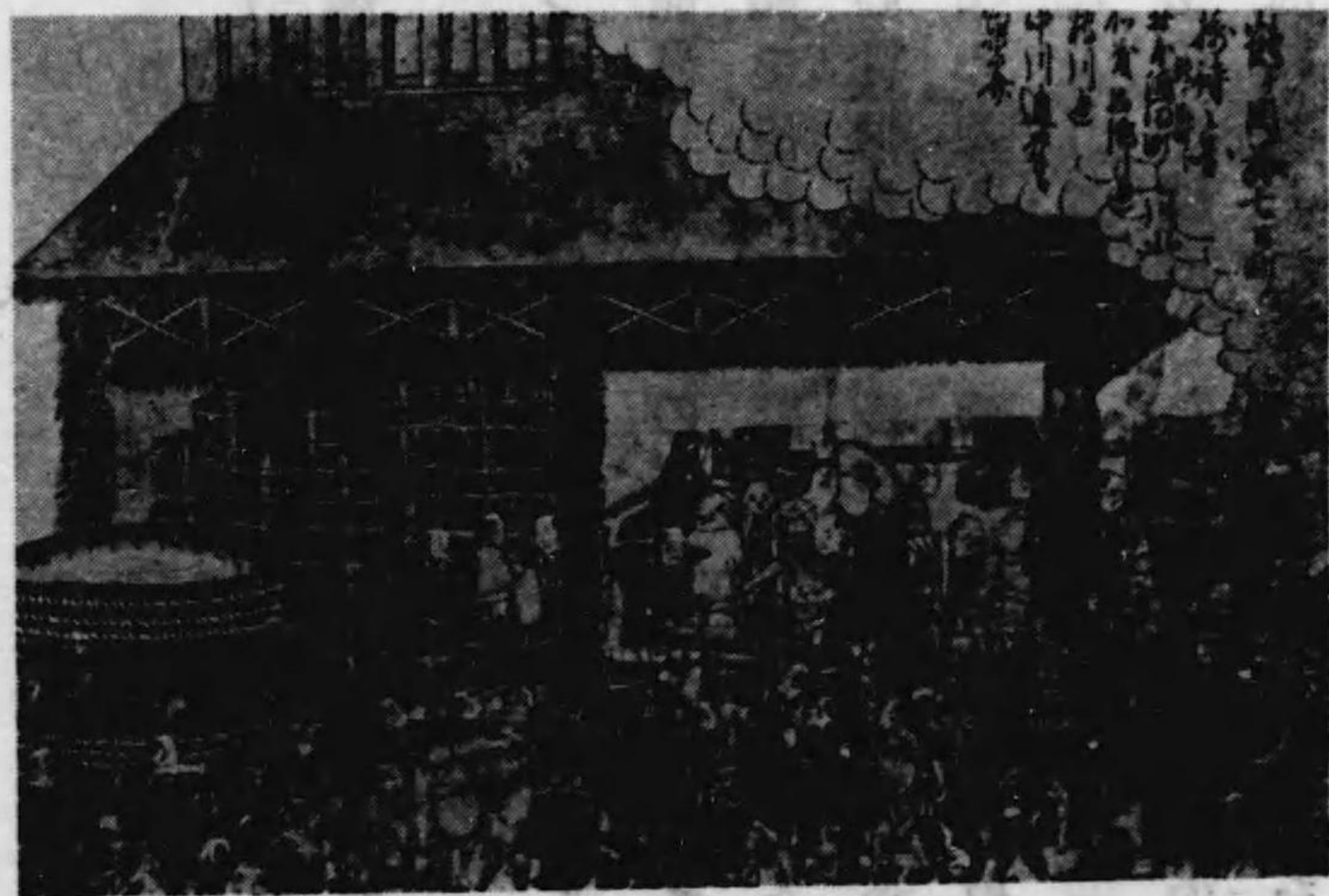
之は全く二十萬領民が一丸となつて起ち上らうとする大方針であり、又「百姓たりとも二君に仕へず」との藩主を慕ふ彼等の熱烈な眞心を表したものであつた。

やがて彼等は着々實行にとりかゝつた。伊勢の大廟はいふにおよばず、鳥海・月山・羽黒・金峯の神々、遠くは鹿島・日光・鹽釜の諸神にいたるまで、雪ををかして山上に日參するもの、國を出て參拜に行くものが引きつゞき、或は鹽を斷ち食を斷つて、藩主の居据り祈願の聲は全莊内に満ちあふれた。就中、稻荷は居成に通じてゐるといふので信仰が殊に厚かつた。

又一方轉封中止を江戸に哀訴するものが續出した。藩では領内の百姓に萬一不穩の舉動があつては幕府に對して濟まない、國境を

出る事を嚴禁した。すべての街道はとざされた、海路は塞がれた。然し、止むに止まれぬ至情に燃え立つ彼等は、丈餘の雪を踏み起え、飢寒と戦ひながら國境を越えて脱出した。そして、大老に、老中に、御三家に、訴願の計畫は次々と決行された。全く身命を賭しての實行であつた。

然し、一旦下された幕命は百姓の騒ぎによつて翻すことは出来ない。藩主は領民達を色々となだめられた。血涙を絞つて諭された。けれども領民の決心は堅かつた。死して後止む



圖の喜歡民士り据お

の覺悟である。秋田・米澤・仙臺・會津等の諸藩にも次々と嘆願した。若し、幕府が之をも押し切つて國替を斷行するならば、如何なる結果になるやも測り知れぬ様子であつた。諸藩の同情は翕然として集つた。嗚呼、至誠は遂に天に通じた。天保十二年七月十二日、幕命は終りに取消となつた。中止の命下るや、即日發した急使が十六日に莊内に着いた。吉報一度傳はるや、歡喜の聲は全莊内に漲つた。感極つて地に伏すもの、號泣するもの、歩み得ないで樹にすがるもの、河に落込むものさへあつた。やがて湧き返る感激が莊内の天地にうづまいた。社寺は報恩の祭祀に専念した。領民は手に手に心からなる祝の品を藩主に獻じた。藩主はこの至情に感激して涙を以てこの光景を見るばかりであつた。金帛並に米一萬一千俵を賑はし、道を以てこの民に酬い神明に應へんとされた。かうして、この大運動は終りを告げた。事を舉げてから九ヶ月、其の

間一人の私を挿むものもなく、事終つて一人の功を誇るものもなく、二十萬の領民は全く皆無名の義民であつた。

綸言汗の如しといふ諺があるが、其の當時に於ける幕命は殆んど綸言の重きにも比すべく、一旦發せられた以上、之を讎した事例は全くなかつたことである。然るに、萬民一心至誠の力は遂に能く之を覆した。實に類例のない義舉と稱すべきものであらう。

忠勝公入部以來當に三百年、莊内の民は今猶その祖が死守した土地を耕し續けてゐる。我等の藩主の子孫は鶴ヶ岡城址の畔で、今猶郷事に盡粹されてゐる。莊内の平野は毎年百萬黄金の波をたゞよはしてゐる。そしてゆるぎなき皇國の力となつてゐる。

### 十一 鈴木今右衛門

鈴木今右衛門は「尋常小學修身書」にも載つてゐる通り、我が莊内鶴ヶ

岡の人であつた。

中間小頭ちゅうかんこがしらを勤め、平素慈善の心あつく、殊に天明三年の飢饉には、低い身分でありながら、日頃暮し向を儉約して漸く買ひ求めた田畑までも悉く賣拂つて人を救つた慈善家であつた。

天明の凶作は同三年最も著しく、東北一圓、飢饉に襲はれた。就中、今の青森縣の津輕、岩手縣の南部の窮狀は特にいちじるしく、木の皮草の根を剥ぎ盡し掘り盡し、最早食ふべき何物もなかつた。自然、津輕、南部の人々は食を求めて秋田領に流れ込んだ。しかし、秋田とても凶作である。更に南へ南へと流れて鳥海の裾を廻り、續々、我が莊内平野に入込んで來た。路傍の死者その數を知らず、慘狀目もあてられぬ有様であつた。

幸、莊内の凶作は三割減にとゞまる程度のものであつた。由來、人情に篤い莊内人は、食を乞うて數十里の旅をつゞけて來た人々の瘦衰へ

た身體、蒼白な顔面を見ては黙するに忍びなかつた。鶴ヶ岡の城下に於ても、農村といふ農村に於ても、或は粥を煮、或は飯を握つて、飢ゑた同胞のために十分の至誠を盡した。

鈴木今右衛門は先づ、多少貯へてあつた米・麥の全部を飯に炊いて與へた。しかし、門口に救を求め助を乞ふ同胞の聲は、日夜依然として絶えない。

そこで、今右衛門は更にあるだけの金を出して米を買ひ求め、その救助にとめた。しかし、それも焼石に水であつた。更に、今右衛門は諸道具を賣り拂つてそれを米にかへた。或る日の午後の如きは、飯櫃に残る飯のすべてを與へ盡し、その夜は、親子一同食を攝らなかつたことさへある。

今右衛門の妻もまた情深い人であつた。花嫁時代からの着物も大方賣り盡してしまつた。たゞ晴衣が二枚、わづかに残つてゐる。或る

日、その最後の晴衣をさへ賣拂はうとした。

それを見た今右衛門は、妻に「お、それも賣るのか」と云つた。「まあ鳥渡まで。おまへは、それがなければ他所行も出来まい。そこは男と違ふ。まあそれだけは残して置いたらよからう」

「はい、ありがたうございます」と妻は云つた。「しかし、かうした着がへがありますと、つい他所へも出る氣になります。いつそ賣つてしまひませう。また、これを賣つて外へ出ることが出来なければ、しぜん、櫛や筍も要りません。それで、かうした髪飾などもお米にかへることが出来ます。で、この度だけは、どうぞ私の心まかせに願ひ致したう存じます」

妻は晴衣を賣つて外出の念を斷ち、櫛・筍・簪の類をも金にかへ米にかへて、一人でも多くの人々に救ひの手をさし延べようと、心に深く決してゐたのであつた。

しかし、貧しい今右衛門夫妻の衣類諸道具には限りがあつた。最早  
どうすることも出来ない。



鈴木今右衛門舊宅

「よし、田と畑を賣らう。人の命は何もの  
にもかへることが出来ない。いま人が死ぬ、  
それを目の前に見て、手を下さないのは人の  
道ではない。さうだ、田と畑を……」

今右衛門はその決心を妻に語つた。勿論、  
妻は快く同意した。

明けて天明四年二月、北風骨に徹る寒さの  
日、震へながら今右衛門の門口に立つた一人  
の少女があつた。見れば、ぼろの単衣一枚で  
ある。「お、娘と同じ年頃の子が親心が夫妻の胸に痛く涌いた。やが  
て、妻は今年十二の娘に「おまへは」と呼びかけた。「おまへは綿入を二枚

重ねてゐる。その一枚をこの子に……」

娘も亦さすがに父と母の血をうけて温いをとめ心の持主であつた。

「はい」と娘はにつこり微笑んで云つた。満足の微笑である。そして、  
立ちあがつて帯を解き、上に着てゐたよい  
方の綿入を脱ぎ、それを自分の手で少女の  
肩に掛けた。

はらりとと兩眼から涙が落ち、少女は暫  
くそこに立ちつくしてゐた。今右衛門夫  
妻の眼底もまた、そぞろ熱かつた。

世にも麗しき此の慈善はすべて今の鶴  
岡市新士町丙九番地に於て行はれた。

そこには、鈴木今右衛門の家が昔ながらに残つてゐて、よく往時の美  
談を偲ぶことが出来る。また、鶴岡市鳥居町正覺寺には「眞譽良道信士



今右衛門夫妻の墓

住譽妙誓信女」といふ今右衛門夫妻の墓石もあり、位牌も保存され、何時でもそれを拜することが出来る。

橘春暉は江戸時代の文章家であつて、南谿または梅幸仙史と號し、伊勢國藤堂氏に、醫を以つて仕へた人である。醫師であり文章家であると共に、また旅行家であつた。よく東西に漫遊し、天明五年、わが鶴ヶ岡にも遙々と杖を曳いた。その時、鈴木今右衛門とその妻、娘の慈善をつぶさに聞いていたく感激し、その紀行集「東遊記」卷之三に「鶴岡慈悲」の一章を設けて我が郷土の美談を詳述し、それを後世に傳へたのであつた。

## 十二 小關三英

明君の徳政は偉人を生む。我が莊内酒井家中興の英主忠徳公の治世には幾多の偉人を輩出した。蘭學者小關三英もその一人である。

三英は天明七年六月十一日、父彌五兵衛知義の二男として鶴ヶ岡に

生れた。幼名を貞吉、實名は好義、篤齋と號した。

幼少の頃より身體羸弱であつた上に、火傷の爲に跛となつた。長じて藩費致道館に入り、漢學を學んだ。然し、家格低く、且つ次男であつた爲、學術を以て家を立て名を擧げることの至難なるを覺り、間もなく辭して江戸に上り、蘭醫吉田長淑について蘭學を學んだ。

當時、我が國は海外文化の刺戟に遭ひ、徒らに鎖國の夢に耽ける事は出来ない事情であつた爲、幕府は翻譯局を設け、西洋文化の輸入を圖り、三英に命じて蘭書を翻譯せしめた。三英は當時の堂々たる洋學者の間に伍して、その學力に於て優るとも決して劣る所がなかつた。かの有名な「厚生新編」は佛人シヨームルの百科辭典を翻譯したもので、僅か數年で完成したのである。

三英は蘭方を修得した當時第一流の臨床醫家であるが、彼の得意とする所は寧ろ該博な一般蘭學文化の蘊蓄にあつた。永い忍苦の浪々



生活の間にあつて、刻苦奮闘、博く蘭書を涉獵し、歴史に、政治に、物理學に精通し、西洋文化を開拓して之が浸潤をはかり、時事を論じて經世を策した憂國の先覺者であつた。

彼は醫業の傍、幕府天文臺の囑託を受けて翻譯に従事した。文政四年、三十五歳の時、鶴ヶ岡に歸郷し、高畑町に醫を開業したが、漢方を唯一の玉條とする人々は洋醫の優れるを解せず、その上、足疾の爲隨意に往診する事が出来なかつたので、家業甚だ振はず、僅か滞郷一年で仙臺醫學所の聘に應じて同所の教師となつて去つた。

然るに翌年八月、和蘭の醫官で博物學の權威シーボルトが長崎に来るを聞き、就いて更に研鑽を遂げようと思ひ、醫學所を辭して京都に行き、蘭醫、小石元瑞を訪ねた。元瑞は三英と同學の舊知で、その志を聞き、三英の長崎遊學を援助することを約した。三英は踊躍して長崎に赴き、居ること約一年、再び京都に歸り、元瑞と父子の契を結んだのである。

その後、大阪岸和田で醫業を開いたが、元來三英の性格體質は之に適せず、天保二年、去つて江戸に來り、幕醫桂川甫賢に寄寓した。參州田原藩の志士、渡邊華山と相知つたのはその時である。

當時華山は意を國防に注ぎ、海外の事情を知らうと、力めたが、事務煩勞の爲、力を洋學に注ぐ事が出来ず、三英に海外の事情を聞き、或は蘭書を譯させて之を耽讀したのである。後、三英は華山の取計ひで、再び岸和田藩の醫官となり、名聲大いに揚つた。高野長英、渡邊華山等と同志の者が集り、醫學の外、政治、經濟、兵學等に關する諸般の蘭書を講究して時弊を論議した。之が尙齒會の濫觴であるが、蘭書を解して泰西の知識を供給するのは三英と長英との任であつた。

斯くして蘭學の隆盛、西洋文化の浸潤が日毎に進展して行くのを見た聖堂の林大學頭、江戸町奉行たる弟、鳥居耀藏等は之を惡み、機を見て彼等を陥れようと企て、居た。

天保九年、英將モリソンが艦隊を率ゐ、我が漂流民を送つて來航するとの報を得た幕府は之を擊攘することに決した。攘夷の不得策を信ずる華山は「慎機論」を著し、長英は「夢物語」を著して其の非を論じた。その資料は大方三英の智囊から出たものであつた。偶、江戸の宿屋彦兵衛等が幕府の法度を破つて無人島を探險せんとする企あるを聞きつけた幕府方の漢學者系統の者は、この機會を以て洋學者を一網打盡に陥れようとし、彦兵衛等の陰謀は蘭學者の煽動に據るものであると讒訴した。五月十日、華山は直ちに獄に繋がれ、長英は一旦逃亡したが、十八日、自首して獄に投ぜられたのである。危険の身に逼るを覺つた三英は、羸弱の身を以て縲紲の苦しみに堪へ難きを知り、獄中に悶死するを潔しとせずして書類を火に投じ、決然自刃して果てたのである。「嗚呼、天下の一名匠此に至りて亡び、我骨肉と盟ひし親友卒然と逝きぬ。我が哀み譬へんに物なく、惜しみても尙ほ餘りあり。」とは其の死ぬ。

の早きに失するを惜しむ長英の悲痛の歎聲であつた。生前身を貧困と落魄の間に置き、幕府の彈壓と戦ひつゝ、終に斃れた三英の生涯は極めて不運の人たるを免れ得ない。けれども、歿後殆んど百年の昭和四年、朝廷其の功を録して従四位を追贈せられ、天恩茲に枯骨に及び、泉下の靈幸に瞑すべきであらう。

### 十三 田邊龜次郎の大矢數

かねて、御願申し上げて置きました私年來の望の大矢數は愈々來る四月十五日に行ふことになりました。武士の面目誠にこれに過ぎるものはありません。精根の限りを盡して御上の御恩にそむかぬやうに致したいと思ひます。ついては、若しも不覺を取りましたならば、唯切腹を以て御詫び申し上げます。なほ、私が常悟で御座いますから、後々の事はどうぞよろしく御願ひ申します。なほ、私が常々身を離さなかつた國清の刀は愚息富次郎に傳へて下さるやうに……この手紙を受けとつた治郎右衛門はじつと紙面を見つめて居りま

したが、靜かに押戴いて、やがて、之を神前に供へて額づきました。これは今から百二十餘年前、文化十三年四月のこと、當時強弓を以て其の名を馳せた田邊龜次郎重次が大矢數の覺悟の程を身中根治郎右衛門に言ひ送つた手紙であります。

龜次郎は幼い時から物事に熱心で氣象の烈しい人でありました。身體が大きく、殊に臂の力が強くて弓を射ることが大變上手でした。寛政十二年、二十一歳で家督をつぎましたが、翌年の享和元年に藩公は龜次郎の願をいれられ、修業の爲めに百石を給して江戸の眞鍋彦五郎といふ弓の先生に學ばせました。

龜次郎の修業は實に眞劍なもので、技はずんずんと進み、翌二年四月には深川の三十三間堂で千射せんを行つたところ、通矢六百三十本といふ驚く程のよい成績をあげました。藩公は大變喜ばれて色々と賞與を下された上、早々國に歸つて年老いた父母に此の趣を告げよとの情深

い御言葉があつたので、一度國に歸りました。

三十三間堂といふのは横の長さが六十六間ある御堂で、二間おきに柱を一本づゝ建てゝあるから三十三間堂と呼ばれ、その長い廊下で弓を射て、勢よく通り抜けた矢を通矢といひました。

大矢數は龜次郎一生の念願でありましたが、藩公は容易に御許しになりませんでした。蓋し、これは龜次郎一人のことではなく、一藩の面目をかけての大事であるからであります。

文化十二年五月、「豫ねて願ひ奉り候大矢數、願の通り仰せ付けらる」と云ふ達しを受けた時の龜次郎の喜はどんなであつたでせう。すぐに江戸に上り、それからの稽古といふものは眞に血の出るやうなものでしたが、藩公を始め藩士の激勵も亦實に力のこもつたものでありました。

文化十三年四月十五日、待ちに待つた大矢數の日は來ました。三十

三間堂は周圍に矢來が廻はされ、高提灯、篝火の用意も厳しく、高棧敷には酒井家御紋の絹の幔幕を張り、家老始め掛りの諸役人、大勢の弓師、矢師、矢取の足輕等に至るまで、各固唾を吞んで時の至るを待つて居り、師の眞鍋彦五郎は龜次郎の側に控へて居ります。若君達も御出になり、御客席には姫路の酒井雅樂頭や勝山の三浦志摩守などの諸侯方も見えました。

目明六ツ(今の午前六時)の太鼓を合圖に第一の矢は放たれました。名代の強弓、一息一矢といふ言葉もおろか、番へては放ち番へては放つ矢は目にもとまらぬ程です。千本を射たといふ最初の注進は午前八時、早くも神田の本邸に達しました。續いて、次の千本のは午前九時に、又其の次のは十時にと首尾のよい次々の注進に、藩公はどんなに喜ばれたこととせう。然し、折悪しく降り出した雨が午後からは次第に強くなり、夜になつては風さへ加はり、通矢の妨となること一通りでないの

で、人々は憂の色に鎖されましたが、龜次郎は勇氣益奮ひ、手からしたゝり散る血潮をもものともせず、翌十六日の明六ツを告ぐる迄、總矢數九千六百五十五本、其の内、通矢三千六百八本といふ誠に驚くべき成績でありました。

深川三十三間堂が創つて以來の第一として、江戸市中の評判はたいしたもので、姫路の酒井侯の望みにより、通矢五本を差上げたのを初めとして、家の護りにするからと矢を乞ふ人がひきもきらない有様でありました。

藩公の喜びは又格別で、當座の褒美にと御紋付の袴、澤山の賞與を下され、やがて、三十石の加増といふ有り難い御言葉を戴きました。時に、龜次郎年三十七歳、三十三間堂には名譽の額が掲げられました。其の後、藩の學校致道館の矢場の射初式に、或は若君誕生の墓目役に、生涯弓道を以て御奉公を申上げ、多くの子弟に教へました。

天保十三年、六十三歳で病を得て床についてからも、常に弓を側から離さず、朝夕、これを引いては心を修めて居ましたが、病勢漸く進んで、やがて引く力もなくなり、靜かに弓を額にあてたまゝ、瞑目したと云ふこととす。

一代の武人の面目誠にかくてこそと、人々をして賞嘆せしめたのでありました。

文化十三年丙子年四月十五日明六時  
射懸同夜焚燔翌十六日明六時射結

雨天

莊内家中

### 大矢數

田邊龜次郎重次

通矢三千六百八本  
總矢九千六百五十五本

土井甲斐守内  
眞鍋彦五郎指南

### 十四 清川 八郎

山嶽重疊せる出羽丘陵を切つて流れる最上川が莊内平野に出る所に清川村がある。この山紫水明の里が勤王の志士、清川八郎正明を生んだ。それは天保元年十月十日であつた。

先祖は代々勤王の志の厚い郷士で、父は齋藤治兵衛と云ひ、能く人を愛し窮民に施した敦厚寛仁の人であつた。母は鶴岡の人三井氏の女で、温良恭儉、然も毅然たる性格で、父母共に其の徳が景慕されて居た。八郎は幼少の頃から腕白者であつたが、能く學を好んだ。七歳にして初めて孝經の句讀を父に受け、十八歳までに四書及び詩經、易經、禮記、文選等の句讀を了へた。父は書齋として一室を興へたが、常に高聲に讀書して深更に及び、隣家の老人は安眠を妨げられ、父雷山に哀訴して來た事もあつた。又、刀劍を愛して密かに買求め、父に見出されて叱ら

れたので、之を知人にあづけて居つたといふことである。

十八歳の時、遊學の念止み難く、屢、父に請うたが許されなかつた。五月二日の深更、一書を枕頭に遺し、密かに朋友知己に留別して遂に家郷を去つた。健脚に任せて道を急ぎ、残雪猶深き六十里越の嶮を突破して獨旅を續け、早くも十七日には江戸に着いた。今こそ兩親の意に背いたものゝ、堅く期する所は文武を兼修して一代の師となり、天下第一の人となつて孝の終りを全うするにあつた。



清川八郎肖像

一時、伯父に使つて糊口の道を得、八月、東條一堂の塾に入つた。翌年、伯父の商用に伴はれ關西に旅して京都御所を拜した時、その餘りの御

質素さにそゞろ涙にくれ、益、勤王の志を深くしたといふことである。其間もなく弟熊二郎病死の報に接し、悲嘆にくれる父母を慰める爲、郷里に歸つた。兩親は妻を迎へて、四方の志を抑へようとしたが、彼の遊學の志は止むべくもなかつた。父は、止む事を得ず、雲井まで登らばかへれあげ雲雀の一句を餞として彼を送つた。嘉永四年、八郎は二十二歳となつた。一月、再び東條塾に入り、二月、千葉周作の門に入つて一刀流の劍道を學び、只管文武兩道に勵んだ。翌年二月、安積長齋の塾に轉じ、三月、昌平黌に入つた。然し、聖堂は學に志す者の止るべき所ではないとし、單獨に決行することにし、二十八歳まで、一切の俗事を絶つて文武の道に没頭した。彼は一度筆を執れば、千言立所に成る天稟を備へて居た。すでに孔孟の眞精神を正しく把握し、經學に、詩文に、軍事に全備の學者たらんとして餘念なく努力した。その結果は身丈に等しい著述を残したので

ある。又劔を取つては非凡の伎倆を示し、千葉門下の逸足とされ、劔客の名を東都に馳せたのである。然も、八郎はその性豪毅果斷、如何なる窮地に陥つても、決して其の難局から面を背けることなく、其の思想と實行との間には些かの間隙なく、そこに彼の人格の力強さがあつた。

實行家として彼の志せる所は純然たる尊王攘夷にあつた。彼が文武の道に精勵しつゝあつた間に、時勢は坂を下る石の如くに急轉して行つた。

嘉永六年、米使ペリーが浦賀に來航して和親條約を結んだのは、彼が二十四歳の時である。それから三年後、ハリスが下田に來朝し、幕府は勅許を待たずして諸外國と通商條約に調印したのである。又大老伊井直弼は衆議を斥けて將軍世嗣を決定し、續いて安政の大獄が行はれ、翌萬延元年、直弼櫻田門外に水戸浪士の要撃に斃れてより、國內は動亂

の巷と化し、尊王・佐幕・攘夷・開港の論喧々囂々として歸する所を知らなかつた。

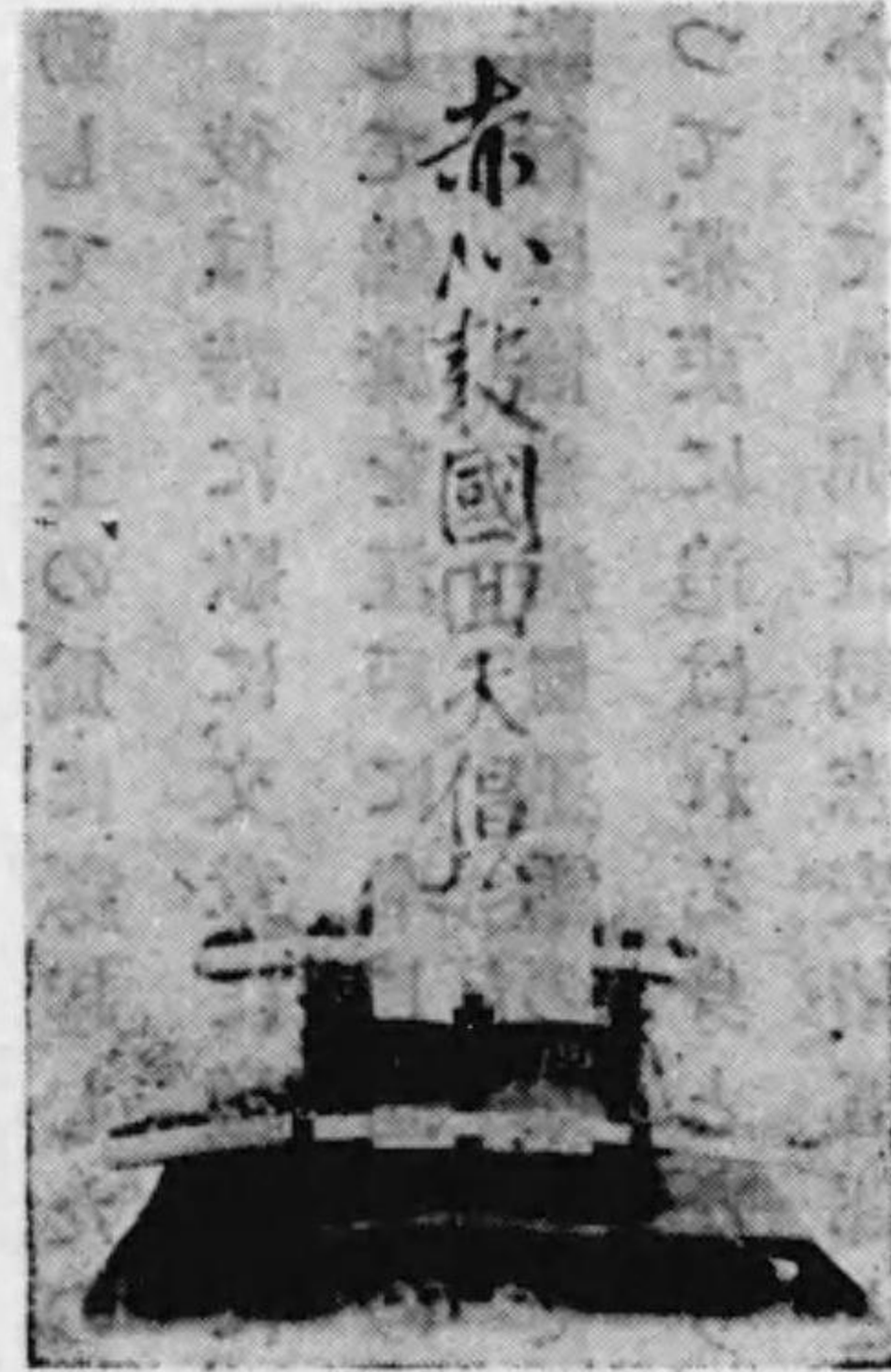
八郎は三年間籠居の心組で歸省したが、鬱勃たる進取の氣象は、歸臥一年にして彼を驅つて郷里を去らしめた。彼の實行的精神は再び躍動して尊王の爲に蹶起したのである。

彼は詩に歌に、文章に議論に、盛んに諸國を遊説し、多くの同志を糾合して錦旗を江戸に奉じ、回天の業を一舉に成さんと謀つた。彼の決意斷行は恰も疾風迅雷の如くであつた。然し彼は無禮人斬殺の事によつて、幕吏に追はれる身となり、この義舉も終に水泡に歸してしまつた。かくて八郎は同志安積五郎と共に江戸を脱走し、身を隠して關東・奥羽・中部の諸國を潜行し、時機の到來するのを待つて居た。

京都に着いた八郎は、中山大納言家の臣、田中河内介を訪ね、伊牟田・安積と密議し、大納言の取計ひで天朝の密旨を受け、九州に渡り、同志を集

めて歸洛し、回天の大業掌中に在りと喜んだ。

文久二年、彼が三十三歳の時、島津久光公が近く東上すると聞き、之を途に迎へて攘夷の賛成を求め、公を京都に擁して義舉を決行せんとし、



旗と刀

急使を九州の同志に馳せ、水戸の同志に奮起を促し、東西呼應して一時に事を挙げようとした。斯くして、同志は大坂の薩摩屋敷に上り、長州・土佐の同志とも氣脈を通じて居た。宿志の果さるゝの近きを喜んだ八郎は意氣揚々「赤心報國回天倡始」の旗を用意した。正に山雨到らんとして風樓に滿つといふ様な物凄い形勢であつた。四月九日、久光公は一千の兵を率ゐて大阪に着いた。内面の實情を知らぬ志士は皆公の快舉を信じて居たが、期待は裏切られた。八郎は

薩摩屋敷を去つて密かに京都に入つた。薩摩の同志四十餘人は、若し猶豫して八郎の一黨に義舉の先鞭をつけられん事を恐れ、急遽四艘の船に分乗し、薄暮伏見の寺田屋に憩ひ、將に京都に向はんとした。この時久光公の急派せる鎮撫の一行が駈けつけ、議論の末、終に双方刀の鞘を拂つて亂闘した。この寺田屋事件によつて、關西に於ける勤王運動は一頓挫を來し、八郎は無念の涙を呑んだのである。併し、これがどれだけ天下の人心を奮起させたか知れぬと自ら慰めた彼は、豫ての方針に則り、更に關東の攘夷運動に従ふべく、六月六日、東下の途についたのである。

江戸に下つた八郎は暫く山岡鐵舟の宅に潜んで居たが、國事に盡した志士の罪を大赦する意見書を幕府に差出したり、又浪士組の黒幕となつて専心攘夷の實行に奔走した。その間、水戸・仙臺等を奔走し、同志を糾合して居た。



朝廷は幕府に勅して五月十日を攘夷の期限とする旨を諸藩に布告せしめた。併し、因循姑息な幕府は一日々々を糊塗して行くばかりなのを見て、八郎は斷然獨立大舉して攘夷を決行する覺悟をきめた。即ち、同志と共に横濱の異人屋敷を焼き拂ひ、日本刀を揮つて外人を斬り、石油を灑いで黒船を焼き、直ちに神奈川の本營を略し、甲府を陥れて本據とし、義旗を此處に掲げて天下の有志を募り、勅旨實行の事を朝廷に上申してその指揮を仰がんと準備を整へた。

うすく、此の密謀に氣づいた幕府は密かに八郎の動靜をさぐつて居た。

或日の事、上山藩士にて親友なる金子與三郎からは非來てくれとの使が來た。鐵舟は八郎の顔色の勝れぬのを見て、行く事を止めたが、強ひて出かけて隣家の高橋泥舟の宅に立寄つた。泥舟も亦思ひ止まる様にすゝめたが、「武士が一旦約束して之を破るわけには參らぬ」と言

ひ、白扇を求めて靜かに筆を執り、

魁けてまたさきがけむ死出の山

迷ひはせまじ皇の道

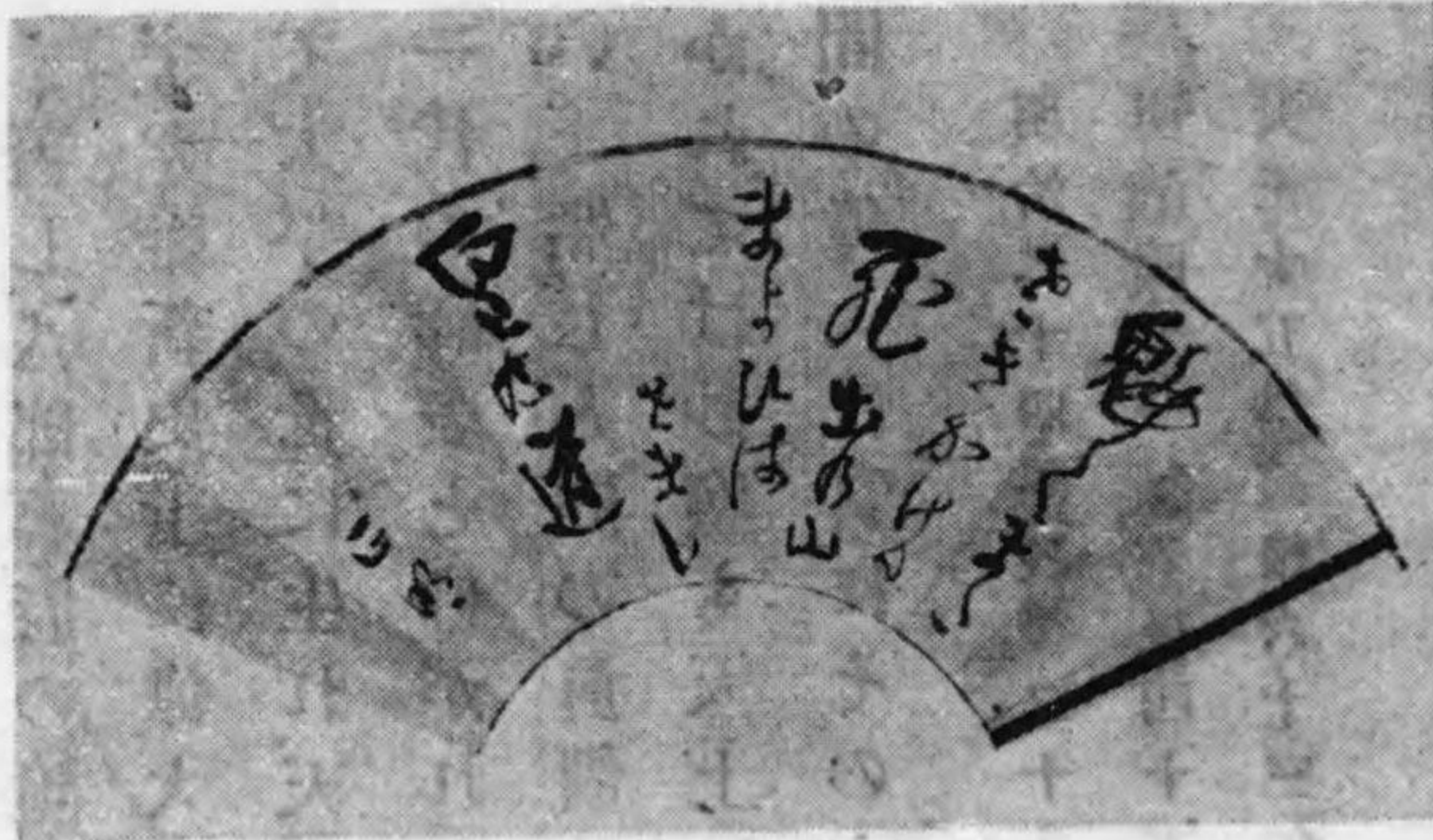
他の一本には

砕けてもまた砕けても寄る波は

岩角をしも打砕くらむ

と自作の和歌を書いて出かけた。

麻布の金子の寓居に到り、獻酬終日に及び、よい酒機嫌で屋敷を出たのは今の午後四時頃であつた。橋を渡つて二人の武士に遭つた。見れば、浪士組の者である。笠を取つて挨拶しようとしたその刹那、後から激しく頭部を斬付けた者があつた。流石の八郎も、刀に手をかけたまゝ「無念」の



歌和の世辭 跋筆郎八川高

一聲を残し、終に刺客の凶刃に斃れた。年僅かに三十四。蓋し、八郎幕府の詭計に斃れなかつたならば、彼は浪士組を率ゐて必ずや維新史上に偉大なる功業を成し遂げたことであらう。又、彼をして太平の世に生れ、天壽を完うせしめたならば、必ずや大學者となつて一代の師表と仰がれたことであらう。八郎の死は實に痛惜に堪へない。然し、人間の眞價は事の成否を以て圖る事が出来ない。疾風に捲かれては砂塵も天上に舞ひ、秋風に煽られては枯葉も空中に飛ぶ。人間の偉大は實にその志操に在る。

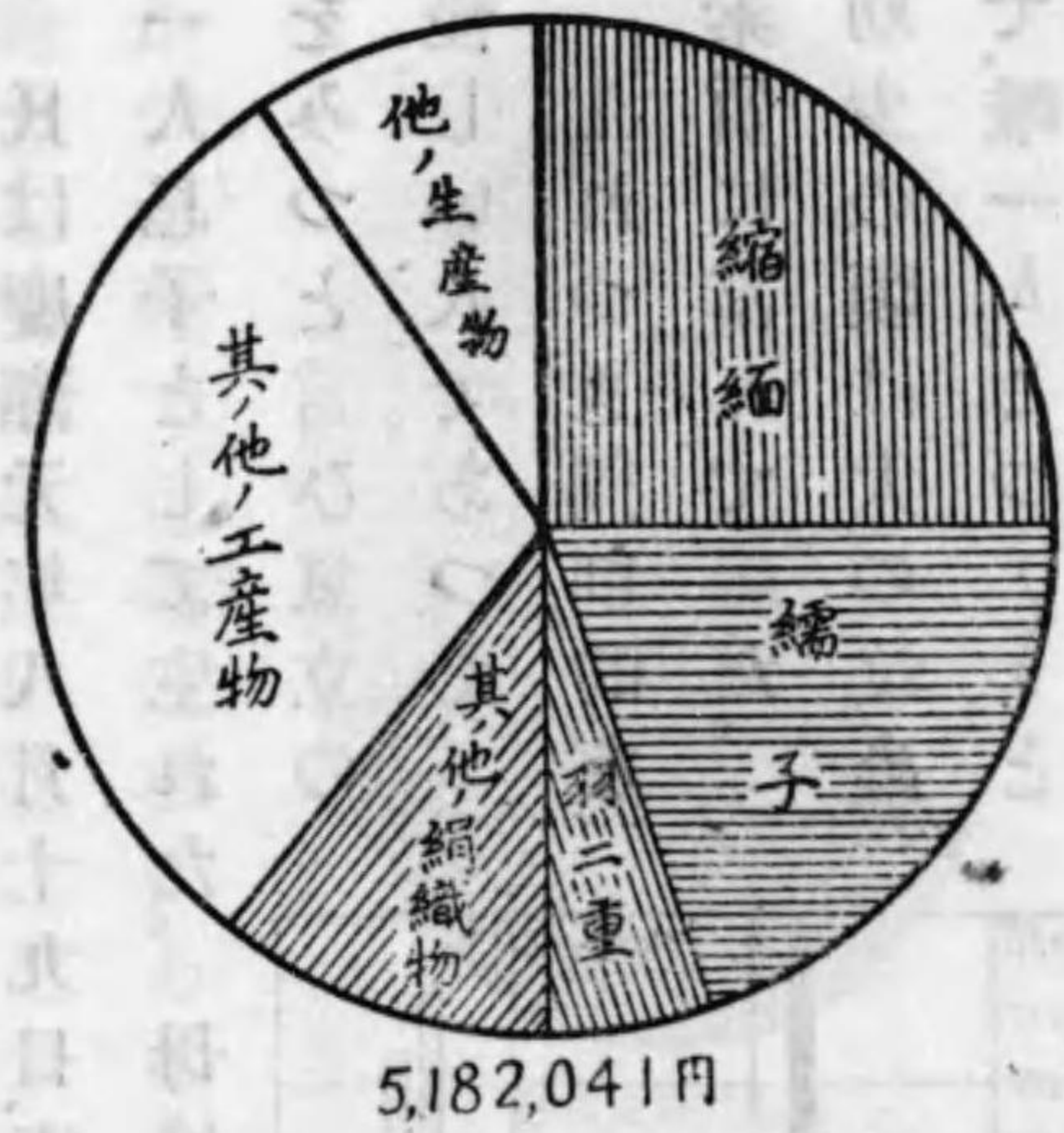
明治二十四年(歿後二十八年)十一月 靖國神社に合祀せらる。

明治四十一年(歿後四十五年)九月 特旨を以て正四位を贈らる。

大正十五年(歿後六十三年)九月 清川神社創建を許可せらる。

### 十五 齋藤外市

鶴岡市の機業の發達は、主として海外貿易の影響により一盛一衰はあつたが、最近は主なる工場二十有餘、機臺千七百、従業員二千餘人、年産額五六百萬圓に達して極めて活況を呈し、本市生産額の過半を占め、市産業上最も重要な地位を確保して居る。



鶴岡市絹織物生産額 (昭和二十年)

は、我が機業の勃興發展を促進させた一大恩人であり、又發明界の偉人

として世に崇敬されて居る。

氏は慶應元年八月十九日、東田川郡長沼村上新田の豪農、齋藤外助の一人息子として生れた。母は西田川郡安丹村吉田仁右衛門の娘で、名をみつと言ひ氣立の優しい人であつた。

生れつき獨創的な

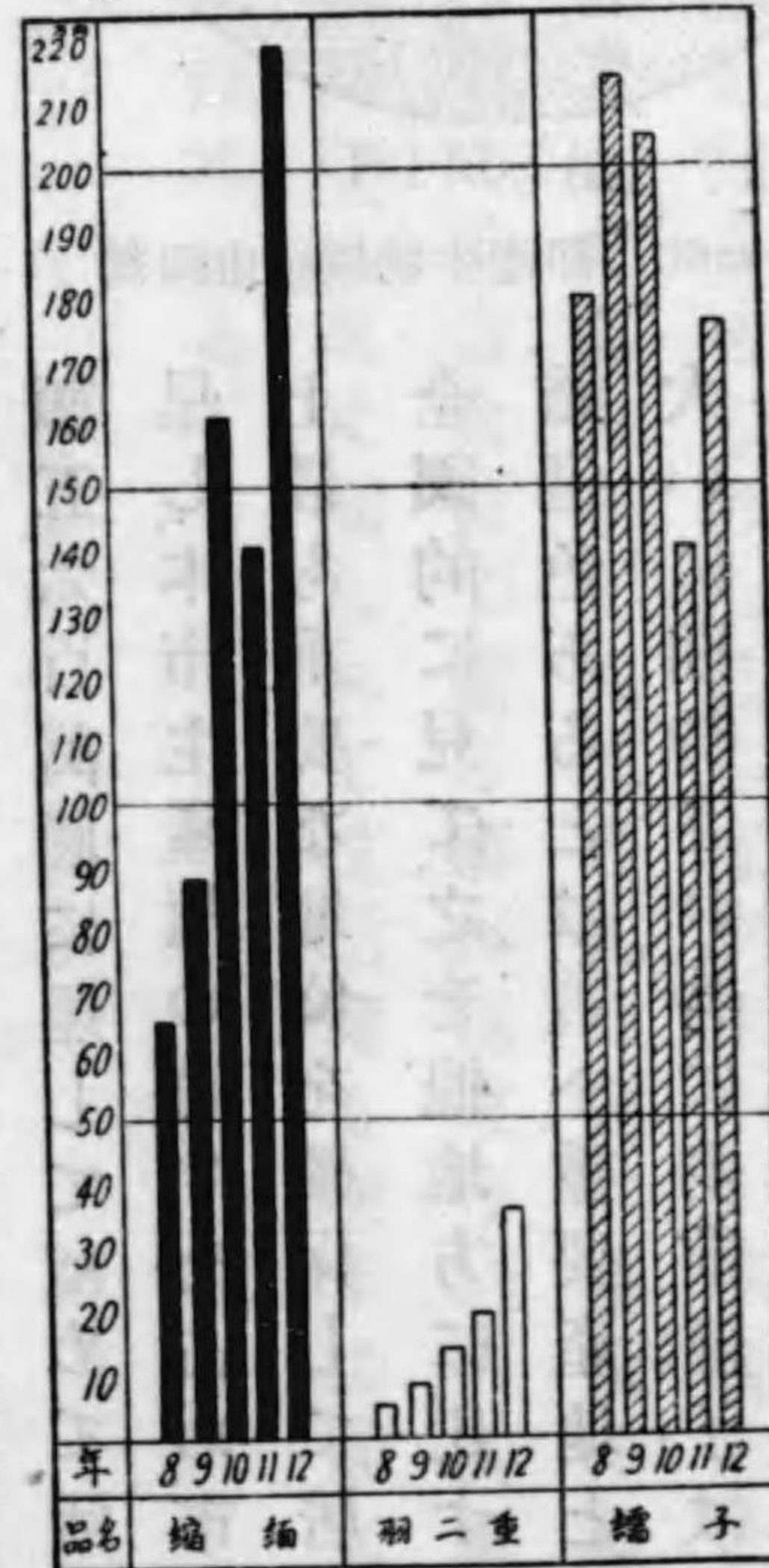
素質に富んで居た。

幼少の頃は大の泣蟲

で、唯一人、こつくと

噴水等を工夫考案して遊ぶのが常であつた。學問も餘り出來ず、學校も小學校で止めたけれども、物理の讀物は幾らむづかしいものでも喜んで勉強したと言ふ。

明治三十年、氏が三十三歳の時、輸出羽二重の前途有望なるを見て此



(同年ヶ五近最)

額産物織編要主市岡鶴



像肖氏市外藤齋

の機織を創めた。然し、羽二重は動力を用ひ、力織機を使用しなければ、その發達は望まれず、さりとて、外國製の機械は高價な上に、餘程慣れなければ運轉が出來ない事を知つた氏は斷然これを發明考案しようとして決心した。さうして、全精力を傾倒し、専心力織機の發明に努力した。

或時は、唯一人土藏の中に引籠り、豆煎りを蹴りながら三日も考へ續けた事もあつたと言ふ。

氏が齒車の作用研究の爲、わざわざ莫大の金を投げ出して自動車一臺を買求めた。當時は未だ鶴岡にも自動車の無かつた時で、近郷近在からの見物人が毎日のやうに續いた。乗用を目的としない氏は早速之を分解して研究に着手した。之を見た世人は、あらゆる痛罵と嘲笑を浴せたが、氏の胸中には、唯、力織機の考案以外何

物もなかつたのである。この有様を見て、齋藤家の將來を案じた知人が氏に其の中止を懇切に忠告した。氏は憤然として、「世間には私慾の爲に財産を無くする人さへある。今日、國家の爲であつたならば、財産も身體も惜しくはない」と言つたといふ事である。こゝに氏の偉大な精神の一断面を見ることが出来る。堅忍不拔、刻苦碎礪、遂に力織機の發明は完成されたのである。之を齋外式力織機と言ひ、明治三十三年、專賣特許を受けるに至つた。その後、間もなく鶴岡に水力電氣が引かれたので、電力供給に便利な鶴岡に工場を移した。さうして、業務を經營しつゝ、齋外式力織機應用の効果と運轉の簡易なことを世に示した。これが鶴岡で力織機を用ひた最初である。

齋外式力織機は外國製品に比べて、その價格が低廉で、動力を要することと尠く、箴の反動を止める事を考案して羽二重の耳が綺麗に出來、作業が輕便な爲に非常な歡迎を受け、争つて之を購入すると言ふ状態で、こ

れが爲、頗る斯業の發達隆盛を來したのである。

今日全國的に使用されて居る力織機は大方齋外式のものに改良を加へたものである。氏の發明は獨り之のみではなく、水雷艇、潜水艇、飛行機、小銃の百連發等、兵器の考案製作にも多大の貢獻をしたのである。氏の斯うした我が日本産業界に、又國防上に殘した足跡の大なるを思ふ時、その偉大なる精神と功績とに感激せざるを得ないのである。

發明年表

明治二十二年(二十五歲) 五月、軍用輕氣機、潜航船を發明し、夫々陸軍省、海軍省に提出して共に採納せらる。

明治二十五年(二十八歲) 手織足踏機の不便を感じ、力織機の發明に着手す。

明治二十八年(三十一歲) 一月、改造水雷艇を發明す。

明治三十二年(三十五歲) 管捲機を發明す。

明治三十六年(三十九歲) 攻撃水雷を發明す。

明治三十七年(四十歲) 防禦用進行水雷、防禦用連繫水雷、攻撃用曲進水雷、攻撃用開

展水雷を發明す。

明治三十八年(四十一歳) 九月、潜航艇を發明す。

明治四十一年(四十四歳) 飛行船を發明し、試験に従事す。 九月、織機送出し装置を發明す。

明治四十三年(四十六歳) 七月、飛行機を發明す。

明治四十五年(四十八歳) 一月、齋外式飛行機を發明す。 五月、賞勳局より藍綬褒章を下賜せらる。

大正二年 (四十九歳) 三月、刺繡織機を發明す。

大正四年 (五十一歳) 人造絹絲の製造方法を發明す。

大正八年 (五十五歳) 五月、十連發小銃を發明す。

大正十二年 (五十九歳) 自動製糸機を發明す。

大正十三年 (六十歳) 製鹽装置稻扱機を發明す。

大正十四年 (六十一歳) 脱稈機を發明す。

大正十五年 (六十二歳) 一月三十一日、腎臓病にて死去す。 十月二十日、帝國産業協會總裁、伏見宮博恭王殿下より表彰狀を拜受す。

### 十六 高山 樗 牛

明治四年一月十日、時計の長針・短針がびつたり重つて丁度正午を示した時、文豪高山樗牛は呱呱の聲をあげた。父齋藤親信、母芳子の兩名によつて林次郎と名づけられた。樗牛は即ち號である。

樗牛は二歳の二月、伯父高山久平の養子となつた。生家齋藤家は現在の鶴岡市高畑町乙二番地、養家高山家は同市新士町甲十八番地で、今も往時の面影をそのまゝ残してゐる。

明治十年、七歳の時、樗牛は始めて學校

に通つた。高山家の近くに今でも本鏡寺といふ寺がある。その寺の本堂を教室にあてた本鏡學校に於て、樗牛は勉學の第一歩を踏出した



樗牛 像

のである。

送詠一首

めはらうしやうしやく  
室にかがやけりて  
秋りにて代に沈りて  
日よ。青春人にして  
或町も、是は惜  
り、送詠一首。

牛樗筆蹟

養父高山久平は官吏であつた。それで、任地の變る毎に、樗牛もまた養父に従つて山形・酒田・福島と、夫々轉校しなければならなかつた。

明治十四年の秋、明治天皇は莊内に御巡幸あそばされた。その時、酒田町琢成學校小學上等三級生であつた樗牛は、次の文を作つて御巡幸をお祝ひ申し上げた。

茲ニ明治十四年九月、我文武叡聖ナル 天皇陛下ニハ、  
葦輿ヲ我奥羽地方ニ向ケ給フ。夫レ我國開闢以來已ニ二千有餘年、而シテ奥羽  
ノ如キ、未ダ曾テ此ノ如キ美事アラザルナリ。今ヤ

天龍親ク人民ノ疾苦ヲ問ヒ、或ハ各地方ノ學校ニ親臨シ給ヒ、以テ進歩ノ實效ヲ  
褒賞シ、將來ノ事業ヲ奮勵セシメラルルハ、我地方ノ幸福何ゾ是ニ加ヘンヤ。聊

カ鄙意ヲ陳ベ、北地 御巡幸ヲ祝シ奉ル。

明治十七年、十四歳の時、樗牛は福島中學に入學した。當時の日記「光陰誌行」が残つてゐる。それに據つて見ても、中學時代の樗牛が如何に頭腦明晰にして博覽強記であつたかを想像することが出来る。

翌々年、樗牛は上京して東京英語學校に學び、高等中學校入學の準備をした。そして目的通り仙臺第二高等中學校に入學したのは明治二十一年であつた。成績は概ね首席、名篇「人生終に如何」を草したのも、ゲ―テの「准亭郎の悲哀」を譯したのも、みなこの仙臺の第二中學時代のことである。

明治二十六年、東京帝國大學に入學し、哲學科に籍を置いた。歴史小説「瀧口入道」は其の年の暮に起稿して僅か三週間に於て脱稿したものと傳へられる。翌年、それが讀賣新聞の懸賞募集に應じて、見事第一位

に當選した。是に於て、無名の一學生高山樗牛の文名は、忽にして中央の文壇に喧傳された。樗牛はその年の四月十九日、東京から鶴岡の養父高山久平に一通の手紙を書送つた。

一筆啓上仕候。追々暖暑の時節に相成候處益々御機嫌能御暮被遊奉賀候。私事無事勉學罷在候間御安神被下度候。此度良太上京國元の様子も精敷き、申候。又其節同人に託して菓子料として御贈被下難有奉謝候。學年の終にそろそろ近づき候事故學校も少々多忙に相成候。當地昨今は非常の暖氣にて袷一枚にシャツ一枚にて丁度宜敷時候は冬以來少々早き様に御座候。今月初春休業一週間有之候を幸ひ友人新城新藏氏と共に鞋がけにて甲州地方に遠足し富士山の麓まで参り候。時候はよし天氣もよし日々車などには一里ものらずしであるき候事故身體もよく實に非常の愉快に御座候ひし。

文中の良太は齋藤良太で、即ち樗牛最愛の弟である。また友人新城新藏氏は後

の京都帝國大學總長理學博士である。

當時、樗牛は身長五尺四寸、體重十五貫五百目といふ健康な體軀の持主であつた。従つて、富士山麓までの徒歩旅行も、青年樗牛の健康振りを遺憾なく發揮した一例と云へよう。尙、手紙は「瀧口入道」に就いて次のやうに續く。

扱此度不圖せしことより少し金儲を致候。夫れは外の事にも無之昨年十月頃より今年二月十五日を限りにて讀賣新聞社にて賞金をかけて小説及芝居之脚本を募集せしが私事如御存病氣にて太田氏方に引籠り療治致居候時不圖此事に思ひ付きドーセ病氣中はむづかしき書物もよめぬこと故慰み半分に小説でも書きて見んと思立ち去年十二月二十九日より着手して「瀧口入道」と云ふ歴史小説作り讀賣新聞社に差出候處此度其結果相明り二十餘種の小説脚本中僥倖にも私の「瀧口入道」が優等と相成金時計一箇同新聞社より贈られ候。

文中の太田氏は樗牛の叔父である。

尙、樗牛は養父に對して、一學生、一青年とも思へぬ程の、實にこまやかな心遣ひを次の如く書き綴つた。

私書生の事故金時計は用る所なければ相當の代金にて受取候様同社に申込右金子落手仕候。之れ我金にて我金にあらず皆父上様のものと存候得ば右處置方御教示被下度候。私の考候には來月より九月までの學資は此方にて辨じ可申(但今月丈は御送被下候様願上候候間來月よりは凡て御送無之様相願度又其餘分は良太當地に居候得ば七月休暇歸國まで數圓補助致度其餘少々の金は靴書籍等の購求に費申度右如何に候や御伺申上候。讀賣新聞社よりもらひし金は五十圓に御座候。—中略—。右金の使ひ方に付御異存も御座候はゞ御教示被下度奉願候。別紙金時計の目錄御参考の爲御目につかけ候。—中略—。右一寸要用迄御返

事御待申上候。 恭々不一。 右瀧口入道は當時讀賣新聞に掲載中に御座候。

明治二十八年一月、樗牛は東京帝國大學文科の先輩及び同志と相謀つて雑誌「帝國文學」を創刊し、自ら創刊號に序詞を書いた。爾來、每號執筆、就中「巢林子の人生觀」など世評最も高く、樗牛の地位は文壇にいよいよ確立するに至つた。同年七月以後、雑誌「太陽」の評論を受持つた。忽ち「太陽」は生彩を加へ活氣を呈した。これ勿論、樗牛の思想及び文藝に關する論文が優れてゐたためである。樗牛は明治二十九年、二十六歳で帝國大學を卒業した。十月、雑誌「太陽」を退いて第二高等學校の教授となり、仙臺に赴任した。樗牛の出身校たる第二高等中學校は二高の前身である。即ち樗牛は母校の教授となつたのであつた。翌年、東京帝國大學及び早稻田大學の講師となり、美學及び美術史を講じた。また、雑誌「太陽」の主幹となり、諸種の論文を發表した。「日本主義」以下の著名な論文も當時の「太陽」に掲げたものである。



樗牛は「日本主義」に於て、我が日本は日本の特性に基く自主獨立の精神に依つて須らく建國當初の抱負を實現すべし云々と論じた。それが既に明治三十年代の初めに於てである。そこに先覺者としての樗牛の偉大さが燦然として光つてゐるではないか。

それ以後、「月夜の美感に就いて」「文明批評家としての文學者」「清見寺の鐘聲」「日蓮上人とは如何なる人ぞ」など、一世を揺り動かした製作は一々枚舉に遑なく、殊に二十九歳の明治三十二年の如きは、一ケ年間に世に問うた論文が實に一百有餘篇の夥しい數にのぼつた。

明治三十三年六月、文部省から、美學研究のため、獨佛伊へ留學を命ぜられたが、不幸にして病のために延期して遂にその實現を見なかつた。明治三十五年一月、文學博士の學位を授けられた。同じ年の十月一日、樗牛は鶴岡の實父齋藤親信に一通の手紙を送つた。それは種々の用件をしたゝめたものであるが、後段に次の一事が記されてある。

豫め得御意度一事有之候。人は何時死ぬるやも不被測——中略——。身後の事御依頼致おき候もあながち無用には有之間敷と存候。先づ此度は墓地の事申上候。駿河國清水港附近龍華寺と申すは三保の松原より富士山への眺望本邦無比と存候。私も數回遊覽し常に慕居候土地に有之候。若し小生死後に相成候はゞ右龍華寺に埋葬相願度候。素より故郷には祖先の墳域も有之候事ながらかの陰鬱なる禪宗寺は私の氣には如何にしてもかなはず是非々々右願の通に被成下度候。龍華寺の宗旨は日蓮宗には候へども宗門の異同などは御かまらなく御許可被下候。日蓮上人は私の平素崇拜する一大偉人にて其門末の寺に埋らるゝは何かの因縁と喜可申候。——中略——。兎角の御異存は被爲有候やも不被測候へ共此事は私の頑固なる願に候間新シ町とも御相談是非御許可被下候。

「新シ町とも御相談」の新シ町は高山家のことである。

右の如く、樗牛は駿河灣に臨む風光明媚なる丘を選んで、死後そこに埋葬せられんことを實父並に養父に懇願した。しかも、いくばくもなくそれが遺言とはなつたのである。

文明批評家として、明治中葉に於ける我が國の文化に特異なる貢獻を果した高山樗牛がこの世を去つたのは、明治三十五年十二月二十四日である。その日の正午、高山樗牛は神奈川縣、平塚杏雲堂病院に於て昏睡状態におちいり、午後一時三十分、遂に逝いた。享年、僅かに三十二。人生は短く、藝術は永し。

とこしへにして且つ偉大なる生前の業績を慕ひ、龍華寺に杖を曳き、墓前に低徊して去る能はざる者今尙絶える日がない。墓碑銘に曰く「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」と。

### 十七 莊内の温泉

温海温泉は停車場から温海川をさかのぼること二十三町、山ふところにある温泉郷である。

温海川には晝も河鹿が鳴いてゐる。その谿ぞいの道が坦々として

いて、自動車がいつもなめらかに走つてゐる。矢筈山を右に見ながら、鍵のやうにくつきり道が左に折れると、目交まじりにぬつと温海嶽が現れる。そして、その麓に如何にも湯の街らしい屋並が見え始める。湯の宿すべて二十數戸、鄙びた温泉場である。

此處の名物の一つは朝市である。それに就いては田山花袋の紀行文の一節を挙げる。

「何です、あれは？」

朝早く俄かに起つた騒がしい人聲を聞き附けた私は、かう言つて丁度室に入つて來た女中に訊いた。

「あれですか、朝市です。」

「え、朝市？ 朝市が立つんですか、あゝやつて毎朝……？」

湯から上つて来て、私は外へと出て行つて見た。私は不思議な氣がした。そこにはあらゆるものが並んでゐた。野菜もあれば、魚類もある。今とれたばかりのやうないきの好い小魚もある。さうかと思ふと豆腐やがんもどきを賣つてゐる。納豆もある、こんにやくもある。その一方でふかし立ての暖かい饅頭も賣つてゐる。かれ等は皆海岸の方から籠だのふごだのに、さうしたものをに入れて擔いで來たり、または荷車に一荷載せて來て、それをそのまま、店にして並べて賣つてゐたりするのであつた。そしてかういふ人達は皆自炊の湯治客をあてにして、かうして商賣してゐるのであつた。

さて、この朝市が脚本「ジャブ〜コント」の一部として昭和九年八月、寶塚大劇場に於て雪組により、同九月、同劇場に於て月組により、同十一月、東寶劇場に於て雪組によりそれ〜脚光を浴びた。

湯田川温泉は、鶴岡市から凡そ二里、バスの便がある。井岡などの丘に沿うた道は、初秋・晩秋の候ことに詩趣に富み、ドライブによく、また徒歩に好適である。

田山花袋がその著「温泉周遊」に「湯田川は丘陵の中の温泉場といふことが出来た」と記してあるやうに、緑の丘に圍まれた靜かな温泉場である。街から直ぐ石段を登ると由豆佐賣神社があり、名木の大銀杏があることなども、この温泉場らしい好ましきである。

湯野濱温泉は電車によつて、善寶寺を過ぎ砂丘を越えたとすぐである。こゝは海の温泉郷といふべく、釣によく、また海水浴に適してゐる。もとは浴場が二ヶ所にだけしかなく、上湯下の湯といふのがそれである。然るに近來、旅館の戸毎に内湯が出来て、この温泉場の面目を一新した。

砂丘の西瓜・水蜜桃・海の新鮮な魚貝類が容易に供給されることも湯

野濱温泉の特長といふべきであらう。湯野濱を俗に莊内の三温泉といひ、交通の發達と共に、東  
 温海・湯田川・湯野濱を俗に莊内の三温泉といひ、交通の發達と共に、東  
 京・大阪方面の浴客漸くその數を増し、郷土の温泉から日本の温泉へと  
 進歩しつゝあるのは喜ぶべきことである。

十八 郷土巡り

(遊覽バスに乗りて)

心朗らかに空碧み  
 行くや莊内觀光の  
 車上ゆたけき憧憬に  
 鶴岡を西東  
 春は櫻の花の雲  
 夏は清波に月碎く

長堤遙か見渡して

羽黒街道ひた走る

仰ぐや朱の大鳥居

松原長き神路坂

越ゆればやがて鎌倉の

歴史は古き黄金堂

隨神門前降り立ちて

身褌も清き祓川

五重の塔は天慶の

昔を語るよすがなり



菅原堤のくらく

老杉暗き石階を  
頭上に仰ぎ登りつめ  
出羽の宮に額づきつ  
蜂子の皇子の御墓にも

海拔六千五百尺

奇しきたふとき月の山  
來迎雲に懸りては  
身も上天の心地して

鐵の梯子に身を託し  
含滿瀧を越え行けば  
五味湧き出づる靈湯に



袂をぬらす湯殿なり

車は早も三山を  
後へに下る梵字川  
清き流れに照り映ゆる  
紅葉の名所訪ねつゝ

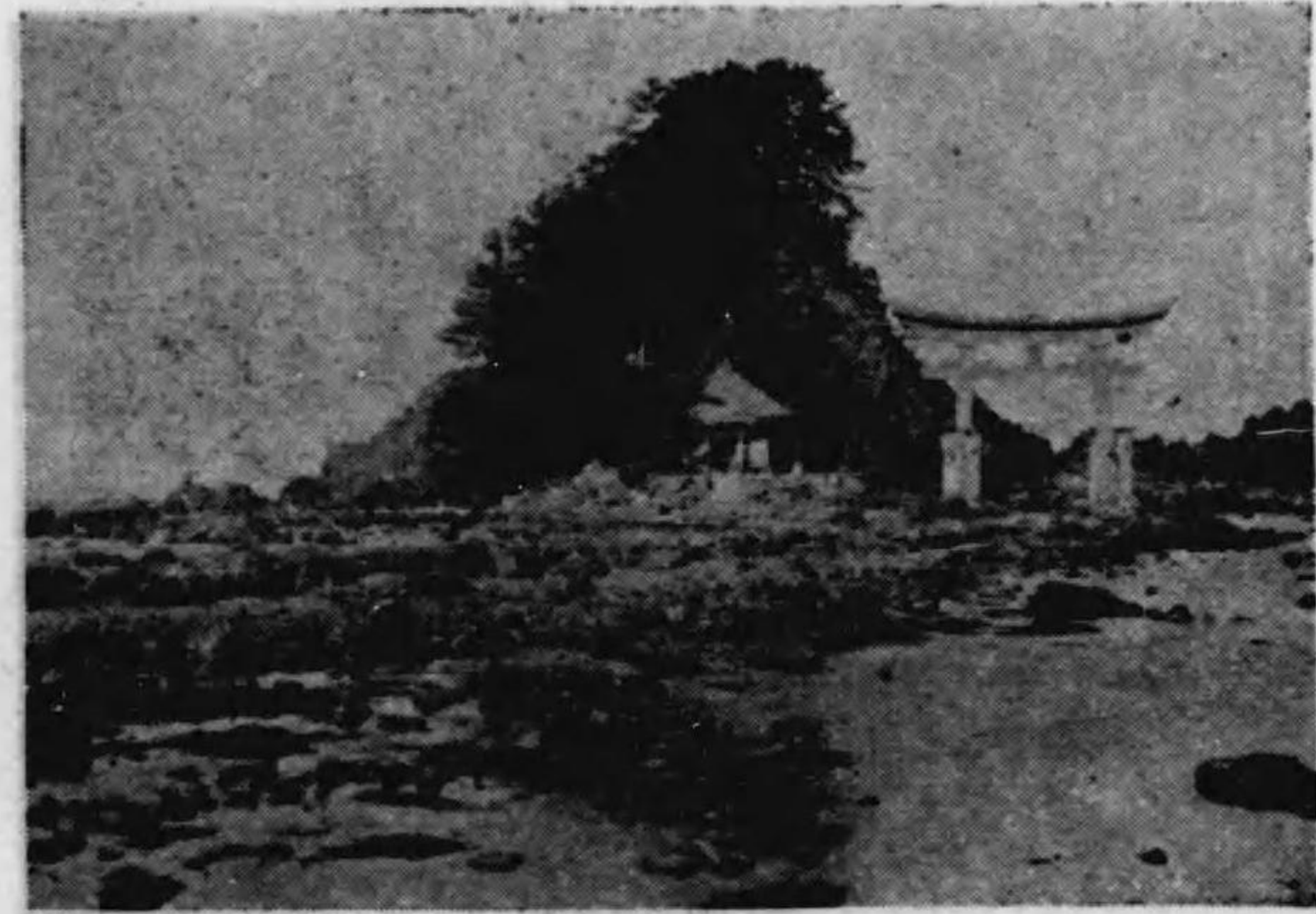
行くはかぐはし楠の  
縁も深き高坂に  
建てし道場楠公館  
憩ひて仰ぐ金峯山

裾を巡りて湯田川の



楠 公 館

清き出で湯に汗流し  
 矢引の峠越え行けば  
 豁つと開くる日本海  
 水天連なる海の果  
 遙かに浮ぶ佐渡が島  
 車は進む九十九折  
 沖行く舟の見え隠れ  
 海水浴に名を得たる  
 風光明媚の鼠ヶ關  
 やさし乙女の舞姿  
 辨天島に陽はをどる



念珠園辨天島

車かへして行く先は  
 かじか鳴くてふ温海川  
 山ふところに湧き出づる  
 温海湯の街華の町  
 新興ラサの炭山に  
 産業戦士を訪ね来て  
 暮坪立岩俵石  
 海濱數里移り行く  
 氣比の社の山裾を  
 わけて廻れば由良の海  
 渚に立てば何がなし



サラの川田礦山

白山島なつかし浪頭

釣手數多の加茂の磯

海の神祕は水族館

出動準備いそがしく

港に集ふ漁船

霞に淡く砂濱は

莊内富士の裾に入る

旅の疲れを湯野濱に

洗ひ流して善寶寺

大堂伽藍松青き



龍澤山の靈あらた

尾浦城址の太平山

若葉紅葉の風情あり

酒の大山後にして

豊かに稔る野を行けば

車窓にめぐる四圍の山

唯麗はしくなつかしき

一望千里豊穰の

莊内平野のたゞ中を

産業道路坦々と

すべる車も心地よし

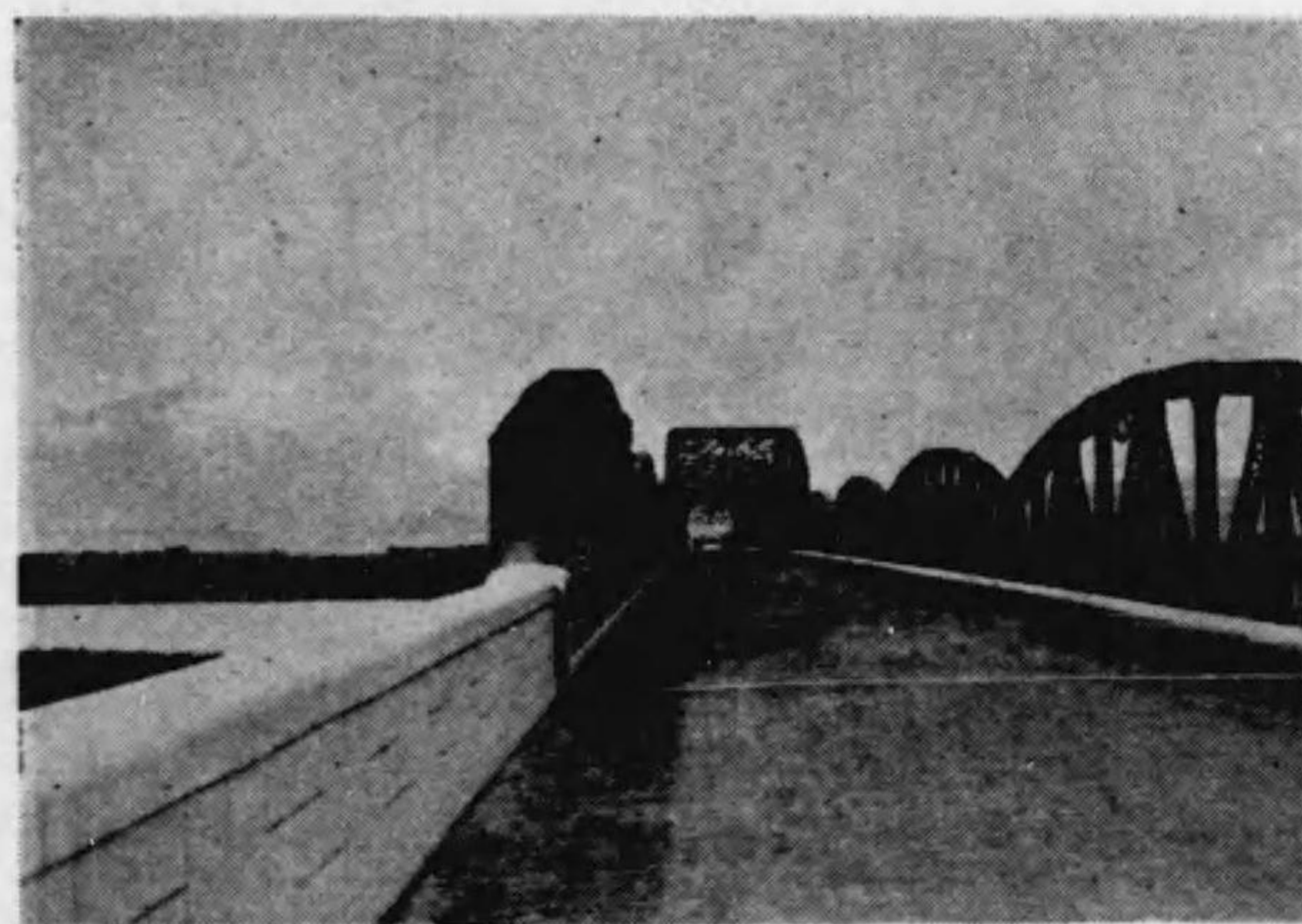


善寶寺

白帆の上を兩羽橋  
 御製畏み最上川  
 山居櫻の並木道  
 稻荷鳥居の鮮かさ

港酒田の日和山  
 眼下に浮ぶ船の數  
 舟の通ひ賑かに  
 積み荷揚げ荷の唄をきく

山を下りて詣づるは  
 日枝の社に海向寺  
 光丘神社は光丘の



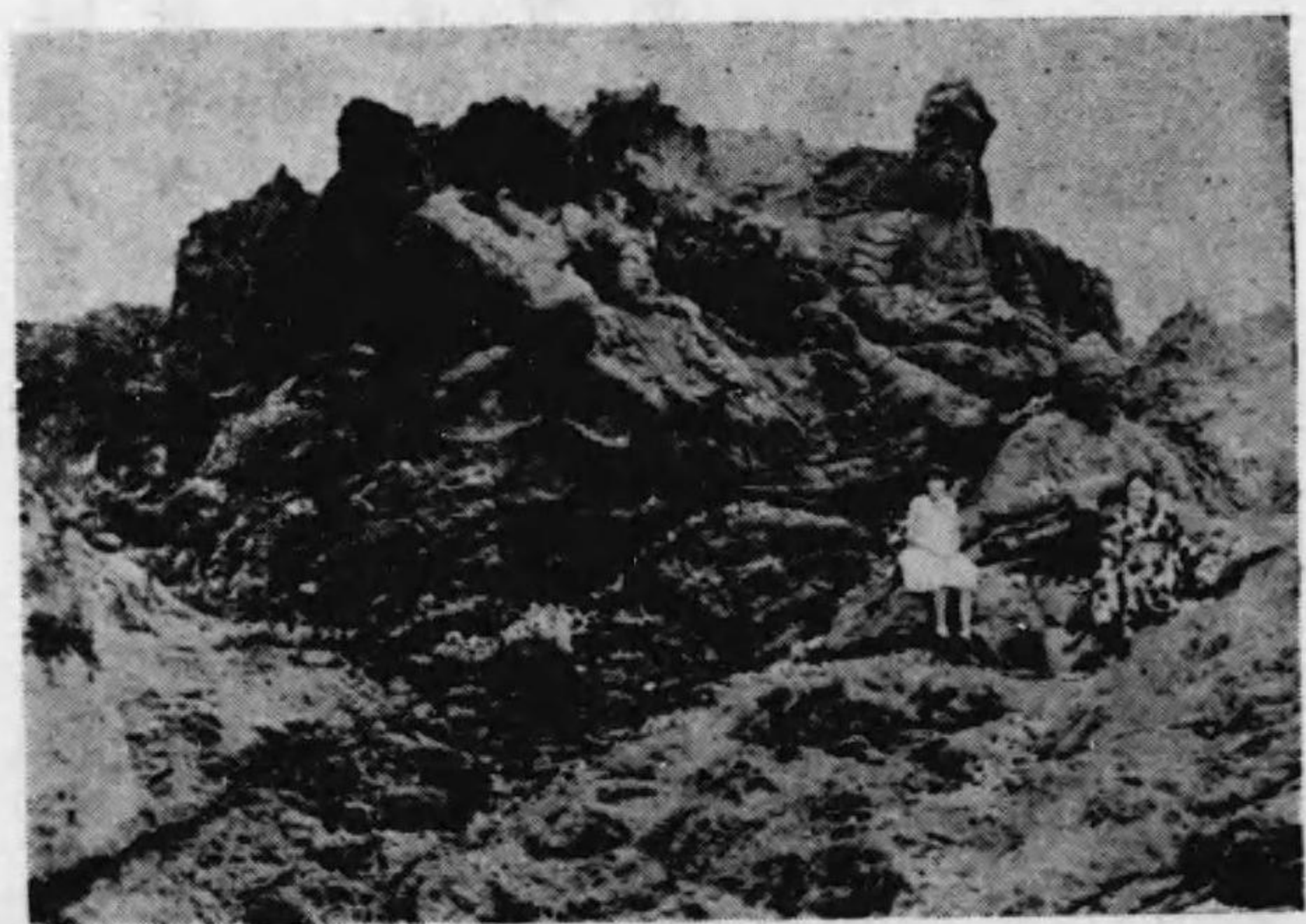
橋 羽 兩

心も高き松の風

青き月夜の濱千鳥  
 鳴く音淋しき大濱も  
 文化の光燈臺と  
 共に輝く寶船

呼ば、應へん飛鳥や  
 吹浦かけて夕涼み  
 尊き十六羅漢岩  
 こと訪ふ折の來れかし

鐵路にそひてかぢをとり



岩 漢 羅



南平田の郷に入り  
沃野美田の中行けば  
車窓にはらむ風ゆかし

東翠巒愛澤の

奥山深き十二瀧

かけて探るも忙しく

再び渡る最上川

交通要路の余目や

米の藤島夢と過ぎ

月見は窓に三川橋

はやなつかしの鶴ヶ岡



よろこび迎ふ街の灯に

うれし旅路も恙なく

思出多き観光の

御代の恵ぞ有難き

### 十九 鶴 岡 市

清流赤川が潤ほす豊穰な平野の中央、遙かに出羽の三山を東に仰いで敦朴剛健、父祖の歴史に輝く城下町は其の名もゆかしい鶴岡市、今や戸数は七千二百、人口三萬七千、躍進の途上にある。

その名

昔の大泉郷、中世は多くの武將の居城地となつて早くより市街を形造つて居たが、元和八年、酒井忠勝公が信州松代より封を此の地に移されてから、明君が輩出し、明治の始まで、酒井家居城の地として名が知ら

れて来た。そのはじめ慶長の頃、山形の最上義光この地大寶寺城を攻略し、名を鶴ヶ岡城と改めてより、町をもさうよんで、酒田の龜ヶ崎と相對して縁起のよい名の町とはなつた。

城下のおもかげ

市街をそれからそれへと歩を移せば、三日月が淡くお城址の老杉の梢にかゝつて、何がなし昔の名残りさびしいものがある。お城を圍んだお堀の一部があやめ畠に、蓮さく堀に、百間堀が黄金花さく稻田に變つてゐるのは目についていちじるしいものであるが、お城の稻荷の土手、杉の根のあらはに見える小山などは昔時のおもかげをととめてゐる。

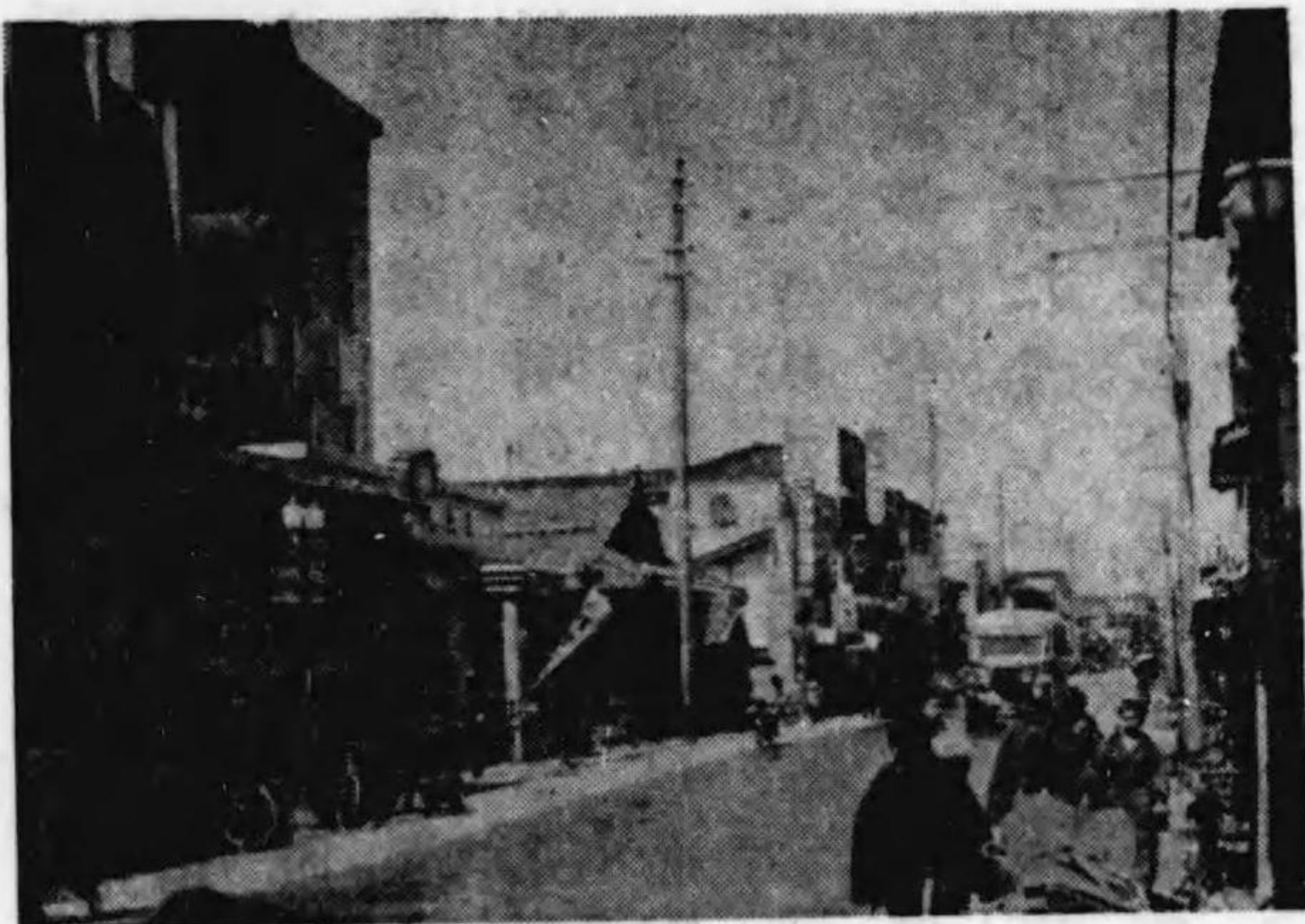
家中新町・鷹匠町・鍛冶町・二百人町等、また、稻荷小路・田元小路・長山小路・伊豫様小路・薬湯小路等の町や小路の名にも舊藩時代の名残をととめてゐる。

町の繁華

朝は薄暗い中から威勢よい海女の聲がひびく大山街道、先頭の馬丁が喇叭をふいて温海街道を悠長に走るがた馬車、白衣の道者が杖を曳く酒田街道に羽黒街道、町先の休石に夕日を浴びて疲れた足を休める旅人の姿などはとうの昔に消えて、鶴岡を中心に、そこら近郊他郡市に通ずる文明の交通網が完全に發達して、汽車・電車・自動車の往來が頻繁で、旅客ばかりか魚類・農産物・木炭・野菜などを満載したトラツクが砂煙を立て、疾走する。

試みに今鶴岡驛のプラットホームに立つて乗降客を見ると、その數のおびたゞしいのに先づ驚く。この附近の驛ではこゝほど客の雑沓を見せるところはなく、乗客はともすると其の方向にまごつくことがある。

停車場通りから眞直に立派な舗装道路が出来て、アスファルトやコ



鶴岡銀座座

ンクリートの坦々たる道を乗合自動車や貸切自動車がひつきりなしにとんでゆく。三日町・五日町の俗稱通町は市内で最も繁華なところ、店もきれいにそろつて、いつの頃からか銀座の名が ついたが、をしい事に道幅がせまい。道幅が狭いために殊に雑沓を呈してゐるのは荒町通りで、堂々たる大泉橋に向ふ通りとして稍不似合である。

お宮まうでお寺詣り

電氣會社をはじめ、銀行・呉服店の大構

へな建物が櫛比して、それに道幅もかなり廣い一日市町通りや、料理店が軒を並べてゐる七日町通りも繁華な町である。



春日神社

ある。

三日町縦の通りを西に向つて真直ぐに、青銅の大鳥居のかなた、舊城

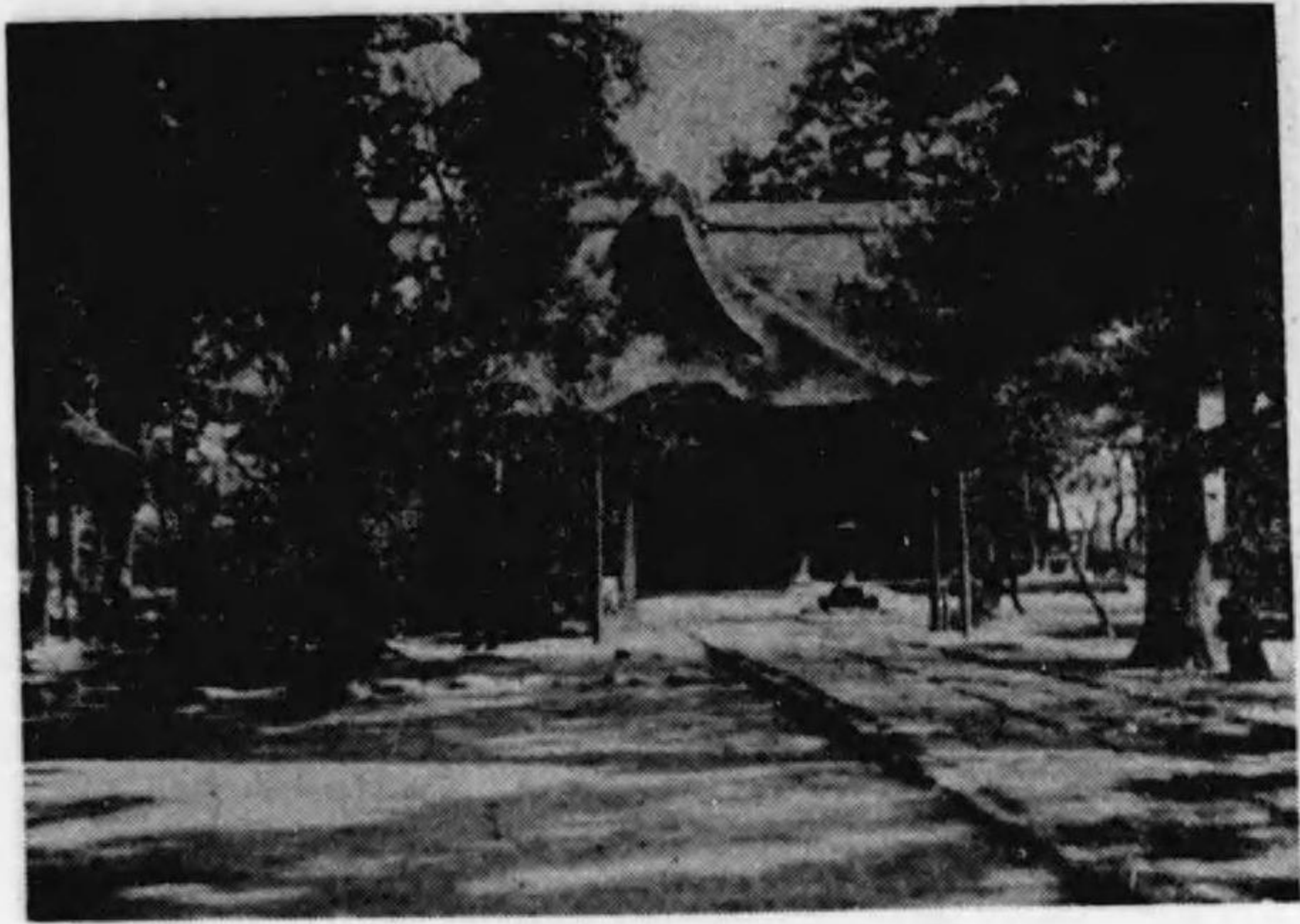
址に仰ぎ見る縣社莊内神社は酒井家先祖三代と中興の主忠徳公を祀つてゐる。大名行列で名高い夏の例祭は市内お祭の最終を飾る華である。

櫛の大木の間に見え隠する朱の鳥居は郷社春日社頭に一人のおもむきをそへてゐる。天兒屋根命・武御雷命・經津主命・比賣命が祭神で所謂四所の宮である。五月八日が例祭で市内祭禮のさきがけをなしてゐる。四所の宮獅子舞の笛太鼓、鶴岡の春はそこからあけてゆくので

鳥居をくゞり、緑濃き森の中、稍長い石の道を歩いて縣社太宰府神社

に額づけば、思ひは遙か延喜の昔にはせて薄命の忠臣菅公のおもかげに接する氣がする。五月二十五日の例祭は編笠假裝、所謂「ばけもの」で名高く、新緑爽かな中を遠近から集る參詣の群衆で雑沓を極めるのである。

境内に赤い辨天社があつて池に多くの龜がある。有名な縣社日枝神社、市内の雑沓に砂ほこりとなつて荒町通りを歩く人も、こゝのお宮の前では敬虔な心に立ちかへつて行く。例祭は五月十



太宰府神社

四日、小眞木原頭社殿宏壯に鎮座まします郷社日枝神社の例祭の四

日あとである。



酒井家墓所

酒井家の舊菩提寺大督寺に隣接して酒井家代々の墓所がある。毎月の御忌日には門がひらかれる。絹の様な春雨の中を藩祖代々の墓をとぶらへば、雨に濡れた墓石に往時のことどもが多く偲ばれる。

秋の日が古い山門に最後の輝きを落せば墓石をなでる風もつめたく、文化年代の血腥き仇討の話がさゝやく總穩寺。老杉の木蔭に訪ねる三つの墓石、それよりも、今は近年たてられた兩義士の銅像

が參詣人の目を惹くのである。

かさこそと落葉の中を清正公で名高い七日町裏、本住寺に到れば、本堂裏に加藤清正公夫人と其の子忠廣公の墓が土藏造の廟内に在つて

香華の絶えることがない。

内川端にのぞむ寺門をはいつて、かなかな蟬のなく木の下に、天明の慈善家鈴木今右衛門の墓を弔へば、こゝ正覺寺の住職は恵心僧都の作にかゝる閻魔の話を開始して、つきない傳説のかずくを語る。

鐘に明け鐘に暮れて、鶴岡市民は常に常念寺のあの時鐘をきいては幸福に其の日を送るのである。身に魂にしみこんだその鐘の縁起も深いものがある。

むかしの跡



總釋寺山門

十日町鶴園橋を渡つて馬場町街路の右に見える明治時代の洋式の

常念寺の鐘樓



建物は昔の西田川郡役所で、明治十四年九月二十四・二十五の兩日、明治天皇東北御巡幸の折、行在所となつた址で、昭和八年、文部大臣から指定された史蹟である。庭前の老松は昔を語り、顔に、左右の紅梅は市内梅花のさきがけをなして行人の足をとゞめる。

今は上肴町某家の裏庭にあたる所、松の間に金峯山を配して風流な庵がある。芭蕉庵とも自然庵ともいつて四疊と八疊の茶亭である。庭井戸に近く、珍らしや山をいではの初茄子と俳聖芭蕉の作を刻んだ石の碑が立つてゐる。

鶴岡滞在中の芭蕉がゐた所ともいはれてゐるが、弟子蘆元がむすんだ庵であるとの説が有力である。

三百年の歴史を知つてゐるのは城址に聳える杉の老木だけで、鶴ヶ岡城は明治の初に取毀たれ、今は舊本丸址に莊内神社が鎮座する。三日月淡き杉の梢を仰いで、はかなき夢の興亡史を思ひ浮べる。

國を治めるには教育が大切であると考へた白井矢太夫の進言によつて建てられた酒井藩の學校は致道館といつた。文化十二年の建設にかゝるその致道館址こそは今の朝陽第一小學校で、當時の講堂御入りの間・正門などがそのかたみを残して、數本の老松が昔を語つて天を摩してゐる。

折々の花

鶴岡の花は何といつても櫻である。花の鶴岡といはれる程公園を埋める櫻の雲、お堀に映る花の影、若草萌える菅原のさくら並木、春の四

月は町中櫻に酔つて散歩の群が多い。護國神社前の花吹雪はまた日



公園のさくら

本精神を象徴するにふさはしい光景である。昔の朝陽高等小學校址、今は市役所門前の八重櫻は市内櫻花のさきがけをなし、是より鶴岡花の世ははじまる。

梅の花といへば、士族屋敷の垣から道路に一輪二輪の清楚な綻びを見せる優雅もなくはないが、やはり何といつても行在所跡のが人の目につく。

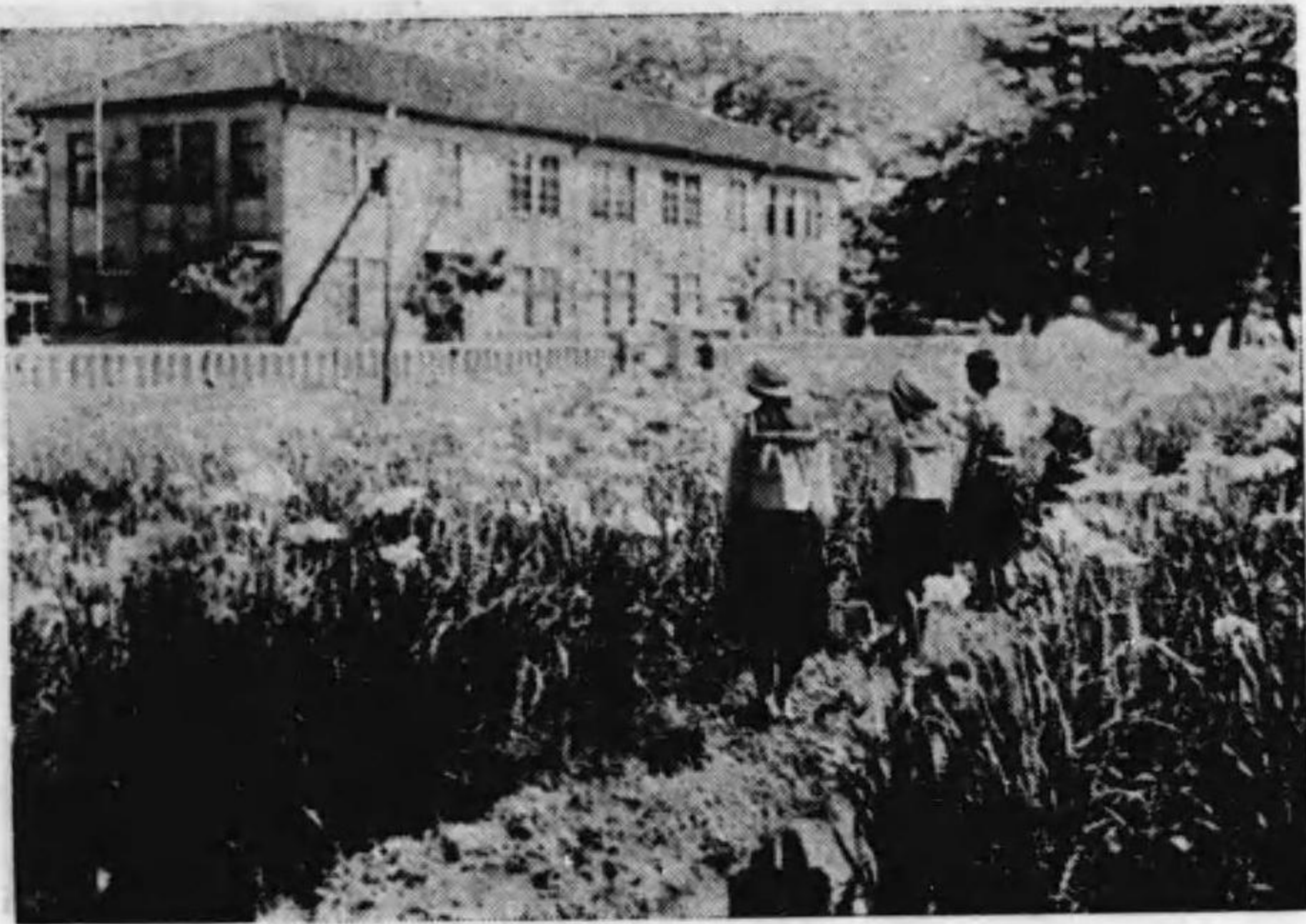
六月、公會堂に飾られる教育繪畫展覽會の行事の頃に前後して、公園お濠あとに妍を競つてさく花菖蒲は、鶴岡民謡や郷土かるたにもたゝへられて季節の情緒をそゝつてゐる。

更に城址をめぐつてお濠にさく白蓮・紅蓮、八月の神社祭りも過ぎた

朝まだきにたづねれば、露の玉をやどした大きな葉の間に朝靄にぬけ出して、紅白、目も鮮かに蓮花はうかぶ。蓮の情緒はどうしても朝にある。

「金峯おろしに雪消えて青龍寺川さ、やけば若草萌ゆる小眞木野に菜の花さいて雲雀なく」「菜の花さいた新田田圃」とうたはれ、「菜の花や月は東に日は西」の句を思はせるのは小眞木野と東郊新田田圃の菜の花である。

公園の桃、海老島のチューリップなど



めやあの園公

花の名所は随分多い。

### 名産

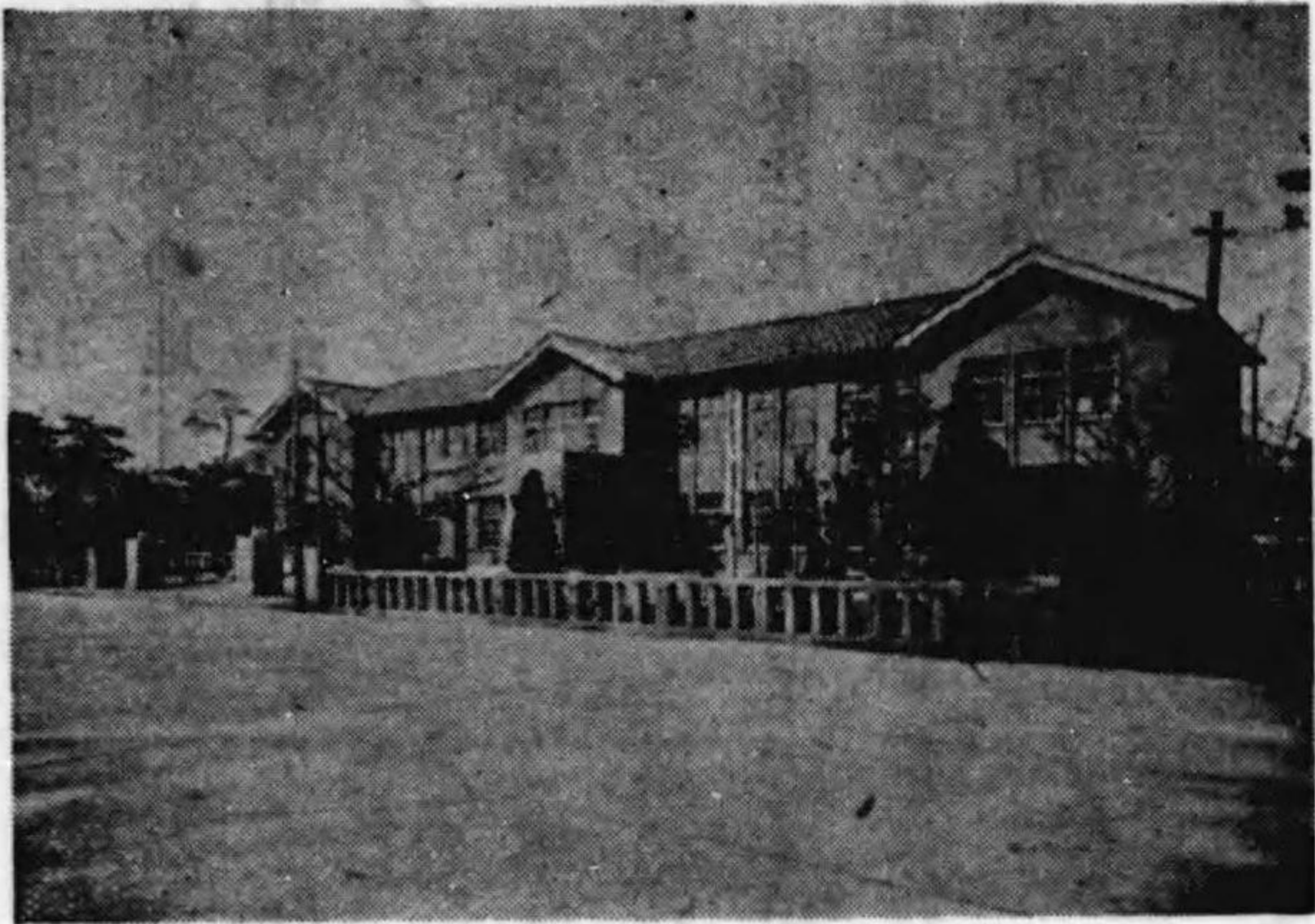
「唄は流れる機場の窓に」と民謡にもある様に、今の鶴岡は縣下で名高い機業の地、工場の數もかなり多く、凡そ二千臺の力織機が動いて絹や絹綿交織が二千人餘りの男女工の手によつてずん／＼産出されて行く。

黒柿細工や漆器の竹塗は幕末から明治初年にはじまつた本市の特産で、硯箱・蓑入・お盆・短冊箱など頗る精巧を極めたものがある。

製法技術が殆んど一子相傳の如き繪蠟燭も古來當地の特産で、彩色鮮麗の草花意匠は神佛に灯すだけではなく、裝飾用として外人にも愛玩されてゐる。

怪奇な板獅子に、可愛い子寶いづめ子、共に郷土玩具として名高く、莊内燒麩に紫蘇卷は産額の多寡よりも、そのすてがたい風雅な味が愛されて居り、菓子類では年額二十萬圓餘の多い中にも、小豆菓子こそは昔

からの名産になつてゐる。



る。

「土産買ふなら大寶館」といつてゐる様に、市物産陳列場に入ればこれらの名産特産は大てい揃つてゐて一ケ年の入場者約二萬人、販賣價格が七千五百圓を示してゐる。

市役所

馬場町にある黄褐色の宏壯な建物こそ躍進鶴岡の政廳、市役所で、昭和十二年の建設にかゝる。今市役所の吏員は七十人餘、庶務・學務・稅務・水道・社會・産業等の課に分れてそれらの仕事に執掌して

## 二十 莊

### 内

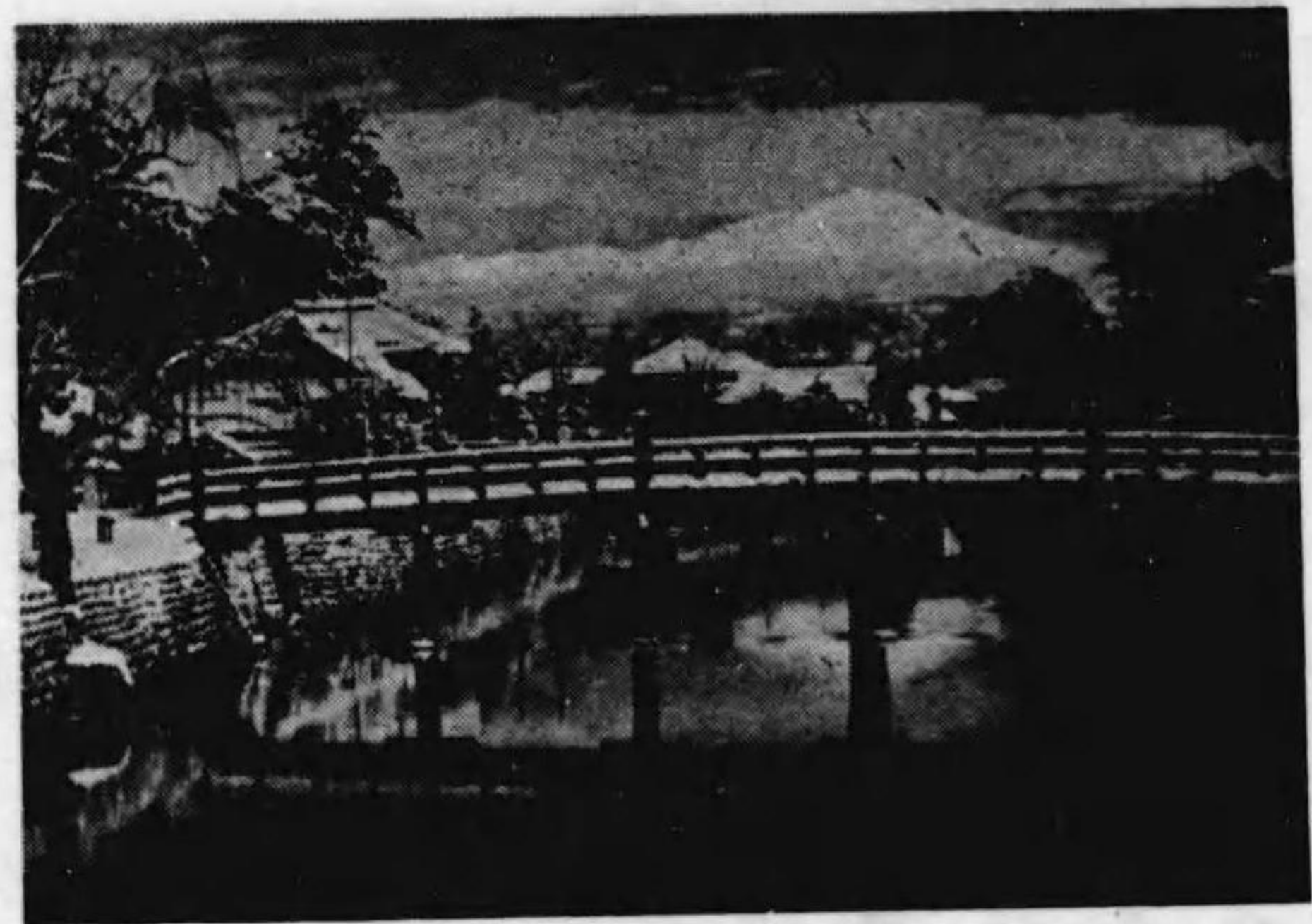
莊内は四方山で限界をなして居るのであるが、その限界内は、ところどころ小山や丘があつたり、斜面があつたりするやうな複雑な平らかさでは無くて、一樣に何等の起伏を持たない單調な平らかさで行き渡つて居るのです。しかも、此の廣々とした平野は、斑らに散在して居る村々の家を取り圍んで立ち並ぶ樹木や、鎮守の森の外は、殆んど一樣に稲田として耕されて居るので、更に單調味を加へて居るのであります。花も散り、田植もすんで、到る處だゞ緑一色に蔽はれ、農夫が一樣に田仕事に従つて居る晩春・初夏の眺、やがてその緑が黄金色に變つた初秋の眺、稲が刈られ草も枯れ、木の葉も落ちて大地があゝの單調の極みともいふべき皮膚を露出し、厚い灰色の雲が天空を鎖しつめてゐる荒涼茫漠たる眺、見渡す限りたゞこれ白皚々たる雪に蔽はれた莊嚴な冬の眺、



さうした單調な移り變りを繰返してゐるのであるが、其所に又他では到底味はふことの出来ない貴い自然の味ひがあり、又私達に大らかな安らかさと、ゆつたりした落ち付きと、恵まれた豊かさとを與へるのであります。

田植もすんで田には満々と水がはられ、苗もすく／＼と伸びた青田の上を風がそよぐ瑞々しい晩春の頃の眺、又稲が伸びられるだけ伸びてふさ／＼した豊かな穂が垂れ初め、やがてさらさらと音して黄金の波が絶え間なく騒ぐ晩夏の頃の大平野の眺、そこを通ずる平坦な道を辿り行く時の氣持程、私達に安らかさと豊かさとを與へるものはありません。とりわけ、吹く風が肌にくれ／＼と氣持よく感じられる初秋の月の夜は、豊かに稲の穂波が揺れ動いて、湖上に浮んだ浮島の様に見える村々から、豊秋を喜び迎へる踊りの太鼓の響や、多勢の若い男女の歡樂に酔うた囃し聲が風につれて、聞えて來る田圃道を彼方へ／＼と

辿り行く時の快さは何とも言はれません。

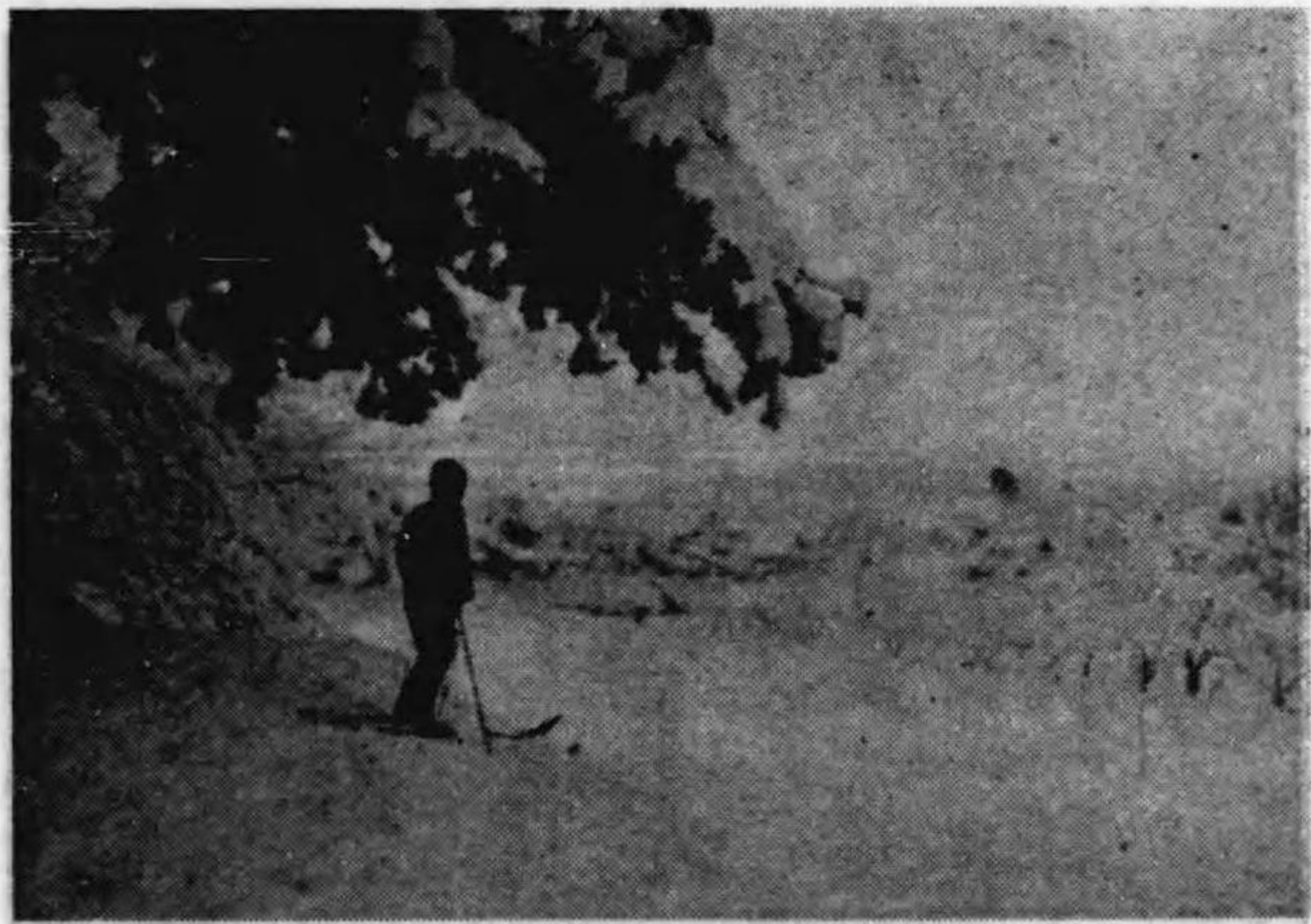


鳥海山の遠望

莊内の持つ自然の美しさは空と山と平野で織りなす諧調の美に見られます。春霞に夢の如くかすむ鳥海を配した赤川堤の櫻、日本海の蒼波の彼方、紺碧の空に拭ふが如く天そゝる出羽富士の姿、晩秋の夕日に映えて金色に匂ふ月山の雪膚、燃える金峯の紅葉など、雄大・莊嚴・華麗・崇高の美そのものであります。

永い冬籠りから解放され、土の香りの懐かしさに田圃に出ると、遠山の裾も薄紫に煙つて居ります。山蔭の雪も解け初めた事であらう。柔かな堤の黒土をもたげて、露の臺が緑の芽を吹

いてゐます。枯葉・枯草の間にも陽炎が燃え、すべてが永い沈黙からめ



雪の莊内

ざめ、今や静から動に甦らんとしてゐる時、獅子舞の太鼓の音が子供の喜びの聲にからんで流れて来るのは雪國の春ならでは味へぬ情緒であります。月山の頂きに白い東風雲がかゝると、山側を降下したその東風が壓縮されて乾燥した暖かい日和風になります。月はまるで深い海の底に沈んで居るかのやうな、靄にとざされた朧月夜に、梅も櫻も桃も一夜の中に蕾をふくらませます。それがやがて一時に咲き綻ぶ春の風情も、春遅い北地でなければ味へぬのであります。霜ふり木枯吹き初め、母狩・金

峯にも雪が下りると、羽黒の勸進の法螺貝の音がうら淋しく巷に震へます。人々はもう雪圍ひに忙がしく、何時か霽も小雪に變ります。かうなると、寒い西北風が雪を伴ひ、日本海に怒濤を捲いて砂丘を越え、忽ち莊内特有の猛吹雪が天地を席捲するのであります。霏々濛々天日を掩つて終日吹きまくる様は、凄壯そのもので、陰鬱な日が幾日もくつき、一年の三分の一は雪に埋もれ、人々は黙々としてこの自然との闘ひを闘ひ抜くのであります。

郷土讀本 終



郷土史年表

紀元	天皇	年號	國	史	郷土史
七七一	景行	四〇			
一二六〇	推古				
一三七〇	元明	和銅三	奈良遷都		日本武尊蝦夷を平ぐ
一三七二					三十二代崇峻天皇第一子蜂子皇子羽黒山を開く
一四五四	桓武	延暦一三	平安遷都		九月、出羽柵を設置す
一四四五					僧空海湯殿山を開く
一八四四	安徳	壽永三			武藤家莊内を領す
一八四七	後鳥羽	文治三			二月、義經、兄頼朝に讒懸せられ辨慶等と山伏に假装し北越より念珠關に入り三瀬・大寶寺を経て清川に出で最上川を遡る
一九九三	後醍醐	元弘三			三月、僧西行羽黒山・袖の浦に遊ぶ
二〇〇二	後村上	興國三			中院具信出羽國藤島城にありて將軍北畠顯信と期を約し常陸の急に赴援せんとす
二〇〇四					藤島城陥落す。具信飽海郡河内城に退き回復を謀る
二〇〇七		正平二			宇津峯城陥る。北畠顯信、守永親王を率じて出羽に走る。出羽の國立谷澤に入り出羽の官軍を振起す

郷土史年表

二〇〇八		正平 三	楠木正行戦死す(四條畷の戦)	北畠顯信立谷澤城に據る
二〇一一		六		三月、顯信守永親王を奉じて兵を田川郡に擧ぐ。官軍大いに振ふ
二〇一六		一一	尊氏死す	十一月、顯信兵を藤島城に擧ぐ。城陥り顯信遁る
二〇一八		一三		顯信、藤島落城後飽海郡生石村延命寺に潜伏す。大物忌神社に天下復興の祈願を爲す
二〇二一		一六		足利義詮、田川郡大泉庄を上杉憲顯に與ふ
二〇四〇	99 後龜山	天授 六		鎮守府將軍從一位右大臣北畠顯信薨す。年八十四
二〇五二		元中 九		楠木正儀の男正勝(傑堂能勝)出羽に巡錫、高坂に洞春院を建つ
二一二七	103 後土御門	應仁 元	應仁の亂起る	大寶寺城主武藤澄氏、砂越氏維と東禪寺に戦ふ
二一七二	104 後柏原	永正 九		十月、砂越城主氏維、武藤澄氏と戦ひ敗死す
二一七三		一〇		酒井忠次京都に生る
二一八七		大永 七		武藤義氏大泉庄司たり。尾浦城を築く
二一九二	105 後奈良	天文 元		武藤義氏、武藤屋形を相續して尾浦城に居る
二二三三	106 正親町	天正 元	信長、將軍義昭を追出す(足利氏亡ぶ) 本能寺の變	三月、尾浦城主武藤義氏、大寶寺城代前森藏人等の叛逆に遭ひ高館山の麓新山森にて自刃す。年三十三
二二四二		一〇		八月、越後上杉景勝の將村上城主本莊繁長莊内に攻め入り尾浦城を圍む。大寶寺前森藏人・酒田城東禪寺筑前出でて十五里ヶ原に激戦す。筑前戦死し弟右馬頭千安川の繁長の陣に斬り込み之に死す。繁長莊内を攻略し武藤家亡ぶ
二二四八	107 後陽成	一六	秀吉天皇を聚落第に迎へ奉る	秀吉、上杉景勝に命じ莊内を檢地せしむ
二二五〇		一八	秀吉北條氏を亡ぼして全國平定す	

二二五一		一九		五月、直江兼頼、藤島の一揆を攻略し城を破却し大寶寺城を修築し莊内上杉景勝の所領となる
二二六一		慶長 六		八月、幕府莊内を最上義光に領せしむ。五十二萬石
二二六三		八	家康征夷大將軍となる	義光、大寶寺を改めて鶴ヶ岡と稱し城廓を修理す。東禪寺を龜ヶ崎、尾浦を大山と改稱す
二二七二	108 後水尾	一七		義光、狩川城將北楯大學利長をして狩川溝渠を開かしむ。大學堰之なり
二二八二		元和 八		最上氏國を除かれ酒井忠勝、信州松代より莊内十四萬石に移封す
二二九三	109 明 正	寛永 九		十月、忠勝田川郡小國口より莊内に入國す
二三一				加藤清正の長子熊本城主加藤肥後守忠廣(五十二萬石)莊内に配流せらる
二三一三		承應 二		六月、鶴岡常念寺に着く。八月、丸岡請居に着き、酒井忠勝之を監護す
二三四四	112 靈 元	寛文 四		六月十七日、加藤忠廣の母(清正夫人)正應院丸岡の館邸に卒去す
二三四九	113 東 山	元祿 二		六月八日、忠廣丸岡の幽居に卒す。年五十七
二三七二	114 中御門	正徳 二		莊内を田川・飽海二郡となす
二三八〇		享保 五		六月、松尾芭蕉莊内に来る
二四三二	118 後桃園	安永 元		孝子慶玉早田村に生る
二四四三		天明 三		莊内大凶作、以後數年間大風火災頻々たり

二四四七	天明七	松平定信皇居御造營の命を受く	六月十一日、小關三英生る
二四四八	天明七		忠徳、五人組掟を修正して遍く遵守せしむ
二四四九	寛政元		忠徳、禁裏御造營費を獻金す
二四五六	八		農政改革、領民への貸付米六十萬俵、金百萬兩全免の徳政を布く
二四五七	九		五月、忠徳將軍家齊の使として京師に赴く
二四六〇	二		忠徳、土風振興の爲學問所を創立し白井矢太夫を祭酒とす
二四六五	二	文化	藩校致道館を建立す
二四六六	三		九月二十二日、總徳寺にて土屋虎松兄の仇丑藏に復讐す
二四七一	八		六月、白井矢太夫卒す。年六十
二四七二	九		四月十五日、田邊龜次郎大矢敷を射る
二四七六	一三		九月十八日、酒井忠徳卒去。年五十八
二四九〇	元	天保	十月、清川八郎生る
二四九八	九		五月、小關三英自決す
二五〇〇	一		酒井忠器、越後長岡に轉封の命あり(十一月一日)領民轉封中止を訴願す
二五〇一	二		七月、轉封停止、莊内領民安堵の命あり
二五一一	六	嘉永	四月十三日、清川八郎江戸赤羽一ツ橋に於て凶刃に斃る
二五二三	三	文久	
二五二七	三	慶應	
			十月、徳川慶喜大政を奉還す

二五二八	明治元	戊辰の役起る	四月、莊内藩賊軍の名を負ひ國境清川を襲はる。莊内軍六十里越より攻撃して天童城を陥る。忠篤官位停止せらる。藩論出兵に決す。奥羽同盟なる。酒井吉之丞新庄城を攻陥す。村上・最上・越後・秋田各方面に出兵轉戦す
二五二九	二	東京に奠都す。版籍を奉還す	九月、降伏謝罪の書を呈し二十六日國境守備をとく。征討軍參謀黒田清隆鶴岡に入る。西郷隆盛鶴岡に入る。酒井忠篤開城降伏す
二五三一	四	七月、藩を廢して縣を置く	十二月、出羽國を分ち最上川を界として羽前・羽後の二國とす
二五三五	八	初めて地方官會議を開く	二月、領民若松轉封停止の請願をなす
二五三六	九		六月、忠實磐城平を賜はり知事に任ぜらる
二五三七	一〇	西南役起る	九月、藩名を大泉藩と改む
二五三八	一一		七月、大泉藩を廢して大泉縣とす
二五三九	一二	府縣會初めて開かる	十一月、大泉縣、松嶺縣を合併して酒田縣とす
二五四〇	一三		八月、酒田縣を廢し鶴岡縣を置く。鶴岡城を壞つ
二五四一	一四		山形・鶴岡・置賜の三縣を併せて山形縣としその廳舎を山形に設置し三島通庸改めて山形縣令に任ぜらる。朝陽學校創立す
			十月、鶴岡城址に縣社莊内神社を創建す
			郡區編成法發布せられ田川郡を分ちて東西田川二郡とす
			九月、鶴岡に第六十七國立銀行を創立す
			酒田琢成學校竣工す
			西田川郡立中學校を鶴岡に設置す
			五月、西田川郡役所新築成る

二五四三	一六	天津條約成立す。内閣の制定まる	九月、明治天皇御巡幸、二十三日清川小學校御泊、二十四日西田川郡役所御泊、二十五日酒田渡部左衛門宅御泊、二十六日清川小學校御泊
二五四五	一八	四月地方自治制（市制・町村制）布	五月、鶴岡朝陽學校自火焼失す
二五四八	二一	帝國憲法發布せらる	四月、月山神社官幣中社に列せらる
二五四九	二二	教育勅語下賜せらる	七月、町村制實施せらる。私立莊内中學校開設す
二五五〇	二三	清國に宣戰を布告す	八月四日、第四旅團長伏見宮殿下御成あり
二五五三	二六	下關條約成立す	十月二十二日、酒田大地震あり
二五五四	二七	北清事變起る	鶴岡米穀取引所創立す
二五五五	二八	日英同盟成立す	四月、鶴岡高等女學校創立す
二五五七	三〇	日露開戦す	鶴岡に莊内羽二重會社・鶴岡水力電氣會社創立せらる
二五五八	三一	韓國を併合す	九月二十日、鶴岡に初めて電燈つく
二五六〇	三三	歐洲大戰起る	莊内農學校創立す
二五六一	三四		八月十四日、閑院宮殿下東北御巡回の途次御成あり
二五六二	三五		十二月二十四日、高山樗牛歿す。年三十二
二五六四	三七		五月、鶴岡に輸出羽二重検査所新設す
二五六六	三九		一月、月山神社官幣大社に列せらる
二五七〇	四三		
二五七四	四三		

二五七五	四	即位大禮を挙げさせらる	六月十四日、莊内に初めて鐵道通じ清川驛開通す
二五七七	六	平和條約成立す	十月、大典記念に大寶館竣工す
二五七九	八	ワシントン會議開かる	高坂洞春院に楠公廟建立す
二五八〇	九		七月六日、鶴岡驛開通す
二五八一	一〇		四月、鶴岡工業學校・酒田中學校設立す
二五八三	一二	關東大震災あり	八月六日、赤川大出水あり
二五八四	一三		八月八日、秩父宮・高松宮兩殿下酒田より羽黒山へ御成あり
二五八五	一四		十月、黒森堀削起工す
二五八七	二	大正天皇大葬を行はせらる	羽越本線全通す
二五八八	三	御即位大禮を挙げさせらる	十月一日、鶴岡町に市制を施行す
二五八九	四		十月十四日、皇太子殿下行啓、酒田本間別莊に御泊、十五日鶴岡に
二五九〇	五	ロンドン海軍條約成立す	行啓せらる
二五九一	六		七月、黒森西山新川開鑿通水す

九月十七日、朝香宮鳩彦王殿下御成、酒田本間別莊に御宿泊、十九日鶴岡に御成小池別莊に御宿泊あり

七月、鶴岡商工會議所創立す

十一月、莊内電鐵開設す

七月二十四日、久邇宮邦英王殿下湯野濱温泉御成あり

四月二十六日、赤川三河橋渡初めを行ふ

八月二十二日、澄宮崇仁親王殿下酒田に行啓せられ本間別莊に御宿泊あり

411  
139

昭和十五年十一月三日編纂  
昭和十六年五月二十日印刷  
昭和十六年五月三十日發行

編纂者 山形縣鶴岡市馬場町鶴岡市役所内  
鶴岡市教育會

代表者 半田喜代藏

印刷人 山形縣鶴岡市三日町四九番地  
芳賀太郎

印刷所 山形縣鶴岡市馬場町甲三ノ内一ノ四  
鶴岡印刷株式會社

發行所 鶴岡市

郷土史年表

二五九三	八	國際聯盟を離脱す 皇太子殿下御誕生あり	四月一日、酒田町に市制を施行す。五月三十日、清川神社鎮座祭を行ふ
二五九四	九	滿洲國帝國となる	六月二十七日、元帥伏見大將宮殿下酒田に御成あり
二五九七	一二	支那事變勃發す	五月十八日、東伏見宮大妃殿下湯温海に御成あり 鶴岡市廳舎成る

終

